

魔法科高校の魔導士

ウィングゼロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あのJS事件の翌年エースオブエースと呼ばれる一人の女性は一人の子供を産んだ。その少年は母親に似て非凡の才能に恵まれてそれから15年の年月が経ち……エースオブエースと呼ばれた女性の家族はとある事件を機に職場を辞め、地球に戻り少年は第一魔法科高校に入学する。

リリカルなのはと魔法科高校の劣等生のクロスオーバーです。

目次

入学編 2 3	117
入学編 2 2	111
入学編 2 1	107
入学編 2 0	102
入学編 1 9	98
入学編 1 8	92
入学編 1 7	87
入学編 1 6	81
入学編 1 5	77
入学編 1 4	72
入学編 1 3	68
入学編 1 2	63
入学編 1 1	59
入学編 1 0	54
入学編 9	46
入学編 8	42
入学編 7	39
入学編 6	33
入学編 5	27
入学編 4	23
入学編 3	16
入学編 2	10
入学編 1	5
プロローグ	1

入学編 2 7
入学編 2 6
入学編 2 5
入学編 2 4

136 132 127 121

プロローグ

新暦76年11月某日

第一管理世界ミッドチルダの聖王病院の一室。病室のベッドに身を預け、眠っている赤子を抱きかかえる栗色の髪の女性とベッドの横でまじまじと赤子をみる金髪の少女がいた。

「よしよし……にははは、本当に良く泣く子だね。泣き疲れて眠っちゃったみたい」

「ママ大丈夫？」

「問題ないよ。それにちよつと前のヴィヴィオと比べたらへつちやらだから」

「酷いよ!?ママ!？」

ごめんごめんつとやんわりとした口調で金髪の少女……ヴィヴィオを宥める女性。すると病室の扉が開き外からヴィヴィオと同じ金髪の女性が入ってくる。

「フェイトママ！」

「フェイトちゃん、いらつしやい……仕事終わりで来たの？」

「なのは！うん、一時的にミッドに戻ってきただけでまだお仕事も残ってるんだけど……ティアナとシャーリーに行け……」

「ごめんね、わざわざ時間割いちやって……」

「そんなことないよ。それで……この子が？」

「うん、私の子供、泣き疲れて寝ちゃったけど……元気な子だよ」

そう赤子の頭を優しく撫でる。なのはにフェイトも笑みを溢すが、この場にいないければならない人物が見当たらないことに気付き首を傾げた。

「あれ？そういえば……なのはとヴィヴィオだけなの？」

「パパは地球にいる土郎さん達の所に行ったよ」

「地球とここじゃあ……やっぱり時間が掛かるから……」

「確かに……あつ、そうだ……なのはその子の名前決めたの？」

父親が不在という疑問に答え納得がいったフェイトは気になっていた赤子の名前を聞く。それに対してなのはは笑みを浮かべ口を開けた。

「もちろん、決まってるよ。この子の名前は……………」

新暦91年4月……

「^{かなた}星空！もう朝だよー！」

「ん、んん」

地球の極東の島国、日本の首都、東京の某所……星空と呼ばれる少年の一室に母親からの声が響く。

星空もその声に反応してベッドから体を起こす。

「…………もう朝…………ふああ…………！」

カーテンから差し込んでくる朝日に朝だと実感する星空はベッドから起き上がり部屋に立ってかけられた制服に着替えてからリビングへと向かう。

リビングには既に朝食が並べられていて星空はその朝食を見て少し顔を引きつらせる。

「母さん、また結構手のこった料理を……」

「えっへん！自信作！ちよつと試してみたいレシピを使ってみただ」

そういつて腰に手を当て、凄いでしょ？と主張するなのはに軽めで良いのにと星空は手の込んだ料理を見にして心の中でそう思った。

そして椅子に座りなのはと談話しながら母親の料理を食べているとなのはの表情が少し曇る。

「母さん？」

「あ、ごめんね…………今日は星空の入学式の日なのにこんな暗い顔しちゃって…………けど」

「…………母さん、心配してくれるのはとても嬉しいよ。国立魔法大学付

属第一高等学校……九校しかない魔法師を育成する高等学校……現状魔法師は兵器としての観点が強くて世間からは危険視されている節がある……」

「うん、本当は星空には魔法師になって欲しくないって思ってるんだけどね……それじゃあ星空の意思に反することになる。」

「……自分で選んだ道だから……母さんの心配ももつともだけど、大丈夫、なんせかのエースオブエースの高町なのはの息子だよ。僕は」
そうはつきりと言い切った星空になのはは目を丸くしたが直ぐに笑みが零れる。

「もう、ちよつと生意気」

「いや、今良いこと言わなかったかな？」

「にやはは、今更止めても無駄だね。でも約束だけはして……無理はしないって」

「うん、星に誓って」

「……よろしい。あつ、もうこんな時間、少し校内を見て回るつもりなんだよね？そろそろ他の出る準備もしないと間に合わないよ」

「本当だ。ご馳走様、それじゃあ他の支度も済ませるよ。」

そういつてリビングから出て行く星空をなのはは見つめた後、ふと思いいにふける。

「お父さんやお母さんもこんな気持ちで私を見送ったのかな……」

自身は二桁にならない年で実戦を経験し二度も世界を救った。そのあとその出来事で知った組織に入り中学卒業後に故郷を離れた。

その時もきつと両親は自分と同じ気持ちだったんだろう。そうなのはは思わざるおえなかった。

魔法……それは伝説やおとぎ話などではなく一世紀前に現代に確立した一つの技術である。

その魔法を生業とする人達を魔法技能師……通称魔法師と呼ばれ……世界は魔法師の育成に尽力していた。

しかし、魔法師以外にも全く違う魔法を使う者達が居る。魔導師……異界の技術を用いて繰り出される全く別系統の魔法。今年度、優等生の妹と劣等生の兄、そして世界を何度も救った魔導師の息子であ

る三人は第一高校へと入学する。

入学編1

日本には全国各地に魔法師を育成する高等学校が九つ存在する。その中でも東京の八王子にある第一高に入学できるのは難関の試験を通ったエリートだけである。

しかし魔法師の講師は残念ながら全生徒を賄える人数が存在しない。

故に第一高に入学した時点で優等生ブルームと劣等生ウイードが存在する。

「此処が第一高か……」

星空は第一高の校門前で目の前に聳え立つ校舎を見て新たな生活の始まりを予感した。

「遠くからは見たことがあったけど……近くで見るとやっぱり広いな……(ここ)」

第一高と同じ八王子に家を持つ星空は遠くから校舎などを見たことはあったがここまで近づいて見たのはなかったため普通の学校と比べて改めて敷地の広さに驚嘆する。

「入学式まで後一時間って所か……あの二人はもう来てるだろうけど……この広い敷地を探すととなると足りるかな……」

知り合いが入学していることは既に星空は知っている。そしてその片方が入学式の新入生の総代ということもある経緯で知った、そしてもう一人の性格を考えれば一緒に来ているのは確実だろう出来れば会っておきたいと星空は久しぶりに直で会う友人を捜そうとしたがこれだけ広い場所で特定の人物を捜し出すのは極めて困難だった。

どうしたものかと首を傾げ悩んでいると校門前に二人の少女がやってくる。

「うわあ……此処が第一高校……凄く綺麗……」

「ん？」

(僕と同じ入学生……それに胸と肩の部分のマークがある一科生か……)

そんな声を聞き星空は横目で見ると、同じ制服を着た少女が二人、この場所に入学できたことが嬉しかったのだろう。そんな感極まっ

た嬉しさを放つ茶髪の少女にその後ろには何処かもの静な黒髪の少女が星空の視線に気付くと茶髪の少女の肩を叩く。

「ほのか、落ち着いて……隣にいる人もこっち見てる」

「へ？あつ……」

「……ああ、すみません……こんな時間にもう来る人が僕以外にいないだなぁと思つてね」

邪魔してごめんねつと気になって見たことを謝つた後星空は敷地内へと歩き始めると恥ずかしさから顔を赤らめていたほのかと呼ばれた少女は星空を見たあと直ぐに正気に戻り。取り乱しながら星空に声をかけた。

「あ、あのー！」

「え？はい……なにか……」

「え、えつと……入学試験の実技試験の時……〇〇会場で受けませんでしたか？」

「え？ええ、確かにそこで受けましたけど……」

話が読み込めない星空を他所に連れの黒髪の少女がほのかにもしかしてつと訪ね、ほのかはやつたと笑みを浮かべながら少女に対して頷いた。

「わ、私もその会場で受けてまして……そのあなたの魔法が凄く綺麗で……」

星空の扱った魔法に感銘を受けたことを顔を赤くしながら話すほのかに星空もどうすれば良いか戸惑う中、両者のやり取りを見て口を開けた。

「ほのかはあなたに会いたくてこんな時間に来た」

「え!?!?!」

「えつと、まさかそんなことで誉められるなんて……」

（もしかして、魔法の工程に無駄がなかったことを言ってるんだろな。でも普通はそんなこと見えないし……彼女はそういう特異体質なのかな？）

その会場で確かに魔法式に見合った適量のサイオンで魔法を放つた記憶があった星空だ。普通の人間にそんなものは気付くはずもな

い。そのためほのかがそう言ったものが見える特異な体質なのだろうと頭の中で結論づける。

「よかったね、ほのか……こんなに早く会いたかった一人目に会えて」

「う、うんそうだね……」

「……一人目？」

「は、はい。実はもう一人、あなたと同じぐらい綺麗な魔法を使う人が居たんです」

「あの会場に……もう一人……」

ほのかの話聞いた星空は試験会場の時のことを思い出しながら該当する人物を頭の中で模索する。そして一人だけもしかしてと思った人物がいたために……星空はほのかに向かって訪ねた。

「もしかして、あの会場で圧倒的な魔法力で魔法を放った女性の次に実技試験を受けた男性？」

「は、はい！そうです！その人です！」

星空の質問に直ぐに反応して首を縦に振り肯定したほのかを見て、星空はやっぱりと言った顔でこの学園に入学した友人の兄妹を思い浮かべる。

（やっぱり達也のことだったか……確かに達也なら朝飯前か……）

「ほのかから聞いたけど……そんなに凄い人だったの」

「ああ……あの中で完全に飛び向けてたよ……まあ、深雪ならな」

「えっ!?もしかしてお知り合いですか!？」

「え?ああ……その二人、兄妹で、かれこれ9年近く交友があるよ」

つい妹の名前を口にした星空は見事に食いついたほのかに対してもう誤魔化せないと判断するとその二人は兄妹で星空の友人であることを話す。

そのことを聞いて、嬉しがるほのかに少し高ぶっていることを宥めようとする雫。そんな二人を他所に星空は困った顔をして頭の中で戸惑っていた。

（友人であることを話してしまったけど……深雪はともかく……達也は……）

「よかった……あの人も凄い人だから絶対に受かってるよ！」

(……この反応から一科生だと思ってるんだけど……達也は二科生なんだよな……)

星空と達也……二人ともほのかが絶賛するほどに魔法工程に無駄がない共通点があるが決定的に違うことがある。

それは魔法発動の速度。

星空は深雪には劣るが発動速度は速いことに対して、達也はある理由で系統魔法の発動は遅い。

それに実技試験の評価される観点は処理能力、キャパシティ、干渉力の三点で幾ら魔法発動の無駄がないとはいえそういつたことは評価されないため二科生となったのだ。

(とはいえ、達也の実力はこの学校……いや世界でも上から数える方が早いレベル……それは達也の実力を見れば直ぐに分かる……問題なのは……一科生と二科生の間にある差別意識か……) 八王子に家を構える星空にとって第一高の生徒を見るのはそれほど珍しくはない。

そして一科生と二科生の差別が激しいのも既に星空は知ってる。

ほのかと雫……この二人は星空と同じ一科生でそれを気取るような振る舞いはないが……残念ながら今あったばかりの星空には差別意識があるかないかの判断は出来なかった。

「あの、その人とも友人ならその人が入学してるかも知ってませんか？」

「……ああ、兄妹二人とも第一高に来ているよ」

「やつぱり、そうですね！あんなに凄い人だもん！」

「因みに妹の方が新入生の総代でスピーチのリーダーで早めに来てるはず。その上達也の性格を考えると深雪と一緒に来てるはずだから敷地内にいると思う」

「そうなんだ。もしかして早めに来たのはその人？」

「ああ、久しぶりに会いたくてな……」

「そ、それじゃあ、一緒にその人を捜しませんか？」

雫との受け答えで星空は上手く二科生であることをはぐらかしたがほのかは会えるのが待ち遠しい表情で星空が達也達を探すために

早めに来たことを話すとはのかが同行してもいいかと提案してくる。
(……………校内を回りつつ……………二人の内面を探るしかないか……………)

「良いですよ。そういうえば自己紹介がまだだったね。僕は高町星空。
ほしぞら星空かなたと書いて星空ほしぞらって読む。これからよろしく」

「よろしく、高町さん。私は北山雫、それでこっちは友達の」

「み、光井ほのかでしゅっ……………あう……………」

自己紹介で最後にほのかが噛んで顔を赤らめると星空も少し苦笑
いを浮かべた。

「あ、あははよろしく。光井さん、北山さん……………それじゃあ校内散策し
つつ……………人捜しと行きましょう」

そういつて、星空を先頭にほのかと雫も第一高の敷地内へと足を踏
み込んでいった。

入学編2

敷地内に入り、校内を見回ることにした星空達三人だったが結局のところお目当ての達也を見つけることは出来なかった。

「敷地が広すぎるよ〜」

「かなり歩いたけど、まだ見て回ってない所もかなり多い」

「一番居そうな図書館も生徒IDなしだといけないとなると……完全に風潰しだったからね」

ほのかと雫は歩き疲れたのは少し疲れた表情で達也を見つけれなかったことに落胆する中、ある程度の目星を絞っていたのに、まさかの現状では新入生では入れないことから地道に探したのだが見つからなかった。

「もうすぐ、入学式が始まりそうだから行きましようか」

「はい、そうですね。きつともう向かっちゃったかもしれないし」

星空も達也の探すのを諦め、入学式の間も迫っていたことから入学式が執り行われる講堂の中へと入っていく。

中に入ると既にながりの新入生が集まっている。

（前は二科生、後ろは三科生か……既にここから差別意識があると本当に胸くそ悪いというか）

軽く見渡すと直ぐに差別されているのが見て取れた星空は誰にも聞こえないようにため息を吐き、一緒に来たほのか達をみた。

「あの、高町さん。私達も座りましょう」

「……………ああ、そうだな……………」

ほのかに呼びかけられ、星空達は一科生が集まる前の空いている席に座った後、しばらくして入学式が執り行われた。

式は順調に進んでいき、生徒会長のスピーチが終わった後、新入生の総代によるスピーチが行われた。

「ほのか、もしかして、あの人が？」

「うん、私が言ってた人……………」

（やっぱり、男女問わず見惚れているな……それにしても平等とか魔法以外とか思いつき一科生に反感を覚えそうな言葉を次々と、でも

まあ深雪に見惚れているからか。殆どの人が気付いていないようだけれど……)

そんなことを星空は思っていると無事に深雪のスピーチが終わり、壇上から降りる最中、星空と視線が合う。

(あつちもこつち気付いたか……)

「雫……司波さん。今こつち見なかったかな？」

「……気のせい……だと思う」

「いや、明らかにこつちを見てたよ。言ってしまうえば僕を見つけたからだと思うよ」

ほのかと雫も深雪が星空を見つけ視線を向けていたことに気付き、小声で話し合っていると星空はその話し合いに加わるように先程のことを補足する。

その後何事もなく入学式を終えて、講堂から出たあと星空達にIDカードが配布され星空は確認する自身のクラスが記載されていた。

「私Aクラスだったけど、雫は？」

「私も同じ」

星空の隣でお互いクラスが1―Aということで安堵するほのかと雫。すると雫は星空に視線を向け、ほのかも不安げに星空に顔を向けた。

「あ、あの、高町さんは」

「光井さん達と同じ1―Aだよ」

「本当ですか!?よかった……」

同じクラスだということに喜びの安堵を浮かべるほのか、隣にいる雫もあまり表情を変えないが笑みを浮かべているのがわかる。

「高町さん、もしよろしければ一緒にホームルームを見ていきませんか？」

「いや、明日に見ることにする。取りあえず友人の方を探さないといけないから……」

ほのかの提案を優しく断り。入学式前から探していた達也を探そうとする星空は前方に見える人集りからある人物の姿を確認する。

「あれって総代の司波深雪さん？」

「うわ、凄い人集りだね」

「……深雪らしいと言えはらしいな」

（けど、深雪の周りに居る奴らは全員一科生で……ブルームとか良く言ってるし……差別意識が高そうだ）

新入生の一科生に囲まれて冷静に受け答えをする深雪を囲いの外から星空は眺めていると更にその奥にお目当ての人物を見つけることが出来た。

「あ、見つけた」

「え、どこ？」

「ほら、あの囲いの向こう側、赤髪と黒髪に眼鏡掛けてる女子生徒の近くに居る」

「あつ！あの人だ！漸く見つけ……え？」

「お兄様！」

星空は達也を見つけて話しかけようと動き出そうとすると新入生の喧騒の中、深雪の声が響いた。

深雪の存在感が別格だからこそその一声で周り生徒が静まり返り深雪の向かう方向に男女問わず左右に分かれて道を空ける。

そうして、空いた道から深雪は笑みを浮かべながら達也の元へと向かっていった。

その光景を見て苦笑いの笑みを浮かべる星空。しかし直ぐにその笑みも消える。

達也と深雪がいつも通りの話し合いをしている中、周りの生徒がブルーム、ウィードと差別言語を陰口で達也達二科生を言っているのを見て星空も流石に良い気分には慣れなかった。

（……ここまで酷いとはね……普通兄妹の仲を引き裂く理由がどこにあるんだか……まああの二人は度が過ぎてる気がするけど）

達也と深雪を見つけることが出来た星空だがやじを飛ばす周りが邪魔でとてもすんなりで行ける気はしなかった。

（って、別に周りのことを気にしても仕方ないか……達也は今、周りと深雪に意識が向いてるはずだから……）

笑みを溢し良いことを思いついた星空は早速気配を殺し、無音歩行

で達也に近づいていく。

そんな星空を周りの生徒はおろか隣にいたほのか達も星空が居なくなっていることに気付かない。

そうして、気付かれることもなく星空は達也の背後を取り肩を手で叩こうと振り下ろす中、達也が星空のいる背後に目線を向けた。

「数ヶ月ぶりとはいえいきなり気配と足音を殺して近づいてくるのはどうかと思うぞ。星空」

「あれ？いつから気付いてた？」

肩に触れる直前に達也がそういうと不意に手を止め、いつ頃から気付いていたかの確認を取る星空。

周囲はいつからあそこにと達也が声をかけ漸く気付いたようで、先程まで隣にいた雫もいつの間にと星空が立っていた場所に視線を向けて驚き、達也の近くに居た深雪は星空の名前を呼び。他の達也と一緒に居た女子生徒は突然後ろに現れた星空に目を丸くして啞然として驚いた。

「お前が不敵に笑みを浮かべて行動し始めた辺りからだ」

「それ、初めから俺に気付いてたってことか？だったら声をかけてもよかったのに」

「あのな……」

周囲のことを気にしていない星空に達也はため息を溢し実際に周囲は少し取り乱しただけで直ぐにブルームの自覚がなんとかと言いだめた。

「友達なのに余所余所しくする理由……ないだろ？」

「……はあ……相変わらずだな」

嫌みに聞こえる言葉を達也が口にするが表情は少し笑みを浮かべていて満更ではないようす。

「お久しぶりです。星空くん」

「ああ、深雪も久しぶりだね……会ったのは実技試験以来か。」

「……所で深雪、生徒会の方は大丈夫なのか？」

深雪が久しぶりに星空と話をした後、近くに居た生徒会のメンバーに気付いた達也が深雪にそういうと生徒会長である七草真由美が近

付いてくる。

「いえ、大丈夫ですよ」

「な!?会長、それでは予定が……」

「前から約束していたのならまた次に話せばいいわよ。それよりも……」

達也と深雪を見て、真由美は問題ないと答えると真由美の隣に立つ男性が取り乱し次回に話せば良いと言い切ると割り切ると次に視線は達也と深雪ではなく星空へと向かう。

「入学おめでとう。星空くん……制服よく似合ってるわ」

「こんにちは……真由美……いえ此処では七草会長と呼んだ方が良いでしょうね」

「……知り合いか?」

「まあ……どっちかって言うとおっち関連で……」

星空と真由美が知り合いということでもまた周囲が驚きで響めく中。達也が小声でどういった関係なのかと訪ねると星空は簡単に説明するとなるほどつと達也は納得する。

「もう……いつも通りに真由美お姉ちゃんって言ってくれても良いのよ」

「……はあ、そんなことを言った記憶はないんですけど……先輩後輩ということとで真由美先輩って呼ばせてもらいます」

「真由美先輩か……うんそれはそれで良いわね。それにしても残念だわ。星空くんなら首席入学もいけると思っただけだわ」

「上には上がいた。そういうことですよ……それでも次席入学してますけど」

「それもそうね……司波深雪さん。それでは後日、お話しさせていただきます。」

星空との話し合いを終えるとまた深雪を見て後日に今回の件を話し合うことを告げた後、真由美はこの場から離れていき一緒に来た男性も星空を睨みつけた後。直ぐさま真由美の後を追いかける。

「……深雪、本当によかったのか?重要な話だったと思うんだが……」

「お兄様との約束以上に重要なことありません!」

「相変わらずのブラコン……あつそうだ。達也お前に会わせないといけない人が居るんだった」

「俺に? どういうことだ?」

真由美が去った後いつもの達也と深雪のやり取りを見て苦笑いをした後、漸くほのかのことを思い出した星空は達也に話をしほのか達の方に視線を向けると星空は一瞬固まった。

「……………」

「ほのか……………大丈夫?」

完全に現実に思考が追いついていないのか完全に固まってうんともすんともしない。ほのかに肩を揺さぶり現実に引き戻そうとする雫の姿。

そんな光景を達也達も見ても、呆然とする中。星空はほのか達に達也が二科生であることを伝え忘れていたことを思い出し……伝えておけばよかったと内心で後悔した。

入学編3

入学式の後、周囲の人目を受けながらも学園のそこに出て星空は達也達とほのか達合わせて七人で第一高に続く坂道を下って歩いた。

「……………うう……………」

「ほ、本当にごめんなさい。初めは差別意識がないか疑ってたんだけど。直ぐ二人が差別意識がないのは分かったから、その時点で達也が二科生ってこと伝えておくべきだった。」

「確かにそれもあるけど、それだけじゃない。高町さんが次席とか生徒会長と親しい間柄だとか色々な驚くことが多すぎてほのかの思考が追いつかなくなつてショートしただけ」

「いや、主に僕が原因じゃないですか……………」

あれからなんとか正気を持ち直したがみつともないところを見られた羞恥心で顔を赤くするほのかに星空は申し訳なきさそうで謝った。

星空も達也を探していたときにほのかと雫が一科生や二科生と差別する人間ではないということは直ぐに分かった。そこで伝えるべきだったのかもしれないが、雫は他にも驚く内容があったことを指摘する。

元々ほのかは魔法の工程に無駄がないと星空と達也を賞賛していた。しかし現実はあまりにも差があった。

片や二科生で首席の妹と劣等生の兄のということで周りから差別の対象にされている達也。片や次席入学を果たし、現生徒会長、七草真由美の知り合いである星空。

あまりにも差が出来ていることにほのかは納得がいかなかった。

「光井さんだったか、俺は君が思うほど凄い人間じゃない。現に俺は二科生だから」

「何をおっしゃっているんですか！お兄様の实力は試験などでは計り知れません！深雪はお兄様がお強いことは存分に知っています！」

「深雪……………そういつてくれると俺も嬉しい」

そう司波兄妹による甘すぎる兄妹会話をほのか達4人は引き気味

で見ている、星空はもう何度も見て見慣れているのかあきれた表情を浮かべている。

「司波さん達って仲の良い兄妹なんですね。」

「いやまあ……見ているだけで胸やけをおこすというか……」

「は、はわわわあ……」

「ほのか落ち着いて」

「まあ、友人の僕としては首席の妹とか劣等生の兄とかより度が越えてるシスコン、ブラコンとして思えないんだよね」

ちよつと直視できないのか頬赤くする柴田美月、二人の兄妹愛を見せつけられ少し後退る気持ちで見る千葉エリカ。あまりの二人にほのかはまた慌て始め。またそれを雫が落ち着かせようとする。そして最早見慣れている光景になっている。星空は特に思うこともなく。自分の知る司波兄妹を述べた。

「所で柴田さん。この近くのカフェで親睦を深めたいとおっしゃっていましたが……」

「は、はい。実はこの近くに有名な翠屋があるみたいなので……ご一緒にはどうかなつと思ひまして」

「知ってる。海鳴市にある有名な喫茶店。」

「二号店がこの近くにあるみたいなんです」

「やっぱり翠屋だったんですね。それなら私もお兄様も元々翠屋に行くつもりだったんです」

美月の口から翠屋と名前が出ると雫が翠屋に反応して知っていると口にする。それを聞いた深雪も元々翠屋に行くつもりだったという和美月そうだったんですかと納得した。

「というより、仮に学園で会えなかったら星空とはそこで会えると思っていたからな。」

「え？なんで高町くんとそこで会えるって確信でもあったの？それとも事前に約束してたとか？」

もし学園で会えなかったら翠屋で星空と会うつもりだったと述べる達也にエリカは元々約束していたのかと疑問をぶつけたが達也はいやつと薄ら笑いで否定して深雪も笑みを浮かべていた。

二人の表情にエリカや他のメンバーも首を傾げたが一人だけ会う予定だった星空はまた確かにそつちが確実だろうなとちよつと言い出しにくい表情をしていたがどつちみちばれると思ひ。口を開けた。「いや、その……その翠屋なんだけど……うちのお店なんだ」「……へ？」

星空の出した言葉にエリカは短い言葉と共に驚きで絶句した。

喫茶翠屋

海鳴市の商店街に創業されおいしいケーキや紅茶などで若者高齢者、あらゆる客層からも絶賛と呼ばれたかなり凄腕のお店で、作る職人もフランスに勉強して身に着けた腕前。

そんなお店の二号店がその第一高の近くに建てられて大凡7年。今や第一高の生徒からも憩いの場として繁盛していた。

「さて、到着つと……」

「うわあ……もうかなり人が居ますね」

翠屋にたどり着き扉を開けると開閉によつて鳴る呼び鈴がなり響く。

中に入ると既に第一高の新生と思われる人達でカウンター席やテーブル席が殆ど埋まっついて繁盛ぶりが見て取れて分かった。

「この時期は一番忙しいからね。一応達也達と合流する予定だったから奥の個室が使えるようにしておいたから問題ないよ」

「それなら大丈夫そうですね」

元々、達也達と此処で会う予定だったため予め個室を抑えていると星空は言々と美月も人目を気にせず大丈夫だとほつとした表情を見せる。

星空、先頭で個室へと向かう中レジの前にいる金髪の青年が星空達に気付き柔やかに声をかけた。

「いらつしやい、達也くんも深雪ちゃんも久しぶりだね」

「ご無沙汰しています。ユ一ノさん」

「お久しぶりです」

「二人とも入学おめでとう。」

ユーノと呼ばれた青年に達也と深雪は敬意を払って挨拶をして、ユーノもそんな達也達の入学を祝言を送る。

「ふうん、見たところ此処のアルバイトしてる男性かしら」

「年も私達とあまり変わりそうにありませんね」

星空達の後ろ側にいるエリカと美月が小声でユーノを見て翠屋でアルバイトをする大学生？ぐらいの青年だと見る。二人だがそんな小声を聞いた星空は苦笑いを浮かべユーノに向かった口を開ける。

「ただいま。父さん……ちよつと大人数になったけど。個室使うけど問題ないよね？」

「お父さん!？」

「え!?!ちよつと待って!?!若っ!?!」

星空の口から出た父親という事実に声を上げる美月とエリカの他にほのかや雫も黙って入るが驚きの顔を見せ、そのことを聞いていた第一高の生徒も信じられない顔で星空達の方に視線が集中する。

「お帰り。星空……個室の方は問題ないよ。それとあまり騒ぎ立てないでね。他のお客様のご迷惑にもなっちゃうから」

「あ、すみません」

星空の言葉に返事をするユーノはその後エリカ達の大声に注意する。

その後星空に案内される様に個室へと入っていき個室の扉を閉めた。

「注文はそこにある電子端末から注文して、それとそこにあるテレビを映したかったらそこにリモコンがあるから」

「かなり快適だね」

「それと防音設備もしっかりしてるから外には声が漏れないよ」

密会しても問題なしと冗談目という星空に達也は全くと行った表情を浮かべる。

そうして電子端末で注文をした後、ほのかは緊張しながらも意を決して口を開けた。

「あ、あの！司波さん！」

「えつと……お兄様の方ですか？」

「は、はいそうです。あの実は……実技試験のころから司波さんと高町さんのこと凄い人だなって思っていたんです！」

「俺と星空が？」

「何でも光井さんは魔法を扱う手腕が見えるらしい……魔法に注ぐ魔力に無駄がなかったって……」

「なるほど……光井さんはそうだった……いやもしかして光に敏感に反応するということかな？」

「は、はい。そうです。ですから私てつきり司波さんは一科生だって……」

自分で言っていて、自分の価値観だけで勝手に決めつけたことを後悔しているのか俯くほのかに……流石に星空も何かフオローをしないうとつと思つて口を開けた。

「えつと……光井さん。一科生と二科生この区切りは厳密に魔法力の差異にある。それは知ってるよね？」

「は、はいそれはもちろん」

「だけど一科生は魔法力が高い。たったそれだけだ」

星空の言葉にそれはどういふつと言った表情で雫とほのかは疑問に思う中達也と深雪は納得した表情で星空を見ていたが星空が達也を見て少し申し訳ない表情をしてから星空は笑みを浮かべながら口にした。

「達也は魔法演算領域が狭くてどうしても速度だけは覆せなかった。たけどそこだけなんだ」

「そこだけって？」

「お、おい……星空お前は何を言うつもりなんだ」

「僕は達也の非常識さは知ってる身だからね……知ってるよ。達也が入試の筆記テスト学年一位取ってるの」

「なっ!？」

「え、ええええ!？」

「しかも、最難関とも言える魔法理論と魔法工学を第一高かつて誰も成し遂げたことがない満点取ったって」

「はい!?!え?達也って……本当にあの……」

「ちよつとまで、星空一体何処からそんな情報を……」

「真由美先輩が良くここに来るから。その時に教えてもらった!」

因みに真由美先輩に受験勉強もよく見てもらってたと付け加え力
拳で力説する星空。そんな星空の言葉に達也は翻弄され取り乱し
は内心でだから仲良かったのかと星空と真由美の關係に納得が
いた。

「そうですーお兄様はやはり魔法力しか取り柄のない深雪などより優
れているはずなのです! やっぱり入学式の答辞はお兄様にこそふさ
わしかったはずです」

「深雪。ここでそれをぶり返すのはどうかと思うぞ。というより深雪
は魔法力だけじゃないだろ?」

深雪にとつて達也は自分より上の存在と梃子でも否定しない深雪
は答辞は達也がやるべきだったと断言する深雪を達也はなんとか納
得するために言葉の限りを尽くす。

「えっと、どうすんのよ……これ」

「本当に司波さん達は仲が良いですね」

「見ててこつちが口の中甘くなるけど……何処か微笑ましいんだよ
ね」

おもいつきり爆弾を投下して收拾が着かなくなりそうな事態にエ
リカはじとめで投下した星空を見つめ。美月も何処か兄妹で尊重し
やっているのをみて微笑ましい気持ちになり。

星空もそれを同意して達也達の話し合いを見つめっているとドアが
ノックされる。

「失礼します。ご注文の商品をお持ちしました」

そういつて扉を開けると外からカートで全員分のケーキや飲み物
を持ってきた栗色の髪の女性が入ってくる。

(うわ……綺麗な人……)

(えっと……此処の従業員みたいだけど……あれ? 高町さんに似てる
?)

従業員を見て雫は綺麗な人と見惚れて、ほのかも同じ感じだったが
何処か女性の顔が星空に似ている様な気がする。

「あ、母さん。厨房良いの？」

「お母さん!？」

「あつ、やっぱり高町さんの母親」

「さっきの父親といいこの母親といい……高町さんの両親が大学生ぐらいに見えるのはどうしてなの？」

やってきたのが母親だったことに厨房の方は良いのかと訪ねる星空に、ほのかはとても親子には見えない若さに驚き、何処となく似ていることと先程の例からやっぱりといった表情でなのはをみる雫。そしてエリカはなのはとユーノの外見からとても星空のような高校生のお母さんとは思えない若さだったため小声で呟いた。

入学編4

「改めまして、星空の母。高町なのはです。」

注文した商品が無事に並べ終えた後。なのははそのまま直ぐには戻らず。初めてということもあつて自己紹介をするとエリカが戸惑いながらもどうもといつて返答する。

「母さん。持ってきたのは良いけどここに居たらまずくない？父さん一人じゃあ流石にあの数は捌ききれないと思うけど？」

「問題ないよ。ある程度落ち着いてもきたし、なにより対策もしつかりしたから厨房も問題ないよ」

（あつ、これはレイジングハートにシステム任せてきたな）

現在新入生などで繁盛しているのに関わらずなのはが顔を店に来たことに、星空はジト目で睨みつけるようになるのはを見ると、なのははある程度落ち着き対策もしてきたから多少離れても問題ない。と述べ、そこから星空は現状で厨房辺りで赤い球体が飛び回っているのを想像がっていた。

「なのはさん、お久しぶりです」

「達也くんも久しぶり。深雪ちゃんもまた可愛くなったんじゃない？」

「なのはさんこそ……お変わりなくて安心しました」

久しぶりに会ったなのはは達也達の話に弾むが星空にとっては少し恥ずかしい気持ちなのか少し強引だが強行することを決め達也達の話に割って入る。

「はいはい。母さん再会に懐かしむ気持ちは分かるけど……今はお仕事。本気で父さん一人に任せる気？」

一応レイジングハートも居るけどと心の中で付け加えながら。星空は「出て行った出て行った」となのはを強制的に退出させて席に戻る

「おかえり。なのは……どうだった？星空達の様子は」

「うん、物凄く仲がよかった。入学早々友達が出来てほつとしてる」
「母さん。いい歳して何やってるんだか」

「良い母親じゃないか」

「仲の良い親子関係で安心しました」

「達也。それさっきの意趣返しかな？」

人懐こい母にため息を溢すがそこに達也が嫌みにも聞こえる言葉を言う。と星空にとってはどうしても先程の暴露したことへの仕返しに聞こえた。

それから運ばれてきたケーキやコーヒー、紅茶などの飲み物を食べていると星空は脱線した話を戻そうとする。

「まあ、そのとにかく。さっきいったとおりに達也は筆記がとんでもないくらい出来るのは。魔法力なんかよりもっと凄いことだろ？一科生とか二科生とかは関係なくね」

だから、落ち込まないでつと優しく励ます星空。ほのかも先程の罪悪感も無くなり。ありがとうございますと星空にお礼を言う。

そうしてそれから暗い話もなく世間話で花を咲かせて時間は過ぎていき昼の一時頃には解散して達也達は自宅への帰路に入った。

「ありがとうございます。またお越しください」

微笑んで帰って行くお客を見送った後、疲れたユーノが息を吐く。漸く、忙しい時間が終わり。今は店内はなのは達3人しか居なかった。

「お疲れ、ユーノくん……毎年だけど入学式は本当に人が来るよね」

「まあお義父さん達の頑張りがあったから翠屋は有名な喫茶店になったわけだし、そんな喫茶店の二号店が第一高の近くあれば来る人も多いからね」

「だからってしっかりとマナーは守って欲しいんだけどね」

そう言いながら厨房の方で第一高の制服でエプロンを着けて皿洗いをする星空。達也達が行って直ぐ、厨房に入ってなのは達の手伝いをしていた。

第一高の近くということもありその生徒が多く来るのはいつものことだがそこでも一科生、二科生いざいざがある。席を譲れなどの口論になり大抵はなのはのOHANASHIという名の威圧で誰も何も言えなくなる。

毎年のことだとうんざりはしていたがなんとかならないかなと皿を洗いつつ、ため息を溢す星空は時間を見てなのはとユーノに向かつて口を開いた。

「父さんも母さんも……お昼まだだよ。お店は僕がなんとかするから食べてきたらっ。」

「星空？いや流石にそれは……」

「星空も入学式で疲れてるでしょ？」

「問題ないよ。さつきまで達也達と話してただけだし充分休めてるから……それにこの時間はあんまりお客も来ないから」

「うーん、そこまで言われたら……お言葉に甘えさせてもらおうかな？なのは」

「うん、そうだね……レイジングハートも置いていくから……もし何かあったら連絡してね」

「Please leave it to me. I will do my

そういつて厨房から単独飛行モードのレイジングハートが任せてと良い。なのはとユーノは一度自宅へと戻っていく。

そうして、店には星空とレイジングハート以外誰も居なくなり。星空は皿洗いを続けていると扉が開いた呼び鈴がなり視線を入り口へと向けた。

「いらっしやい……ってあれ？光井さん？」

お店に入ってきたのは先程店から出て行ったはずのほのかだった。

また戻ってきたことに不思議がる星空だがほのかも星空しかいないことで少し取り乱しながらも意を決して口を開けた。

「あ、あの……高町さん。今日は本当にありがとうございました！」

「……別にお礼を言われるほどのことじゃないよ」

今日起きた色々なことについて、落ち込んでいたほのかのフォローをしたことに対してのお礼だと思った星空はたいしたことは無いと言いつ切る

「それでもちゃんとお礼が言いたかったので……それと高町さん……私のことはほのかで構いません」

「……………わかったよ。ほのか……………僕のことも高町じゃなくて星空でいいよ」

「……………っ！はい！星空さん。それじゃあまた明日」

そういつて笑みを浮かべてほのかは翠屋から出て行き。星空も元気なほのかを見て微笑み。厨房からレイジングハートが出て来る。

「仲の良いい同級生に恵まれて。Blessed with good

As I and the master are happy

「それはどうも……………」

レイジングハートから仲の良い友人が出来たことに嬉しく思われ、星空はそう思われて嬉しく。なのは達が帰ってくるまで上機嫌で仕事に取りかかった。

入学編5

入学式の翌日、星空は家族でいつも通りの朝を迎えた後。制服を着て第一高へ向かう坂を上っていると後ろから昨日聞いた声が聞こえてくる。

「おはようございます。星空さん！」

「あっ、ほのか……北山さんもおはよう」

「おはよう」

後ろからやってきたのはほのかと雫。物静かな雫に対してほのかは何処か肩の力が入りすぎているように思えた。

ほのか達と合流した星空はそのまま横一列で通学路を歩いていると雫がチラチラと星空とほのかを交互に見始める。

「ほのか……高町さんと何かあった？」

「え?!何もないよ!?!」

「嘘、昨日までは名字だったのに今は名前呼び。それは高町さんも同じ。やっぱりあの時、忘れ物を取りに行ったときに何かあった？」

昨日と今日で明らかに進展があったと確信を得て言い切る雫にはのかはあたふたして誤魔化そうとするが、星空もただお礼を言いに来ただけなのに忘れ物をしたということと雫から離れていたのかと、嘘までついてお礼がしたかったのかと苦笑いをする。

「忘れ物を取った後に改めてお礼を言われて……それからお互い名前ですって話に」

「そ、そうだよ!別に雫が思うようなこと何もなかったから!」

上手く嘘を付け加えながら本当のことを説明する星空にほのかも少し慌ててそれに頷き。雫もなるほどと完全に信用しきっていないがある程度は信じてくれた。

「取りあえず。私のことも雫でいい」

「わかったよ。雫……僕も星空でいいから」

そうして、星空達は話し合いながら第一高の校舎に入っていく所属クラスのA組の教室に入る。

「……………」

「おい、あいつ」

「ウイードと一緒に居た奴だ」

「あれが学年次席だつて？なら確りと区別ぐらい付けてくれないと」
（早速目の敵にされてるな……………ほのか達に敵意が行かないと良いんだけど）

二科生と一緒に居た事実から敵意のある視線を向けられていることに星空は少しうんざりした心境で一緒にきたほのか達にも影響がないか心配になる中、いちいち気にしていたら負けだと割り切るとIDカードに載っている席に座り。机に内蔵されている空中投影型の端末を操作していく。

（先に受講登録を済ませないと）

そう思いながら電子キーボードを慣れた手つきで進めていく中、このクラスに所属する男子生徒が星空の横に来ると星空はタイピングをやめて顔を横に向ける。

「何かようですか？」

「俺の名前は森崎駿。高町星空だったか」

気に食わないと行った表情で星空を見る。森崎は自分の名前を告げた後続けて話し始める。

「二科生と親しいようだが……………次席としての自覚はあるのか」

「……………次席だから二科生と一緒に居てはいけない。なんて校則はないはずです。そこは個人の自由だと思えますが？」

「……………っ！お前は二科生としてのプライドがないのか!？」

次席としての自覚がないと指摘する森崎に星空は冷静にそんな規則なんてどこにも乗っていないと指摘すると森崎はそんな星空にきつく声を荒げる。

「……………一科生としてのプライド。そんなものはなから持ち合わせていません。自分は此処に魔法を学ぶために来ました。一科生として優越に浸り、二科生を見下すために来たわけではありません」
話がそれだけならばこれで終わりです。と星空は森崎を冷たくあしらい。

森崎は星空に文句があるが言い返せる自信が無く。言葉をのんで

星空から離れていく。

「星空さん……大丈夫かな……」

「もうかなり険悪な雰囲気だし……これからどうするつもりなんだろう」

そんな星空を少し離れた席で見つめていたほのかと雫が星空の先々に心配になって見つめる。

それからA組を担当する教師がやってきて手短かに自己紹介をした後オリエンテーションの説明をし始める。

「この後は専門授業の見学です。午前中は基礎魔法学と応用魔法学、午後は魔法実技演習の見学を予定していますので、希望者は10分後に実験棟1階ロビーに集合してください。他に見学したい授業があれば自主的に行動しても構いません」

そういつてから他のクラスでの授業があるようですぐに教室から退出していき、クラス内ではどこを見学して行こうかという相談で持ちきりで星空はどうするかと一人で考えているとほのかと雫が星空の元へやってくる。

「あの、星空さん。星空さんはどこの授業を見て回る予定なんですか？そのもしよければ一緒に……」

「ああ、別に此処が見たいってものもないからほのか達と一緒に رفتても良いよ」

「本当ですか!?あ、あと司波さんも……」

ほのかの提案に星空もあまり優先してみたい授業もなかったことからほのかの提案に頷き一緒に回ることにして、それと昨日仲良くなった深雪も誘っていこうと深雪のいる席に視線を向けると同じクラスの生徒が数人深雪を取り囲んでいた。

「ちよつといいですか、司波さん」

「なんででしょう?」

「司波さんはどちらを回る予定ですか?」

「私は先生について……」

「奇遇ですね!僕もです!やっぱり一科なら引率して貰う方ですね!補欠と一緒に工作なんて行つてられませんよね」

その中に先程、星空に突つかかっていた。森崎が深雪の考えに賛同するようについて行こうとしているのが見え見えでそんな光景を見ていた星空は二科生お兄様のことを批判している言葉を使った時点で深雪は森崎のことを好意的には見ないだろうと判断した。

「ほのか、雫、取りあえず深雪のことを連れていこう。同性なら割って入って無理矢理連れてきても痾りは無いだろうから」

「はい。わかりました」

星空は二人ならいらぬいざいざを出さずに深雪を連れ出せると判断しほのか達に深雪に声をかけてきてくれと頼むと二つ返事で深雪の元へ向かっていくほのか達。そして上手く深雪を連れ出すことに成功して教室の外で待っていた星空と一緒に集合場所へと向かっていく。

「ありがとうございます。光井さん。北山さん」

「私達はたいしたことはしてません。」

「お礼なら星空さんに……連れ出すように言ったのは星空さんだから」

「そうだったのですか……星空くん、ありがとうございます」

「別に良いよ……けどあそこまで人集りが出来るなんて……深雪も大変だね」

「はい。ですがお兄様やエリカ達を侮辱しました。もし光井さん達が連れ出していなかったら」

そう言いながら達也達を侮辱したことから魔法力が体から漏れ出して流石に見かねた星空も直ぐに落ち着かせて……入学早々大事には至らなかった。

四人で授業を見て回り、お昼休みになると食堂にやってきた星空達だが後ろには星空達の同クラス……森崎が筆頭に深雪目当てで着いてきていた。

「……はあ、午前中は上手く撒けたのに……」

そんな森崎達を思っつか星空はため息溢す。

深雪のことだから達也と一緒に昼食を取ろうとするはず。となればほのか達はともかくエリート思考が強い一科生が来ればいざいざ

は起きてしまう。

どうしたものかと考えていると深雪が昨日一緒に居たエリカと美月、そして型体の大きい達也の同級生と思われる男子生徒が一緒に昼食を取っているのを見つけ深雪は小走りで達也に駆け寄る。

「お兄様！」

「やあ、深雪、星空も……光井さんと北山さんも一緒か、これからお昼ご飯かい？」

「はい、その通りです。お兄様空いているお席に座っても構いませんか？」

「ああ、構わないよ」

「それでエリカ達はともかく……そっちに居るのは友達？」

「ああ、紹介する同じクラスメイトの……」

「西条レオンハルト。レオで構わないぜ」

「高町星空。僕のことでも星空で良いですよ」

「そうか、よろしくな星空」

達也に新しい友人が来ていたことに友人である星空も嬉しく思い。空いている席に着席しようとする後ろに着いてきていた森崎が近付いてきた。

「駄目だよ。司波さんブルームとウイード……確りと区別しないと」

「え？ですが私達はお兄様と……」

「いくら何でも、他者をそうやって束縛するのは人としてどうかと思うけど？」

「黙っている！司波さんに話しかけているんだ」

一科生の意識が強い森崎に流石に業を煮やした星空も深雪との話に割って入り。森崎のこの行動に批判するが星空が割って入ってきたことに森崎は関係ないと星空に言い掛かる。

エリカ達もそんな森崎を批難的な目で見ていて食堂に不穏な空気が漂う中。達也は席から立ち上がった。

「深雪、俺達はもう食べ終わったから行くとするよ」

そういつて食器の載ったお盆を持って席を空けていく達也達。

深雪は去って行った達也達を見て落ち込む中、そんな心情もいざ知

らず森崎は深雪を座るように促したが深雪は冷たい視線を森崎に向けて去っていき星空達もそんな深雪の後を追いかけた。

入学編6

お昼休みの食堂での一件で一科生と二科生の溝を改めて思い知った星空。

お昼休みも終わりオリエンテーションの続きで授業を見学しそれが終わり自宅へ帰宅する帰路につく生徒達

もう何も起こらないと星空もほっとして警戒を緩ませていたがそれは間違いだった。

それは夕暮れ時校門前で起きてしまった。

「ですから！深雪さんはお兄さんと帰りたいと言ってるです！他人が口をはさむことではありません。何の権利があつて二人を引き裂こうというんですか!!」

「み、美月は何を勘違いしているのでしょうか？」

「深雪がなぜ焦るんだ」

事の発端は星空達四人が達也達と合流して一緒に駅までいこうとしていた。

しかしここに来てもAクラスの生徒が親睦を深める目的なのか深雪を呼び止めようとする。

深雪も丁重に断ろうとしたがここに来て、お淑やかでこういった状況では身を引くような美月が深雪には達也との先約があるといつて一科生を前にしてはつきりと言いつつ切った。

それでも引き下がらない一科生に昼休みの時に良く思っていないかった。レオやエリカが挑発じみた発言で一科生を批難する中最後に一科生のプライドを爆発させたのは美月だった。

「同じ一年生じゃないですか。今の時点で一科生がどれほど優れているというのですか!!」

「っ!!ウィード風情が偉そうなことを言うな!そんなに知りたいなら教えてやる!!」

(っ!まずい!)

美月の発言に完全に理性の枷が切れたのか森崎が禁止用語を使い持っていた拳銃型の特化CADを美月に向けたことで静観していた

星空も流石に動き出した。

「お兄様!!」

「いや、問題ない」

星空が動くと同時に流石に危険だと判断した深雪も達也に美月を助けるように声をかけたが星空が動くのがわかり達也は問題ないと言いつ切る。

既に森崎は魔法を発動するための起動式を展開しており、数秒すれば放たれるであろう。だが駆けだしていた星空が手刀で森崎のCADを上弾き飛ばす。

いきなりCADを弾き飛ばされたことに呆気取られる森崎だがそんな彼にお構いなしに星空は森崎の右腕を掴み蹴りで肘を折って姿勢を前のめりにするとそのまま後ろに回り背中に掴んでいた右腕を回してその上で体重を掛けて森崎を組み伏せる。この動作はわずか3秒にも満たない早技で周りは呆気にとられる中星空は森崎に向けて言い放つ

「なっ!!?」

「そこまでだよ。森崎くん。一科生だろうとやって良いことと駄目なことは弁えるべきだ。寧ろ一科生なら尚更ね」

当然の言い分を述べる星空だが、これだけで収まる訳がない。

他の一科生も一触即発の状態ですべてでも魔法を放てる状況になつていて、それに相対するようにレオとエリカも臨戦態勢で迎え撃つ気である。

「だ、駄目!」

(ほのか!?)

お互い出方を伺っている中、この状況を止めようとして動いたのはほのかだった。

既に魔法の起動式が展開されていて、このままでは魔法を放ち校則違反になってしまうことに星空もまずいと焦るとほのかの起動式が破壊された。

「っ!?!」

「ほのか……!」

「お前達、何をしている！」

起動式を破壊された衝撃で後退るほのかを雫が受け止め、校舎の方から拳銃型のCADを向けている七草真由美と風紀委員と思われる女子生徒が騒ぎを聞きつけてやってきたのだろう。

「風紀委員長の渡辺摩利だ。この事態について説明してもらおうか」

（あの人が渡辺摩利……真由美先輩が言っていた友人……）

「……自分が説明します。今回、同クラスで司波深雪と親睦を深め合おうとしていたAクラスの団体と司波深雪が元から約束して一緒に帰宅する一団との間で口論になり、ヒートアップしAクラスの森崎駿が魔法を柴田美月に向けたところで取り押さえた次第です」

「……なるほど、だが……その彼女に関しては説明がないがどういうことだ？現にあの女子生徒は魔法を放とうとしていたではないか？」

正論だ……心の中で星空はどう弁明すべきかを頭の中で考えていると視線を達也に向ける。

星空の視線の意図を汲み取ったのか達也が摩利に向かって話し出す。

「横から失礼します。彼女の魔法についてですが……攻撃魔法ではありません」

「なに？」

「あれは軽い目くらまし程度の閃光魔法でした。一触即発だった双方を止めようとして咄嗟に発動しようとしたのでしよう」

（ありがとう……達也）

答えることが出来なかった星空の代わりに達也がほのかの目の潔白を証明するために説明する。

星空は達也の起動式すら見る事が出来る特異な目のことを知っている。

だからこそほのかの潔白には達也の力が必要だった。

例え達也の異常性を晒すことになっても

「つまり、君は発動段階の起動式を読み取った、と？」

「実技は苦手ですが、分析は得意です」

「……………誤魔化すのも得意、というわけか」

達也と摩利の間に緊迫した空気が漂う中横から真由美が摩利に向けて話しかける。

「もういいじゃない、摩利。まだ入学して初日ってことで今回は大目に見ましよう。星空くんも森崎くんを離してあげて」

「……………」

なんとか校則破りの罰は免れたかと星空もほっとしていると真由美から森崎を離すように言われる力を緩めて離れると解放された森崎は地面に落ちたCADを拾った後、星空を睨みつける。

「二人とも、名前は？」

「1年A組、高町星空です」

「1年E組、司波達也です」

「成程。覚えておこう」

今回の状況の説明をした星空と達也に名前を訪ねる摩利。二人は名乗ると星空の名前を聞いて、摩利はそうか……………つと何処か納得した表情で星空を見た後、踵を返して真由美と共にこの場去って行く。

それから森崎に達也と星空に対して名乗った後（星空には改めてになる）二人のことを認めないと（達也には深雪のことで、星空には一科生でありながら二科生に肩を持つことに）宣言すると去っていき。漸く、星空達も駅まで続く坂道を下って歩いて行く。

「あの、星空さん……………さつきは助けてくれてありがとうございます」

「いや、お礼を言うべき人は達也じゃないのか？」

「それもそうですけど……………私を庇おうと必死になっていたのが分かって……………勘違いかもしれないですけど……………達也さんにわたしのことを助けるように訴えていませんでしたか？」

「良く気がついたな……………その通りだ。星空は俺が起動式を見てどのよう魔法なのか判断できることを知っていたからな……………助けるなら俺に頼るしかなかった」

星空は何も言っていなかったが必死さが顔に出ていて達也に視線

だけ送っていただけだがほのかにはそれで達也に助けを求めたのだと理解し……達也に頼み込んだ星空もお礼を述べるべきだとほのかは考えた。

「それにしても星空のあの動き……良く自己加速魔法を使ったのバレなかったわね……ていうかいつ発動してたわけ？」

「え？ああ、あの動きね……いや魔法は一切使っていないよ」

「え？」

「あれぐらいの距離で一気に懐に潜り込むことなんて……魔法がなくとも多少武術の心得がある人なら出来るでしょ？」

星空の森崎を一瞬で組み伏せた一連の動きを体を自己加速で加速させて行つたのだと考えいつ魔法を使ったのかと星空に訪ねると乾いた笑みを浮かべてはつきりと魔法を使っていないと言い切る。

それにエリカは驚きを表す

「へえ、じゃあ星空はなんか武術を習っているのか？」

「祖父と叔父、後叔母が剣術使いでね。その関係で武術を少々……といつでも剣術は僕には合つてなかったみたいで……」

「なるほどね……昨日の気配殺しや忍び足もそれ関係か」

そうレオが質問した内容を聞いたエリカが昨日の一件で星空が知らない間に近付いてきていたことへの納得がいく。

「大体、僕は今CAD持つてないし……」

「持つてないの？」

「いや、あるにはあるんだけど、メンテナンス中だから持つてきてなかった」

「そうだったんだ」

「でも魔法を使わずに組み伏せるなんて、やっぱり星空さんは凄いです」

そう言われてほのかに魔法及びCADなしで森崎を組み伏せたことを憧憬され星空はありがとうと返事をする中話そのままCADの話になる。

「所でエリカ……そのCADなんだが……」

「へえ、流石達也くん。魔工師志望だつて言うだけ合つてこれがCA

Dだって分かるんだ」

そういつてエリカは腰に付けていた警棒を手に持つと全員がその警棒に視線を向けた。

それからエリカはこの警棒型CADと使い方を話していると幾つか気になる言葉が出てきてそれに反応した深雪がそのことについて訪ねた。

「エリカ。兜割りって『奥義』とか『秘伝』に分類されるもののはずだけれど…それって、量子量が多いことよりもずっと凄いわよ?」

「もしかして、うちの学校に一般人はいないんじや?」

「…魔法科高校に一般人はいない」

雫の言うとおりだと星空はその言葉に頷き、駅までたどり着くと全員と別れて星空は一人自宅へと帰っていった。

入学編7

「まあ、こんな感じのことが会ったんだよ。」

《それは物凄くお疲れ様で》

「はあ……まさかここまで酷いなんて入学して漸く理解できた気がする」

その日の夜、高町家では夕食も終え自身の部屋でCADの不慮がなにか確認しつつ、マリンブルー色の丸いビー玉から空中投射型のモニターが映し出されていてモニターから金髪サイドテールで赤と緑のオッドアイの若い女性が今日あったことを聞いて苦笑いを浮かべる。

《取りあえず。一日遅れだけど星空、入学おめでとう》

「うん、ありがとうヴィヴィ姉」

星空の入学を通信越しで祝う星空の姉の高町ヴィヴィオ。その言葉で少し癒やされたのか先程の心労が少しは軽くなり。星空はお礼を言う。

《それに星空の第一高入学は私だけが祝ってるわけじゃないよ?》

「知ってる。昨晚、土郎さんや桃子さん、他のみんなから祝いのメッセージがたくさん来たから」

そういつて星空は左側に出現した空中投射のモニターに触れて昨晚に受信したメッセージの数を見て沢山の人から祝われたことに笑みを溢す。

「……………あいつ以外だけど……………」

《……………やっぱりそっか》

しかしその笑みは直ぐになくなり、ある人物から来ていないメッセージを見て、ヴィヴィオも顔を俯かせて呟いた。

「その件についてはフェイトさんから祝いのメッセージと謝罪が来たよ……………まあ仕方ないとは思うけど」

《でも星空は!》

「分かってる。僕が選んだ道だから……………それを曲げる気はないよ。……………いつか分かってくれれば良いんだけど」

後悔したつもりはない……………けど自分で決めたことで袂を分

かった親友のことを思うとどうしても気がかりで仕方なかった。

「って暗くなったら駄目だよ。折角祝われてるのに」

《そ、そうだね》

「所でヴィヴィ姉はお仕事の方順調？」

《うん、パパに比べればまだまだだけど立派に無限書庫の司書長の仕事はやっていけてるよ。ああ、そうだ。この前の休みの日なんだけどナカジマジムに行ったらね》

上手く話の内容を変えて話を弾ませる星空とヴィヴィオ……その話は夜の11時を周り、時計を見て気付いた星空は「げっ、拙い」といった顔をする。

「もうこんな時間……ごめんヴィヴィ姉、そろそろ明日に備えて寝ないといけないから」

《つい、話が弾んじゃったね。星空、これからも絶対諦めないこと……星空ならきつと出来るって信じてるから》

「……ありがとう。ヴィヴィ姉、それじゃあ、お休み」

お互いにお休みの挨拶を交わして通信を着ると星空はマリンプルーのビー玉を机に置かれている小物置き様のクッションの上に優しく置き部屋の明かりを消すとベッドの中に入る前にもう一度ビー玉の方に顔を向けた。

「お休み」

「Have a good night」

星空がそれに向かって呟くとそれに反応して星空に向かって返事をする。星空はそのままベッドの中に入って眠りについた。

翌朝、問題なく学校に登校してきた星空はクラスに入る星空のことを良く思わない生徒の視線を集める中、星空は席に座り、今日の授業の準備に入る中、先に来ていた。ほのかと雫がやってくる。

「おはようございます。星空さん」

「おはよう。星空さん」

「ほのかも雫もおはよう」

「あの、今日何ですけども、もし良ければ今日もお昼休み、食堂で」

「ああ、ごめんほのか……お昼休みちよつと予定があつて……」

「え？そんなんですか？」

「うん、真由美先輩からね」

挨拶を済ませた後、ほのかがお昼休みに一緒にお昼ご飯を食べないかと誘ってきたが星空は真由美からの先約があるため申し訳なさそうにほのかの誘いを断る。

真由美との約束を聞いて二人とも少し驚いたが直ぐに顔つきが暗くなる。

「もしかして昨日の一件？」

「や、やっぱり……無事に済まなかったのかも……」

昨日の今日で真由美から星空が呼び出されたことに嫌な予感を想像させるほのかに星空は大丈夫と言い切ると徐にことの経緯を話し出した。

「実は今朝に真由美さんからメールが届いて……お昼に生徒会室について……まあここまで聞いたら昨日の一件かと思つたけど……付け加えて昨日のこととは別件つて書かれてた」

「そ、そうなんだ。よかった」

別件ということで星空のことを心配していたほのかがほつとする。

そして暫くすると深雪もクラスにやってきて自分の席に向かわずに星空の元へとやってくる。

「星空くん。少し良いかしら？七草先輩から生徒会室に呼び出されていると思うのだけど」

「え？どうして深雪がそれを？まさか深雪も？」

突然のことに驚きをあげるが深雪も呼ばれているのかと思ひ星空は深雪に訪ねると首を縦に振り。お兄様もつと付け加え星空だけではなく司波兄妹も呼ばれていることに星空は頭の中で思考する。

（どういうこと？深雪だけならもしかして入学式の時の予定だったかもしれないけど。僕と達也も加わるとなると……）

少し検討が着かないがまさか……昨日の一件で渡辺摩利に名前を覚えられてその一件が関係してるのかと……少し冷や汗を掻く中授業開始のチャイムが鳴り響いていく。

入学編 8

午前の授業が終わり、お昼休みとなって星空は深雪と共に教室を出て行く。

深雪と一緒にということもあり星空に嫉妬の視線を向けられるのだがこの際仕方がないと割り切り。途中で生徒会室のある階層で達也と合流して生徒会室前までやってきた。

「I—A、高町星空、同じく、司波深雪とI—E司波達也です」

扉の横に備え付けられているセキュリティの呼び出し機能で室内に呼びかけると扉のセキュリティが解除され、星空を先頭に三人は生徒会室に入っていく。

中に入ると生徒会長、真由美と風紀委員長、渡辺摩利。そのほかには生徒会メンバーらしき女子生徒が二人座っている。

「ようこそ生徒会室へ、星空くん。司波深雪さん、司波達也さん。改めてとはなりますが、七草真由美です。この学園の生徒会長をしています。そして隣るのが風紀委員長の」

「渡辺摩利だ。昨日の放課後ぶりだな。よろしく頼む。それに君がある高町星空か……君のことは真由美から聞いているよ」

「……どういう風に聞かされているかは……あえて聞きませんよ？」

「もう、そんな変なことは言っていないわよ。それはともかく、紹介を続けますね」

わざとらしく咳払い、真由美は自己紹介を再開する。

「私の隣にいるのが会計の市原鈴音。通称リンちゃん」

「そう呼ぶのは会長だけです。」

「摩利の隣にるのが書記の中条あずさ。通称あーちゃん」

「会長！下級生の前でその呼び名はやめてください！ 私にも立場とこういうものがあるんです！」

真由美によって生徒会メンバーが紹介され、もう一人服部……真由美曰くはんぞーくんを合わせた四人で生徒会を運営していることを話、紹介を終えると、星空は口を開けた。

「市原先輩にあーちゃん……お久しぶりです」

「ああ、高町くんも元気そうで何より。今度翠屋に顔を出させてもらうよ」

「はい……ってなんであーちゃんなんですか!? 同じ学校の先輩後輩なんですから先輩として敬ってください!」

「そうですね……あーちゃん先輩」

「せめてあーちゃん先輩じゃなくてあずさ先輩って言ってください!!」

三人のやり取りに真由美はニコニコとこの状況を楽しみ他の達也達に関しては苦い笑みを浮かべて眺める。

それから部屋に備え付けられている配膳機で昼食を取り。食べ終わった後。真由美は三人を呼び出した件について話し始める。

「当校の生徒会長は全校生徒の選挙によって選出されます。ですが、それ以外の役員は会長に選任、解任の権限が委ねられています。それで、これは毎年恒例とも言いますが……新入生総代を務めた1年生には生徒会役員になってもらっています。」

(なるほど……だから僕に主席で入らせようとしていたのか)

生徒会の仕組みを説明する真由美に星空は黙って聞いていますと主席が生徒会に入るのが習わしになっていることが直ぐに理解でき……よく第一高への受験勉強でも真由美が星空に教えることが多かったことから狙いはそこだったのだと内心あきれる。

「司波深雪さん。生徒会長、七草真由美はあなたに生徒会に入ってもらうことを希望します」

「……………それならば、お兄様の方が適任かと思えます」

「み、深雪?! いきなり何を言い出すんだ!？」

「お兄様は筆記試験で一番を取っていることはご存じかと思えます。それならば私よりお兄様の方が……」

「深雪!」

「……………深雪、少し落ち着いて……」

真由美は深雪の生徒会入りを希望したが深雪は自分以上に達也の方が適任だと主張し達也も戸惑うが流石に聞き分けがない深雪に達

也も一喝し星空もそんな深雪を落ち着かせる。

「真由美先輩。確か生徒会のメンバー基準は一科生ということでしたよね?」

「ええ、司波さんから見れば残念なことだけど」

「というわけだ。深雪どれだけ主張しても達也の生徒会入りは無理がある。深雪だって駄々を捏ねて達也を困らせたいの?」

星空はうろ覚えで覚えていた生徒会入りできる人間が一科生のみということを見由美に訪ねてからそうであることを確認すると深雪に向かって達也などの言葉も上手く使い説得する。

「も、申し訳ありません。お兄様ならと……わたしは」

「本当に司波さんはお兄さんのことが好きなのね」

「兄妹というより恋人に……見えちゃいますね」

どうにか説得できた深雪は出過ぎた真似をしたことに謝罪して、兄想いな深雪に真由美も微笑みながらさういうと達也と深雪をまじまじ見てきたあずさが思ったことを呟くと

「っ!!?」

「中条先輩……それは……どういう……」

その言葉に言葉も出せないほど取り乱す深雪に達也までも言葉を詰まらせて表情には余りだしていないが戸惑っている。

「……んんっ!話が脱線してます。深雪それで生徒会に入るのか……決めないと」

「は、はいそうですね……お、お受けさせていただきます」

達也達を見かねて星空は脱線した話を戻そうと深雪に生徒会に入るのかの有無を確認すると深雪は戸惑いながら頷いた。

話もまとまったのだが少し前から考え込んでいた摩利が真由美に向かつて確認をする

「………所で真由美……生徒会推薦の風紀委員のこと何だが……」

「その件は厳密な審査をしてから……」

「いや、風紀委員に関しては一科生という縛りはなかったと思うんだが」

「っ!!ナイスよ!摩利!さうよその手があったわ!」

どうして思いつかなかつたんだろうと椅子から飛び上がりその手があつたと嬉しがる真由美に達也は嫌な予感が横切り、直ぐにそれは何なのか真由美の口から語られる。

「実は去年の卒業生で抜けた風紀委員の穴がまだ埋まっていないのよ。」

「風紀委員は生徒会と教員会の二つから指名された生徒が選出される。真由美」

「ええ、司波達也さん。風紀委員……生徒会推薦枠で入ってもらえないかしら?」

「い、いやちよつと待ってください!?!困りますし大体……風紀委員の仕事がどのようなものなのかも聞いていません」

「それは今から話すわ。でもちよつと良かったかも司波くんと星空くん。二人まとめて説明できるわけだから」

先程まで達也に向かって話していた真由美と摩利。しかしここに来て星空の名前まで出て来ると流石にどうということだと星空は首を傾げ、摩利はそうだなと納得した表情で星空に向かって告げた。

「高町、君の方は教員会からの推薦で風紀委員に選ばれているぞ」

「……………え?」

入学編9

「あ、あのまるで話がついてこないんですが……どうして俺が教員枠からの推薦で？」

予測の上をいく話に星空は流星に動揺して摩利に訪ねるとちゃんと説明してやると摩利は言って少し間を開けてから口を開いた。

「今回、卒業して空いてしまった風紀委員の選定は生徒会推薦と教員会推薦の二つ……生徒会枠は今、司波に決まったわけだが」

そういつて達也を横目でみる摩利だが達也は未だ納得のいかない様子だった。

「教員会は教員の総意で新入生の中から風紀委員が決まる。そして選定した結果最後に残ったのは森崎と君だった訳なんだが」

「昨日の一件は教員会にも既に報告されています。これによって昨晚、全員一致で教員会からの星空くんの風紀委員推薦が決定したのよ」

「……………何で、僕なんですか？」

摩利と真由美の説明で大体の経緯を聞いてある程度納得した星空だが根本的な所で……なぜ最終選定まで星空が残っていたのかそれが気になり訪ねてみると摩利は何を今更といった表情で星空の問に答えた。

「昨日の動きから君は風紀委員としてやっていけるのは既に見て分かっているし、それに君の場合はあれもあるんだろう？」

「……………真由美さん？」

「ごめんね。ついうっかりあの事件のこと話しちゃったの」

ごめんねつとウインクしながら星空に謝る真由美を見て頭に手を当て項垂れる星空。

その光景から達也と深雪も何かあったのだろうと察し、そしてそれから直ぐにチャイムが鳴り響く。

「おっと、予鈴が鳴ったな。この話は放課後に話し合おう」

摩利は予鈴がなったことで話の途中だが話を切り上げ、放課後にまた話し合うことになり星空達はそれぞれの教室へと帰っていく。

教室に帰り次の授業の準備をする星空に心配する表情をだすのかとそれに連れ添う雫が星空のもとへやってくる。

「星空さん。あの……どうでした？」

「え？どうって」

「星空さん。生徒会室に呼び出されたじゃないですか。やっぱり昨日のことで……ですよ」

「ああ、昨日のことは全然関係………な………くもないか」

「やっぱり、昨日のことで呼び出されたんですか!？」

「ほのか、落ち着いて……」

昨日の騒動で呼びたされたのかと訪ねたほのかに星空は別件だと言いつつ切ろうとしたが風紀委員に選ばれたことに関して関係がないとも言いつつ切れず。あやふやな回答を口にするのと声を荒げるほのかに落ち着かせようと雫もほのかを抑える。

「お昼休み中、ほのかは星空さんのことを気にして仕方がなかったみたいで」

「そうだったんだ。安心して、別に怒られたり罰則されたわけでもないから……」

心配掛けてしまったと星空はほのか達が思っている様なことは何もなかったことを軽く説明し、それから魔法実技の授業が始まる。

Aクラスの生徒達がCADが内蔵された装置に触れその少し先にある四角形の台座を移動魔法で動かすと言った内容だった。

「それじゃあ、星空さんは風紀委員に選ばれるってことですか？すごいじゃないですか!」

装置を使う待ち時間に星空は生徒会室で何があつたかほのかと雫に説明するとほのかは風紀委員に選ばれたことを賞賛する。

「でも以外……それならってつきり星空は教員枠じゃなくて、生徒会枠で推薦されそうなものなのに」

「本当ですね。星空さん。生徒会長さんと仲良かったですから」

あつ、私の番だつと雫の番が回ってきたので装置の前に立つと魔法を行使して台座を動かし始める。

「雫も中々上手いな」

「雫、細かい作業が苦手なだけで実技は私より上だから」

「……………さっきの何で生徒会枠じゃなかったかって話。生徒会枠は達也が推薦されたんだ」

「達也さんがですか？」

雫の魔法の行使を見ながら二人は雫に対して感想を述べ、間を開けて星空は先程のほのかの疑問に答えるとはのかは驚いた顔をして星空を見た。

「うん、達也は魔法式を見る目があるからね。渡辺先輩もそこを高く評価している。だからこそ蟠りもなくてすんなり推薦が出来たんだけど…」

「星空さん？」

「次ほのかの番だよ」

「あ、うん今行く」

(達也の場合は周り以上に自分だな……………達也は自己評価が低いからな……………)

達也に関して説明する星空だが途中で黙って考え込み、ほのかも気になって星空を訪ねたがちょうど雫の番が終わり、気になったが後で聞こうと雫と代わり装置に触れて魔法を行使した。

(昔に色々あったとはいえ、達也の強さは既に上から数えた方が早いと言つてもいい)

謙虚すぎるのもあれだなと達也のことを思つて苦笑いしていると少し離れたところからおおっ！つと言つた響めきが聞こえる。

星空は視線をそちらに向けてるとそこには深雪がいてどうやら先程まで深雪の番で他とは一線を越えた魔法力だったのだろう。

周りからはお膳立てもあるとはいえ賞賛する人達が多い

「司波さん……………魔法発動が早い」

「やつぱり、司波さん凄いな……………私なんかより上手だし」

雫と今戻ってきたほのかそれぞれ深雪の魔法を見て賞賛する中、星空の出番がやってきたために星空が装置に近付き触れてサイオンを流し込み起動式を展開して台座動かす。

「凄い。前方、停止、後方の三つの移動魔法を殆ど立て続けに使えて

る。魔法発動スピードなら司波さんと同じ位早い」

「うん、それでいて全くサイオンに無駄がない」

台座を所定の位置に戻し魔法を終え、振り返りほのか達の元へ歩く星空。そんな星空に周囲は深雪と同じ圧倒的な力を見せられ響めきが起きる。

「なんだよ……あれは」

「司波さんと同じ位すごい。」

「あれが次席の力だっというのか」

「っ！くそっ！」

周囲の驚く中、星空を見ていた森崎が悔しそうな顔つきで圧倒的な力を見て言葉を溢す。

「お疲れ様です！すごいです！星空さん！」

「うん、私達じゃ真似できない」

「ありがとう。ほのかに雫も……」

「星空さんなら風紀委員になってもやっていきますよ！」

星空の魔法に賞賛するほのかと雫、ほのかはこれなら風紀委員になっても問題はないと絶賛し、星空もそれを聞いて微笑みを浮かべた。

そして授業も終わり、放課後になると星空は同じクラスの深雪と一緒に生徒会室に向かい途中で達也とも合流し生徒会室に入る。

「失礼します」

「三人ともいらっしやい」

中に入ると昼休みにいた真由美達の他、入学式に真由美の横で立っていた男子生徒も居て、入ってきた星空を見て目つきが険しくなるがそれは一瞬で星空達に近付き横にいる達也を素通りして深雪の前に立つ。

「副会長の服部刑部です。司波深雪さん。生徒会にようこそ」

（この人が真由美先輩が言っていた噂のはんぞーくんか……でも）

深雪に向かって挨拶をする服部を横から観察する星空は真由美から聞いていた人物だと分かるが達也のことを無視し良く思っていないのは明白だと分析する。

「早速だけど、あーちゃんお願いね」

「あ、はい！」

「星空くんと達也くんは着いてきてくれ、案内する」

「はい、分かりました」

深雪には生徒会の仕事を教えるために真由美からあずさにレクチャーを頼み。摩利も教えるより実際に見てもらった方が早いと踏んだのか風委員会室に案内しようとする部屋から出て行こうとする摩利に声をかけて呼び止めたのは服部だった。

「渡辺委員長」

「何だ？ 服部刑部少丞範蔵副会長？」

「フルネームで呼ばないでください！」

「じゃあ服部範蔵副会長」

「服部刑部です！」

「そりやお前の名前じゃなくて官職だろ、お前の家の」

「今は官位なんてありません！学校には服部刑部でちゃんと届けています！……つて、そんなことが言いたいものではありません」

自分の名前など今は置いておいてと服部は達也睨んだ後再び麻里を見た。

「二科生である高町を任命されるのは分かりますがそちらの二科生を風紀委員に任命するのは反対です。過去、ウィードを風紀委員に任命した例はありません」

服部が堂々と二科生、ウィードと差別用語を使ったことにより一気に生徒会の空気が険悪になり、摩利もほうつと毅然と対応する。

「いい度胸だな、服部。生徒会の一員でもあるお前が、委員長である私の前で禁止用語を口にするとは」

「取り繕っても仕方がないでしょう。それとも、全校生徒の3分の1以上を摘発するつもりですか？そんなこと出来るわけがありませんよ」

そういう問題じゃないだろうと摩利と服部の会話を聞いて思う星空は服部のことを批難する。

「風紀委員は実力で違反者や騒乱行為を取り締まる役職です。実力で

劣る二科生には務まらない」

「確かにその通りだが、実力にも色々あつてな。達也君には発動された起動式を正確に読み取る眼と頭脳がある」

「そんな馬鹿な。単一工程の起動式でもアルファベット3万文字相当になる。そんなこと出来るはずがない！」

無理だと断言する服部。しかしそれを可能としているのが達也なのだと彼の力の一端を知る星空は心の中で達也のことを肯定し、服部と摩利の話を聞く。

摩利は二科生だからこそ、今の風紀委員に必要だと述べ、一科生が二科生を取り締まる現状の鍵となると言い。それでも梃子でも認めない服部が真由美や摩利に達也の風紀委員入りを断固拒否を訴えかけるが黙って聞いていた深雪がこれ以上黙っているはずもなかった。

魔法実技では著しい結果ではなかったが達也に勝てる人間などないと断言する深雪に対して、魔法師のあるべき冷静さを掛けていると指摘する服部。

流石の星空も黙って静観する気もなかったのか服部を見て憤っていた感情を冷静にだが口にすることにした。

「服部副会長。少しよろしいでしょうか？」

「なんだ？高町」

「あなたはそれでも生徒会の副会長なのででしょうか？」

「……………どういう、ことかな？高町？」

完全に服部の感に触った星空に敵意に満ちた視線を向ける中、星空は冷静に言いたい言い分を口にする。

「学園の見本となるべき生徒会メンバーの中に一科生、二科生に明確に差別している人間がいる。とても生徒会に属する人間とは思えない言動です。」

「ちよ、ちよつと……………星空くん？」

「真由美さん。ちよつと黙っていてください」

「はい、すみません」

（立場が逆転してる）

憤り、冷静に服部を批難する星空。流石に見かねた真由美も星空に

声をかけるが星空の微笑みながらの一喝に黙り。それを見た達也と深雪は立場が逆転していることに内心でツッコんだ。

「っ！だから何だと言うんだ。二科生が一科生より優れていると言いたいのか？」

「少なくとも服部副会長と達也……戦ったとなれば達也の圧勝で終わるでしょう」

「なっ!？」

「僕は達也の実力の一端を知っていますし……それを風紀委員で生かせると高く評価できます。たかが二科生と見下し完結している副会長より見る目はあると踏んでいます」

「っ!!僕が二科生より劣るだ?!その言葉取り消せ!」

「魔法師は常に冷静でいなければならぬ。そうおっしゃった服部副会長がそのようでは……先程の言葉の重さも軽く思えますね」

「っ!?!」

「服部落ち着け!高町も幾らか言葉が過ぎるぞ」

「すみません。ですがここで言わなければいつまでもこの一科生、二科生の問題は解決しないかと」

今にも飛びかかってきそうな服部に流石に見かねた摩利も静止させ、星空にも非があると指摘するが星空も譲れない一線があるのかその言葉を譲らない。

「ですがここで言い争っていても拉致が明かないのもまた事実……ここは決闘といった方々を取るべきでしょう」

「っ!下級生の分際でいい気になるな!会長!自分も決闘を申し込みます!」

「自分と戦った後は達也とも戦ってもらいます。これならば風紀委員として見合う実力があるかはつきりもするでしょう」

「いいだろう。だが負けて言い訳なんて見苦しい真似はするなよ」

「その言葉そのままお返ししますよ」

「っ!!」

完全に一触即発でしかもしれつと達也まで巻き込んだ星空は真由美に視線を向けるともういいわよ……つと頭を抱えて決闘を受諾し

た姿が見えて……内心迷惑を掛けたと思いつつも、今は眼前の敵と服部に視線を戻した。

入学編10

第一高にある第三演習場。

主に魔法の実験や練習などで使われる演習場には星空と服部が相対し演習場の隅には観覧する達也達が二人を見ていた。

「お兄様」

「大丈夫だ。星空の強さは深雪だってよく知っているだろう」

「大丈夫かしら……本当に」

「会長……大丈夫なんかじゃないです。星空くんが危ないですよ。服部副会長も何処か遠慮する気もありそうにありませんし」

不安になりながらも星空を見つめる深雪に達也は問題ないと自分たちが知る星空を信じようと囁き。真由美も心配するがあずさはいともたつてもいられないようで今すぐにでも止めさせたい気分だった。しかしあずさのことを聞いて真由美は首を横に振る。

「そうじゃないの……その……星空くんやり過ぎないかなって……服部くんの方が心配で」

「はい？ど、どうして副会長の方が心配なんですか？幾ら星空くんが次席だとしてもそれは一年の話です。一つ年上で魔法の知識がある服部副会長の方が有利なはずですよ？」

「あーちゃんは二年だから知らないわよね……星空くんのあの噂」
「噂？」

噂とは何なのか？服部の方が一年のキャリヤがあり服部に分があると分析するあずさに真由美はそれでも星空が勝つと思っていて、ふとあずさが2年で星空に関する噂を知らないからかと納得している

と
服部が未だにCADを、出さない星空に声をかけた。

「高町、CADはどうした？まさかこの期に及んで持っていない……とは言わないな？」

「言いませんよ。」

そういつて星空は懐から紺色の大型のリボルバータイプの拳銃を取り出す。

(あれは……星空、本気だな……この戦い一瞬で終わる。だがそれを使うということは今のCADの情勢を一変しかけないぞ)

「真由美……あのCADだが……」

「ええ……見たことがないわね……」

「司波くん……星空くんの友達なら何か知っていますか？」

星空のCADを見て達也は戦慄し横では真由美達が星空のCADを見たことがないのでどこで作られたものなのか見当がつかず。あずさが達也なら何か知っているのではと問いかけると達也は簡単に答えてくれた。

「あれは星空の自作です」

「自作!? 星空くんCAD作れるの!？」

「ええ、星空は昔から手が器用ですから、その手のことはかなり。といても性能はやはり正規の会社で製造されている商品の方が上でしょうが」

自作だと答えた達也に知らなかった真由美は驚く。

しかし所詮はプロが作ったわけではないCAD性能はメーカー品の方が上だと達也は分析した。

「ルールを確認する。魔法、体術あり……殺傷のある魔法は禁止……勝負があつたと判断した場合は両者とも戦闘をやめてもらう」

「異論ありません」

「こちらもです」

ルールを確認し両者とも異論はないと言い切ると星空はCADを左手に持ち臨戦態勢を取ると、違和感を覚えたのは星空を知る達也、深雪、真由美の三人だった。

(これは……なるほどそういくか)

「はじめ!!」

その中で達也は星空がどういった戦法で決めるのか大体察して摩利の号令により決闘の火蓋が切って落とされた。

(手加減はしない。上級生の実力を見せる!)

開始された瞬間服部はCADを操作して起動式を展開、対する星空は左手に持つCADを服部に向けてトリガー引き。すると服部の起

動式が壊れた。

(なっ!?)

一体何がっつと動揺を隠しきれない服部だが星空は既に次の行動に移っていた。

服部の起動式を破壊した瞬間、服部へ向かって踏み込み。右手の拳を服部の鳩尾みぞおちにストレートで繰り出した。

「っ!!かはあっ!?!」

踏み込みスピードに全力のストレートが服部のを捉え、言葉にもならない悶絶に苦しみながら服部は膝を降りその場で手を付けた。

もはやこれを見て誰の目にも勝者が誰か明らかで摩利はあまりにも早い決着に戸惑ったが直ぐに宣言した。

「勝者、高町星空―」

一瞬……本当にわずか数秒で服部を倒したことに摩利やあずさ、鈴音は動揺を隠せず。ある程度予想していた真由美も星空が使った魔法に啞然とし、達也と深雪は当然と言わんばかりに動揺もしていなかった。

「いつ……たい……なにが……どう……やって、起動式を……」

苦しそうに蹲りながら何が起きたのか分からない服部は星空を見ながらあの時何が起こったのか言葉が途切れ途切れで口にするがその答えを口にしたのは星空ではなく真由美だった。

グラム・デモリッション

「術式解体……」

「真由美?あれのことを知っているのか?」

「術式解体……圧縮されたサイオンの塊をアイデアを経由せずに対象物に直接ぶつけて爆発させ、そこに付け加えられた起動式や魔法式と言ったサイオン情報体を吹き飛ばす……まさか、星空くんがそれを使えるなんて……欠点と言えば短い射程と使用する膨大なサイオン。並の魔法師じゃ。1発撃つも撃てないはずよ」

「つまり高町は相当なサイオン量を保有している」と

「そこまでじゃないですよ」

真由美が星空が使った術式解体のことを説明し、星空が術式解体を余裕で放てるサイオンを保有していると摩利は分析するとそれを星

空本人は首を振って否定した。

「術式解体を一発撃つたら恐らく僕のサイオン量では次は撃てません」

「ではどうやって使ったんだ？」

「……もしかしてそのCADに使える秘密があるんじゃないですか？」

星空は術式解体を簡単に扱えるほどサイオンを持っていないと断言するがそれでは先程と矛盾すると摩利は指摘すると先程から黙っていたあずさが恐る恐る星空のCADを見てそう指摘すると星空はすんなりと首を縦に振って肯定した。

「その通りです」

そういつて星空は自分のCADのシリンダーを横にスライドさせ手首を動かし中に入っている弾薬を全て取り出しそれを見せる。

「これは薬莖かい？」

「厳密に言う膨大なサイオンが内包されている薬莖です」

「サイオンが内包されているだど!？」

「はい。先程の術式解体もこの弾薬のサイオンを使っただけで実際のサイオンは使っていません」

どういう仕組みで術式解体を使ったのか説明し星空が説明を終えると摩利はもちろん。真由美や鈴音もあまりのすごい技術に絶句する。

「これは……凄まじいものですね」

「ああ、魔法社会の常識が一変しかねないぞ」

「でも、そんなものどこで手に入れたの？まさか星空くんが作ったわけじゃ……」

「……星空くん、その技術の出所ってもしかしてエクリプスキャンパーじゃないですか？」

「え、はい。あずさ先輩。よく知っていますね」

あまりにも一変しかけない技術に言葉が余りでない中。あずさはある会社の名前を出すと星空は少し驚きながらその問に肯定する。

「あーちゃん。エクリプスキャンパーってあの？」

「そうです！数年前に海鳴市にあるバニングス社と月村重工が共同で立ち上げたCAD製造・開発をしている大手企業のことです。噂程度で魔法師のサイオン量を覆す技術を開発しつつあるという話はありませんが、まさかその技術を星空くんが扱っているなんて……」

「少し、バニングス社と月村重工についてがあつて……そこからです」
CAD好きのあずさに熱が入ったのか感情高ぶる抑えられないあずさの熱弁に星空は簡潔に答える。

「ただ欠点としては使える魔法が特化型以上に制限させること……もうひとつ扱いが極めて難しいこと。これも全てのリソースを術式解体だけに注いでいますから」

「なるほど、術式解体だけ使えるCADか……しかしそれでも……」
「サイオン量が少ない人でもだれでも術式解体が出来てしまうのはやはり驚きを禁じ得ませんね」

自身のCADの説明を終える星空に理解してくれた摩利と明らかに今の常識を覆すものと驚嘆する鈴音。

そんな中、蹲っていた服部も起き上がってきて真由美が心配して声をかけたが服部は問題ないとふらつきながら言い切った。

それから暫くして体調が戻った服部が達也と決闘し達也の圧勝で終わって一騒動あったの言うまでもない。

入学編11

「服部に勝った達也。」

そのあと、達也がどうやって勝ったか星空と同じように説明し、振動系統の魔法を喰らって酔って倒れていた。服部は深雪（一応星空にも）に謝罪。その後二人は摩利に連れられて風紀委員会本部にやってきたのだが……

「ここが風紀委員会本部だ。少し散らかっているが……気にしないでくれ」

（……すこし？）

摩利の言葉を聞いて星空は辺りを軽く見渡したが少しとは言いがたい散乱ぷりで摩利が整理整頓が出来ないので？と内心で思っていると達也もこれには目に余る光景だったのか摩利に向かって口を開いた。

「先輩……少し片付けていいですか？」

「ん？ああ構わんが」

「達也、僕も手伝うよ」

流石の惨状に看過できなかった達也が摩利に整理していいかと訪ね。摩利も少し首を傾げたが了承しそれを見て星空も少しでも早く終わるようにと手伝うと言い片付け作業に加わる。

手分けして片付けていきそこまで時間も掛からずに物が散乱していた風紀委員会本部の姿が確りと片付いた風紀委員会本部に一変した

「ふう、こんなものか……」

片付けが一息つき、達也も息をつくると摩利は漸く本題に入れると達也と星空に向けて口を開いた。

「それで司波を誘ったことについてだが……主に二科生に対するイメージ対策だ。」

「……つまり、一科生、二科生の溝をなんとかしたいということですか？」

「そうだ。何か問題でもあるか？」

摩利から達也の風紀委員入りによるメリットは一科生と二科生の溝の修復だと説明され何処か不服そうな達也を見て摩利はどこか問題点のあるか訪ねると達也ははつきりと答えた。

「二科生対策としてはむしろ逆効果かと。同じ二科生の先輩たちは下級生に取り締まられるわけですから」

「だが、同じ1年からは歓迎されると思うぞ」

「一科生からは歓迎に倍する反感があるかと思えますよ」

一高の現状を見て自身の風紀委員会入りのデメリットを述べる達也。完全になんとか理由を付けて断ろうとしている中。そこに星空も口を挟む。

「僕も一科生だけど……達也の風紀委員会入りは賛成だよ？」

「ほら、高町も君のことに賛同しているじゃないか？」

「……星空は例外です」

思わぬ援護射撃に項垂れる達也。そろそろ折れてくれないかなと思った矢先風紀委員会の出入り口が開き巡回に回っていた風紀委員が帰ってくる。

「ハヨーツス」

「おはようございます」

「お、姐さん！ いらしてたんですかい」

(姐さんって……何処となくしっくりくるような)

入ってきた風紀委員の一人が摩利を見て、姐さん呼びしたことに星空は内心で少し感伤的に合っていると思っていると風紀委員達踵を正し摩利に向けて報告する。

「委員長。本日の巡回終了しました。逮捕者、ありません！」

そう報告に対し摩利の返事は言葉ではなく置いてあった紙束で丸めたもので姐さん呼びした風紀委員の男性の頭を叩いた。

「姐さんって言うな！ お前の頭は飾りか！」

「そ、そんなポンポン叩かないで下さいよ……ところで委員長、新入り達ですかい？」

パンパンといい音をして紙束を包めた棒で摩利に叩かれる風紀委員は横にいた星空達に気付き摩利に新入りか訪ねる。

「ああ、そうだ生徒会と教員推薦で入ってくる期待の新人だ」
「……………」

（もう、達也諦めろ。風紀委員になるのは確定事項だ）

「へえー……そっちは、紋無し、ですか」

「辰巳先輩、その発言は禁止用語に抵触する恐れがあります。この場合、二科生と呼ぶべきかと思われます」

二人の風紀委員の男性は星空と達也を値踏みするように観察し、摩利はそんな二人に先程起きたことを説明する。

「二人とも、そんな了見では足元を掬われるぞ。……ここだけの話だが、さつき服部が足元を掬われた」

「何と、入学してから負けなしの服部が？」

「ああ、正式な試合でだ」

「へえ、そいつは頼もしい限りだ」

「逸材ですね」

先程までの値踏みが一変して服部を倒したことを摩利から聞き賞賛する声を上げる二人に達也も驚き。その反応を見た摩利は驚いただろ？と達也と星空に語りかけた。

「この学校にはブルームだ、ウィードだとそんなつまらない肩書きで優越感に浸ったり劣等感に溺れたりする奴らばかりだ。正直言って、うんざりしていたんだよ、あたしは。幸い、真由美も十文字もあたしがこんな性格だと理解してくれているから、生徒会推薦枠と部活連枠はそういう優越感の少ない奴を選んでくれている。教職員推薦枠のこともあるからゼロってわけにはいかないが……君にとっても、居心地の悪くない場所だと思うよ。それに今回は教職員推薦には高町を捻じ込むことが出来たからな」

優越感に浸る人間が入らなくてこちらとしても助かると星空を見て笑みを浮かべる摩利に苦笑いの笑みを浮かべる星空。そんな星空を辰巳先輩と呼ばれた男性がもしやと星空を見て訪ねた。

「もしかして、翠屋の高町さんの……………」

「っ！ええ、良くご存じで」

この近くで喫茶店をしているからか、辰巳はもしかしてと尋ねたこ

とに星空は頷き辰巳はそれを聞いてやっぱりと目を大きくして摩利を見ると摩利もそうだと言わんばかりに頷いた。

「そうか君がああ……」

「？辰巳先輩、彼がどうしたんですか？」

「何、その当時のことを知っているのは我々3年だけだから知らなくても無理はない。私も噂程度であまり信じていなかったが彼は前代未聞のことをしてかしたんだからな。」

「あ、あははは……あの時は本当に……ご迷惑を」

辰巳は星空を見て後退りそれをみてもう一人の風紀委員が訪ねると星空が摩利達が当時1年だった頃に引き起こした出来事を口にする。星空は苦笑いの笑みを浮かべ上手く話を濁し、何があったのかの詳細をはぐらかす。

そんな光景を達也は何をやったんだとため息を吐き星空のことを心配した。

それからなんとか気を取り直して、風紀委員の二人は星空達に向けて自己紹介をする。

「3―Cの辰巳鋼太郎だ。腕の立つ奴は大歓迎だ。よろしくな、司波に高町」

「2―Dの沢木碧だ。歓迎するよ、司波君に高町君」

「……1年の、司波達也です。こちらこそ、よろしくお願ひします」

「同じく。1年の高町星空です。これからよろしくお願ひしますね。辰巳先輩、沢木先輩」

そういってお互い握手を交わし、無事に二人は風紀委員会に入ることができた。

入学編12

達也と星空が風紀委員会が決まり、簡単な説明も終えた後。仕事の内容を聞き終えた深雪と一緒に学校から下校すると翠屋で三人は休憩していた。

「今日は色々あったな」

「今日はじゃなくて、今日もでしょ？」

そう言いながら翠屋の個室でコーヒーが入れているカップを口にしてほろ苦いコーヒーを堪能する星空と達也。

因みに星空は砂糖とミルクを入れてカフェオレ状態だが達也は完全なブラツクのままである。

未だ入学して三日目だというのに濃密な日々を送った星空達はやはりため息が出るのかため息を出した後項垂れた。

「それに、風紀委員会の件完全に本人の有無を確認せずに俺が入ること前提で話が進んでいることについてだが……」

「達也、今更だからそれは諦めて」

「大丈夫です。深雪はお兄様こそ風紀委員に相応しい……いいえ、風紀委員に 留まらず。他の役職でもお兄様の実力があれば片手間なことだと深雪は存じております」

「深雪……」

「お兄様……」

「はい。そこ人前で二人だけのいちやラブ空間形成しないでくれないかな？」

結局辞退するという話も切り出せないまま事が淡々と進み。風紀委員会入りがもはや覆せない物になった達也。そんな達也に星空は諦めろつとこのまま食い下がろうとする達也に断言し深雪はそんな達也にどれだけ達也が素晴らしい実力を持っているかと賞賛し、そんな深雪と二人だけの世界を作る達也に星空は目を細めて横槍を入れる。

星空の横槍でお互い顔を赤くして正気に戻ったが星空はそんな二人にため息を溢し二人に向かって指摘する。

「はあ……あずさ先輩にも指摘されたけど……達也と深雪は兄妹の域を超えてる。建前上兄妹なんだから。公衆の面前では普通の兄妹として振る舞ってくれないと」

「それは……確かに……」

「そんなに見えませんか？」

星空の指摘に心当たりのある達也は言葉を詰まらせながら頷き。

深雪は全然自覚かないのか首を傾げ逆に星空に訪ね返した。

「とても兄妹とは見えないよ。本当に自覚ないんだなあ……達也も深雪も隠すように真夜さんから言われてるわけだよね？四葉のこと、達也と深雪が従兄妹だったこと、それと婚約者だったことも」

「そ、それは……」

「……………」

深雪の問にきつぱりと答え星空はこの場に自分達以外いないことを確認した後、二人が隠している事実を指摘して、深雪は事実だと言葉を詰まらせ、達也も黙ったままだがその事実に頷くしかなかった。「あの時、上手く横槍入れなかったら。そこらへん色々質問されていたかも知れないよ？二人がこんな調子じゃ仮に僕がいなくてぼろ出しても知らないよ？」

「ああ、気をつける」

「仕方……ないのですよね」

「……僕も最大限フォローには入るから……でも上手く自制はしてね？」

「本当に助かる。」

「いいって。もう9年……あの時からの腐れ縁だから」

そう言いながらコーヒーを飲み一息つく星空。

「そんな星空に達也も思うことがあるのか少し間を開けてそれを口にした。」

「秘密というのなら、星空。お前にもあるだろ？」

「……うん、分かってる……軽はずみに使うつもりはないよ。それを言ったら達也の分解や深雪のコキユートスだって同じでしょ？」

「俺達からすればお前の魔法の方が心配だ。分解もコキユートスもま

だ世界の定義に沿っている魔法だが。星空のあの魔法は根本的な所から全くの別物だろ?」

「それに星空くんのことですから。誰かが危険に晒されたら迷うことなく使ってしまうでしょうね」

「沖繩での一件で使っていただろう」

「それは……」

星空の抱えている秘密に星空は自身も自覚はあるのか言葉を詰まらせ、達也には以前にも星空の力を振るったことがあった出来事を指摘されると星空はなにも言えなかった。

「にやはは、それは確かに達也くん達の言う通りかもね」

「……返す言葉もない」

その日の夜、高町家のリビングでは夕食を食べ終え、使った食器を洗いながら星空の話を聞いていたのはは笑いながら達也に言い分があると述べ、それを夕飯を食べて並んでいた食器が片付いたテーブルで辞書クラスの分厚い容器に手をかざしサイオンを注ぎ込みながらもう片方の手で今日の授業の復習をしている星空は凶星のような顔を浮かべて正直に否定できなかつたことを答える。

「大体、あの時も帰ってきてから散々母さんに怒られたから……勿論反省もしてるよ」

「よろしい。流石に始めは仕方がないってお母さんも怒らなかつたけど……流石にそのまま、沖繩を攻撃した大亜細亜連合の部隊全部を魔法で無力化したのはやり過ぎ」

「幸い、星空が変身魔法で姿を偽っていて素性が知られなかつただけでも救いだろうね」

もうじき3年も前になる沖繩を大亜細亜連合が攻め込んできた事件の時、星空が感情任せに攻めてきた大亜細亜連合を異世界ミッドチルダの魔法で殲滅したことはこの世界に大きな波紋を呼んだ。

当初、沖繩を守った星空を搜索する軍が血眼になって探し回っていたが。変身魔法で姿を消えていたことで星空はマークされることはなく。軍に目を付けられることはなかつた。

「もうあんなことは二度とないだろうし……問題ないよ母さん」

「それは……そうであって欲しいな」

沖繩の一件のような大事件は起きないときっぱりと言い放つ星空になのははすんなりと領けず。心の中で負い目感じながら、星空の日常に平穩があることを願う。

するとピーピーといった機械音が高町家のリビングに鳴り響くとサイオンを注ぎ込んでいたケースからサイオンを放つのをやめて手を離しケースを開けると中には50発以上はある。カートリッジだった。

「ふう……サイオンの供給完了。後はサイオン増幅装置で一日待てば使えるね」

サイオンをかなり消費したからか少し疲れた様子の星空は勉強をやめてケースを持ってリビングから出て行こうとする。

「母さん。お風呂入らせてもらっていいよね?」

「うん。いいよ」

扉のドアノブに手を当てながらなのはに向かつてお風呂に先に入っているのかの確認をする星空になのはは二つ返事で領き。星空もわかったと言ってリビングから出ていく。

そしてなのはとユーノだけになったリビングでユーノは星空がいた手前で口出さなかったことをなのはに苦笑いしながら口にした。

「ところで、なのは」

「うん?何?ユーノくん」

「星空の沖繩でのことを改めて考えたら……やっぱりなのはの影響を受けてるんだなって思ってたね」

「そ、それはどういう意味かな?」

「ほら、誰かのために力を使うところとか……後は……四葉の分家から命を狙われていた達也くんと偶然出会った時。なのは、怒って四葉本邸に殴り込んで四葉を半壊させちゃったこととか」

「ふんや!」

なのはも人のこと言えないよね?と笑いながらユーノはなのはに指摘するとなのはもにやははと苦笑いをして最後には、はいと反

省していますと言わんばかりに項垂れてた。

入学編13

星空と達也が風紀委員会に入った翌日、星空はお昼休み、ほのかと雫の三人で食堂の一面で昼ご飯を食べていた。

「勧誘合戦……ですか？」

星空が話した内容に気になったほのかは星空の言った言葉を口ずさむと星空はそうそうと、そのことについて知っている限りの情報をほのか達に教える。

「要するに各クラブによる今日から一週間の新生の取り合い。人数確保と今年出される予算なんかもこれで決まるとかなんとか、ただ色々物騒みたいだね……」

「物騒って？」

「各クラブはデモンストレーションで校内でのCADの使用が許可されていて、毎年問題が発生してる。真由美先輩の話だと各クラブには新生の情報も出回ってるって話だから優等生は確実に狙われるね」
遠回しにほのかと雫に警告する星空。

二人も各クラブから標的対象であることを自覚すると思わず言葉を詰まらせ、少しだけ間が空くとほのかはあることに気付き、星空に尋ねた。

「それじゃあ、星空さんも狙われるんじゃない……」

「ん？ああ確かにね……けど上手くやり過ぎすつもり。元々お店手伝うつもりだったけど風紀委員会まで入ってその上クラブまで入ったら流石に両立がね……」

成績優秀者がこぞって狙われるということとはほのかや雫だけではなく。説明している星空自身も標的になり得ると気づいたほのかは心配して尋ねると星空は当然そのことにも気付いていて、上手くやり過ぎてクラブには入る気はないと断言する。

それを聞いたほのかはそうなんですかと、理解はしたが何処か落ち込む様子で星空は首を傾げた。

「ほのかは星空さんと一緒のクラブなら入りたいてって言った」

(し、雫!!?)

二人の様子を見かねた雫がほのかの心情を察して、ほのかが思っていることを代弁すると落ち込んでいたほのかは星空に本音を聞かれたことで顔を赤くする。

「そ、そうだったんだ……でもごめん。やっぱり全部両立するのは厳しそうだから……」

(とは言いつつも、母さんならお店のことはいいから、星空はやりたいうことをやれば良いって言うんだろうな)

ほのかのことを察して気まずい表情を浮かべる星空。その上で頭の中では、なのはがもしもこの話を持ちかけたら翠屋のことは言いから自分がやりたいことを優先するようにとするのは星空でも簡単に想像が出来た。

そしてお昼休みも過ぎていき放課後、星空と達也は風紀委員全員が集まる風紀委員会本部の座席に座り、今日から始まる過酷な一週間のミーティングが行われていた。

「さて、今年もまたあの馬鹿騒ぎの一週間がやってきた。クラブ活動新入部員勧誘期間だ。いや……新入生獲得合戦と言うべきかな？

原因は魔法科高校ならではのクラブと九校戦だ。九校戦の結果は学校全体の評価に反映されるのはもちろん活躍した生徒とそのクラブは学校側から優遇される。というわけで有力な新人の獲得は最重要課題であり各部門のトラブルは多発する。しかも勧誘期間中はデモンストレーションのようにCAD携行許可が出ているから余計に厄介だ。ヒートアップしたクラブ同士、影で殴り合いどころか魔法の打ち合いになることもある。学校も将来の九校戦の為か、多少のルール破りは黙認状態。学内は無法地帯化してしまう。この状態を沈められるのは我々風紀委員だけだ。今日から一週間フル稼働してもらう！今年には幸い新人の補充も間に合った。紹介しよう。1―A 高町星空。1―E 司波達也だ」

摩利に紹介されると星空と達也は席から立ち上がり。二人は他の風紀委員から注目され主に達也を見て少し動揺する。

「委員長、役に立つんですか？」

「二人とも腕前は見た。私の目が不安なら自分で確かめてみるか

「？」

「や、やめておきます…」

二科生ということで本当に戦力になるのかと不信な目で達也を見る風紀委員が摩利に尋ねると摩利はため息を吐き、実力は知っていて問題ない。摩利の言葉が信じられないなら自分で確認するかと返されると尋ねた風紀委員も押し黙った。

その後、質問がないかを摩利から全員に尋ねられると誰も発言する人はおらず。

それを確認すると摩利は風紀委員全員に向けて号令を上げる。

「ないなら直ちに出勤!!」

その号令に風紀委員はいと二つ返事で応えて早速校内の見回りに動き出し本部は摩利と達也、星空の三人だけになる。

「まずはこれを渡しておこう。風紀の腕章とビデオレコーダーだ。巡回の時は常にその二つを身につけておくこと。レコーダーは胸ポケットへ、違反行為を見つけたらすぐスイッチを入れる。また風紀委員はCAD携帯を許可されている。だが不正使用は厳罰だからな」
達也と星空は摩利から渡された風紀委員の腕章を腕に取り付け、レコーダーを胸ポケットにしまうと摩利から注意事項を説明されると二人は理解して頷いた。

「渡辺先輩、CADは 委員会の備品を使用しても良いでしょうか？」

「構わないが理由は？」

「あれは旧式ですがエキスパート仕様の高級品ですよ」

「そ、そうなのか？」

「ええ。ではこの二機をお借りします」

「二機？本当に面白いな…君は。そうだ高町。君はCADはあの術式解体用のCADを持ってきているが他の魔法は使えないのか？幾ら起動式を破壊できるとはいえ、逃げられては意味がないぞ」

何だったらCADを借りていくか？と摩利は星空に向けて問いかけると星空は問題ありませんとズボンのポケットから端末型のCADを取り出し、上着内で付けているホルスターから術式解体用のCADを出して見せた。

「その端末は？汎用型のようだが……」

「こっちは一般的な汎用型を軽く弄った代物ですがこっちに使う魔法の起動式を入れています。速度は汎用型ですから望めませんが。僕にはこれがありますから」

そういつて説明した後。術式解体用の拳銃を軽く振って問題なしとアピールする星空になるほどなど理解した摩利。

風紀委員の説明も終わり本部から出た星空と達也はこれからどうするかで互いに顔を合わせる。

「さてと、僕はまずグラウンドの方を見ていくけど……達也は？」

「俺は中庭や校舎周辺を見回るつもりだ。」

「そっか……それじゃあまた後で」

「ああ」

そういつて途中まで一緒に移動し校舎から出るとお互い別れて風紀委員の初の警邏を始めた。

入学編14

校舎から出てグラウンドに出ると既に校内全体がお祭り騒ぎの喧騒に包まれていた。

(至る所、新入生を勧誘する先輩ばかり。今のところ過剰な行為は見られないけど……)

「これは俺達が先に見つけたんだ！」

「いいや、俺達が先に目を付けていたんだ！」

星空も目を光らせ辺りを警戒していると明らかに一触即発な声音を耳にしてそちらに視線を向けると星空の視線の先には一人の新入生を取り合う生徒の姿。

さっそくかと内心でため息をつきながらその現場に近付く。

「そこまでです」

星空のその一声に言い合っていた生徒達やこの言い争いの原因だった新入生も星空の方に向く。

「風紀委員会です。一体どうして言い争っていたのでしょうか？」

「風紀委員だと？いや、俺達が……」

そう言われて星空は彼らの言い分を聞き、反感を買わないように適切な対処を施すと彼らも渋々といった表情で離れていき、絡まれていた生徒にお礼を言われて立ち去っていく。

「ふう、なんとかいざこざにならなくて済ん……うわあっ!？」

「ようー中々様になってるな。星空」

「レオ……それはどうも……」

星空が問題なく一件落着かせて一息つくと突然肩を掴まれ驚いて手が伸びてきた方向を見るとレオが先程の仲裁を見たのか星空に向かつて気さくな顔で風紀委員の仕事ぶりを誉め、星空は少し引き気味にその賞賛を受ける。

「それで？僕に声をかけてきたのは他に目的があるんじゃない？」

「ああ、俺よ山岳部に入りたくてグラウンドに行きたいんだけどな。ほら他の非魔法関連の部活が狙ってくるかもしれない……」

「つまり風紀委員の近くなら魔除けになるからってこと？」

僕は魔除けじゃないんだけどなど内心でつつこむが星空は元々グラウンドへ向かっていた最中だったためにレオの考えを邪険することもなく。別に良いよと頷き。二人はグラウンドにやってくる。

既に大勢の生徒が各部活のデモンストレーションや勧誘などが行われていて何人か風紀委員も目を開かせている。

「これは……壮観だね」

「ああ……さてと山岳部は……ん？おい星空」

「なに？……あれは……」

グラウンドを一望して壮観だと口に漏らす星空。レオもそれに頷くと入りたい部活はどこにいるか辺りを見渡すとある光景を目にして星空のことを呼ぶとそれに釣られてレオが指差す方向を向くと2台のサーフィンボードに乗り、人を抱えながら校内を走行する女性が二人。

「あれはバイアスロン部か？しかしあれ大丈夫……星空？」

遠目で見ていたレオはあれがバイアスロン部だと口ずさむレオは星空に振り向いてどうするのか尋ねようとすると既に星空は横から消えていた。

レオは何所にと消えた星空を探すと先程のボードが消えていった方向に自己加速術式で加速した星空がその後を追いかけて行く姿を捉える。

「いっちまいやがった……」

「

星空の追いかける姿を見てそう呟き、レオは一人残ったが当初の予定である山岳部を探し始めた。

—————

(どうしてこうなったの〜)

抱きかかえられているのかは突然ことで頭が混乱した。

星空に忠告されていたほのかと雫だが少し甘く見ていたのか優等生の二人はあつという間に各クラブの包囲網に捕まった。

四方八方からの勧誘の魔の手、助けを呼びたかったが周りには生憎、風紀委員などがいない。

そんな時だった。突如包囲の外から2台のサーフィンボードを魔法で操縦する女性を取り囲む生徒達を押しつけほのか達を抱えてその場から離脱した。

その二人とは第一高の去年の卒業生で所属していたSSボード・バイアスロン部の後輩のために有力な生徒を確保するために協力していた。

「よし！このままバイアスロン部まで連れて行くわよ」

「急がないと摩利が追ってくる！」

お互いボードで並走する第一高OBは卓越された操縦で人並みを掻い潜りながらSSボード・バイアスロン部の部室へと向かう中、ほのかを抱えるOBが後方から迫る生徒を視認する。

「誰か追ってきた！」

「ん？何処かで見えたことのある生徒ね。でも新入生？」

(新入生？それも風紀委員ってことは……)

追ってきた人間に何処か見覚えのあると呟くがかかえられているほのかはその追いかけてきている人物が星空ではないかと考えていると追いかける生徒が2人に向かって叫ぶ。

「その2人！止まって2人を解放しなさい！」

「この声……もしかして」

「星空さん！」

その声を聞いて後ろを追いかけてきている人物が星空であることを確信し笑みを浮かべるほのか。そんなことを他所に一高OBの顔は星空の名前を聞いた瞬間みるみると青くなっていく。

「星空って……まさか……近くの翠屋の？」

「う、嘘でしょ!?あの子第一高に入学していたの!？」

星空の名前を聞いて取り乱す2人に疑問を感じるほのかと雫。

そんな2人を他所にボードを走行するOBは声を震わせながら口ずさむ。

「翠屋の……鬼神……!？」

「翠屋の……」

「鬼神!？」

OBが心身恐怖しながら呟いた星空の渾名に雫とほのかもその言葉を復唱する中。更に星空のことで語り出す。

「二年前に当時翠屋の営業妨害していた3年の一科生を注意して、腹いせに闇討ちしようとした一科生を魔法なしで返り討ちにして。闇討ちした生徒達はみんな魔法技能を失って自主退学した」

(星空さん一体何をやったらそうなるの!?)

星空が昔に起こした出来事を知っているOBは当時の恐怖を思い出しながら語り。それを聞いたほのかは内心で物凄く取り乱す。

そんな中、中々距離を詰められない星空はどうするか考えていると後ろからやってきたサーフィンボードに乗る摩利がやってくる

「こちらーお前達!!」

「っ!!摩利まで!」

「どうする!?!摩利もだけど。翠屋の鬼神にも捕まったらただじゃ済まないわよ!?!」

「な、なんとしてでもあの2人に捕まらないようにこの2人を部室に連れて行くわよ!」

覚悟を決めたOBは更にボードの速度を加速すると自己加速術式で追いかける星空は追いかけていけないと走りながら感じていた。

そんな中星空の横を摩利は速度を調整して並走する

「高町!」

「渡辺先輩!あの2人に連れ攫われている生徒は僕の同級生の……」

「どうやらそのようだな……しかも、あの2人は去年の卒業生だ。私はこのままあの2人を追いかける。高町は……」

「SSボード・バイアスロン部でしたね。このまま上手く先回りします!」

そういうと星空は端末型のCADを操作して移動系の魔法を使い跳躍して校舎の屋上に着地する。

その後、OBと摩利のサーフィンボードのチェイスが繰り広げられその魔法の扱いにほのかと雫が魅了される。

そしてもう少しで部室へとたどり着こうとする中OBの進行方向

に先回りした星空が解体術式の拳銃をOB達めがけて銃口を向ける。

「星空さん!？」

「嘘?!先回りされた!？」

先回りされたことに驚くOB。

そんな中星空は拳銃のトリガーを引いて術式解体を発動させ、OBのボード動かしていた魔法を打ち消す。そして速度の出ていたボードからほのか達4人は放り投げられる中、既に端末型のCADで魔法式を展開していた加重魔法でほのか達の周辺の重力場を軽くして転倒を防止する。

「ほのか、雫……大丈夫?」

「なんとか……」

「ありがとうございます。星空さん」

「よくやった高町。さて……この二人にはじっくり話を聞かせてもらわないといけないな」

OBの後方で追いかけていた摩利が追いつきサーフィンボードから降りると完全に逃げ場を退路を失ったOBを見下ろしながら笑みを浮かべてそう告げた。

入学編15

「え？SSボード・バイアスロン部に？」

摩利が第一高OBの2人を連行を見届けた後。残った星空はほのか達からSSボード・バイアスロン部に行きたいと言い出し、予想外な言葉に目を丸くして呆けていると続くようにほのか達が語り出す。

「渡辺先輩と星空さんが追いかけていたとき。あの卒業生の先輩達の魔法の扱いに感銘を受けたの」

「それで、私達もあんな風になりたいって思ってた」

駄目かな？と雫は首を傾げて星空に尋ねると星空は先程のことで奇しくも2人にきっかけを作ったことに頭を抱えながら小さくため息を吐いた。

「まあ、個人の意思を尊重するべきだし……そこまで着いていくよ」

あくまで自分で決めたこと、ならば星空も何も言わずに2人の意思を尊重するとまた勧誘の魔の手がほのか達に向けられないように2人に付き添いながらSSボード・バイアスロン部員が集まる場所へやってくる。

「もしかして入部希望者かな？」

「この2人はですけど……因みにこの2人を誘拐していた卒業生OBは先程、渡辺先輩に引き取られていきましたから」

「え？先輩達捕まったの？」

部室前にいた部長と思われる女子生徒が星空達を見て入部希望者だと考え声をかけると星空はほのか達2人だけだと言い、それに付け加えるようにOBが連行されたことを伝えると女性は信じられないと言った表情で星空を見る。

「その様子からご存じだということは察しました。後日諸注意だけはされると思いますから。」

女性の表情から今回の件を周知していることを見抜くと軽く警告し部長は少し俯いて返事をする。

「さてと、ほのか、雫。僕はこれで見回りに戻るから……もしまた狙われることがあったら呼んで、それじゃ「いたぞ!!」……あれ？」

「星空さん、あつちから物凄い人集りが向かってきてる」

目的を果たしたことで星空は見回りに戻ろうとした矢先、少し遠くから大声が星空達の耳に入り、聞こえてきた方向に向くと10人以上はいる人集りが一斉に星空達の元へとやってきた。

「間違いない！違反者を追っていた風紀委員だ！あの走りっぷり我々、陸上部がいただいた!!」

「いいえ、あの身のこなし、私達、魔法体操部に相応しい逸材よ！」

「間違っている！彼の卓越した格闘スキル。それを生かせるのは空手部だ!!」

「いいや！噂に轟く翠屋の鬼神！手に入れるのは……」

私だ、私だと若干星空の渾名すら周知している大群が星空の元へと我先に駆け寄ってくる姿。

流星の光景に星空も顔を引きつり後退る中。SSボード・バイアスロン部の部長も目を輝かせて星空を見ていた。

「大人気だね。星空さん」

「なるほど、あなたが先輩方もよく言っていた翠屋の鬼神だったのね。どう？お友達も入るみたいだから君もこの部活に入ってみない？」

「あなたもですか!?!悪いですけど……今のところ決めてませんから！」

雫の溢した言葉の後、部長が2人と親しく話していたことと星空が噂の翠屋の鬼神だということを認知したことで2人より3人と言わんばかりに星空にも勧誘すると即答で星空は断り。喋りながら操作したCADで自己加速術式で素早く動きそのまま移動系魔法で高く跳躍すると加重系魔法を校舎の壁に指定すると重力場を働かせてそのまま校舎の壁を足で走り屋上に逃げ込む。

「すごいわね。加速系に移動と加重まで連続で放てるなんて」

屋上へと姿を消した星空を見て部長はその多種多様な魔法の扱いに感心すると勧誘に出ている部活メンバーに星空のことを積極的に勧誘するように通達すると去っていった星空を見てぽかんとしていたのか達をそのまま部室へと案内した。

《あはははっ！そうか、今は高町が狙われて追われている状況か》

「笑い事じゃないですからね！渡辺先輩！」

なんとか実技棟に逃げ込み星空を捜索している各部活陣の目を掻い潜りながらもインカムを使って摩利にこのことを報告すると盛大に笑われる星空。

「ならばいつそのこと、本当に何処かの部活に入ってしまったえばいいんじゃないか？何だったらSSボード・バイアスロン部長の五十嵐には私から口添えしてやらんでもないが」

「あの、ついさっき断った手前そんなことしませんよ。」

そう愚痴りつつこちらに視線を向ける生徒がいないのを見計らうと星空は素早く動き階段で下へと降りていく。

「それに追いかけてきている勧誘メンバーは魔法を使わずにただ僕を追ってるだけですからね。僕が取り締まったところで逆効果ですし」

そういつて階段の踊場から入り口を見ると何人もの各部活のメンバーが待ち構えていて突破するのは難しいと判断したため息を吐く。

「取りあえず。僕は熱りが冷めるまでは動けそうにないです。」

「ああ、分かった。君一人が動けなくてもまだなんとかなる。」

その機に実技棟の部活でも見てくるといい。

そう摩利に言われて通信が切れ、ため息を溢す星空は一度上に戻ろうと階段を上ろうとする矢先、複数の足音が聞こえてきて、校内を捜索している生徒達だと察して上に行くことは拙いと悟ると仕方なく一階に降り、なんとか見られないように移動しようするが……

「いたぞ!!」

遠くから校舎内の廊下の端から聞こえた一声で星空は反対側の廊下の端に向かって駆け出す。

当然入り口付近で待ち構えていた生徒達も一斉に動き出す。

星空は曲がり角を曲がりまた階段を上ろうと考えたが上の階が慌ただしく動いているのを耳にして立ち止まり何処から逃げるか模索していると突如として部屋の扉が開いた。

「こっちにー」

中からは一科生の男性が手招きして星空を中に入るように促し、迷っている場合ではなかった星空も直ぐに部屋の中に入ると男性は音で気づかれないようにゆっくりと扉を閉める。

「いないぞ」

「もしかしたら窓から逃げたんじやないか？」

「なら、実技棟の包囲を解いて搜索するしか……」

そんな声が部屋の外で聞こえ、足音も遠ざかっていくのを聞き取ると張り詰めていた緊張を解いてその場で膝を曲げて倒れ込む

「はあ……なんで風紀委員がこんなに追われないといけないんだよ」

「えっと、大丈夫？」

「まあ、なんとかですけど……君は？」

「I—B、十三束鋼。よろしくね高町星空くん」

「僕のことを知っているですね？」

「それはもちろんだよ。次席入学したことは入学式からもう噂になっているから」

僕のことには鋼でいいよと星空のことを知っていた鋼は入学式に起きた真由美と星空のやり取りが既に学園内で広まっていたことに少し頭を抱えそうになるが鋼に先程助けられたことに対してお礼を言うど気を取り直してこの部屋がなんなのかを部屋を見て確認する。

部屋は実技が出来るように広く。中央では動きやすい服を着た男子生徒が加速や障壁、移動や加重など様々な魔法を使いながらも近接格闘を繰り広げる光景。

「ここはマーシャル・マジック・アーツ部が扱っている部屋で今は試合形式でデモンストレーションをしているところなんだ」

入学編16

マーシャル・マジック・アーツ

魔法で肉体を補助して高い戦闘力を発揮する、魔法近接格闘術。
(やっぱり、何処となくヴィヴィ姉のストライクアーツに似てる気がする)

デモンストレーションを見て星空は姉であるヴィヴィオの扱うストライクアーツに似ていると感じそのデモンストレーションを黙ってみていると横で星空と同じで観戦していた鋼が問いかける。

「高町くんってマーシャル・マジック・アーツに興味があるの?」

「え?」

「横目で見ていたけど、凄く真剣に見ていたから」

そう鋼が言い切ると星空は自分自身あまりそこまで集中しているとは思っておらず。少し驚いた表情を浮かべる。

「十三束さんは?十三束さんも興味があるからここに来たんだよね?」

「鋼でいいよ。僕も興味があったし、これなら僕でもできそうだから」
「(僕でも?) 星空でいいですよ。それと単純な興味だけではなくて、姉がストライクアーツを習っていたので、似ているマーシャル・マジック・アーツにも興味が」

星空は淡々と説明してお互い興味があるという共通点から少しデモンストレーションから目を離し話に花を咲かせていると部屋の扉が開き外から星空の見知った生徒が入ってくる。

「おや?高町くん。ここにいたんですね」

「沢木先輩、お疲れ様です。何故先輩が……」

「高町くんは知らなかったね。僕はマーシャル・マジック・アーツ部の部員なんだ」

そういうと沢木はマーシャル・マジック・アーツ部員に近付いていき、親しそうに話していると星空と鋼の2人に視線を向けるといいことを思いついたのか部員達に話すと話し合いが纏まったのか沢木と部員が数名近付いていく。

「どうかな？君達、少し軽くマーシャル・マジック・アーツのスパーリングの体験なんかやってみないかい？」

そういうと星空と鋼はお互い驚いた表情で一度顔を合わせた後直ぐに視線を沢木達に向けると再び提案してきた部員の口から語られる。

「高町くんのごことは沢木くんから聞いてる。そちらの君も興味があつてこの部活を見に来てくれたんだよね？」

「それはまあ……」

「確かに……」

「それに高町くんはつききまで追われていたわけだから……まだ動かない方が良かっただけでははつきりとは分からないだろう？」

部員の言葉に合っていると頷く2人、それに加えて沢木は星空に向かって指摘すると星空もまた頷いた。

お互い、沢木やMMA部員達に流されてお互い上着を脱ぎ、防御用のヘッドギアやプロテクターを付けると先程までデモンストレーションで部員達が繰り広げていた部屋の中央に星空と鋼は相對する。

「なんでこんなことに」

「うーん、もう何を言っても無駄じゃないかな？」

トントン拍子で決まって頭が痛くなる星空に対して鋼はどういったところで変わらないと完全に諦めている

2人とも望んで立っているわけではないがここまで来て引き下されるわけもなく。既にファイティングポーズを取っていつでも踏み込める態勢を取っている。

「2人とも準備いいね。……始め！」

審判を買って出た沢木の一声と共に試合が始まる。

直ぐに2人とも試合用に借りた腕輪型のCADを操作すると起動式を展開する

(先ずは小手調べ！)

「っ！高町くんの方が早い！」

先に魔法を発動したのは星空だった。持ち前の魔法演算で鋼より

先に魔法式を組み立てると自己加速で一気に踏み込み軽くパンチでラッシュを繰り出す。

しかし鋼も負けてはいない。

星空がパンチを繰り出す直前に魔法式の組み立てが完了し硬化魔法で星空の攻撃を防ぎきると何かを察した星空は深追いはせず一度距離を取る。

「どうしてそのまま攻撃してこなかったの？」

「……あのまま行けば。鋼、カウンターしてたでしょ？」

「読まれてたか」

(鋼……中々に強い。体術なら僕以上か)

(さっきの魔法演算速度もだけど、相手の動きも確りと捉えてきてる。星空も次席というだけあってただ者じゃないな)

攻撃をやめて距離を取ったことで鋼の反撃を受けずに済んだ星空は苦い笑みを浮かべてお互い改めて一筋縄ではないかない存在だと再認識する2人。

そしてまた新たな魔法式を展開し何度も拳を交えた。

—————

「ふーん、それで星空はマーシャル・マジック・アーツ部に入ることにしたんだ」

「まあ、完全に押し負けてただけだね」

時刻は夕方を過ぎて6時過ぎ

勧誘合戦の初日が終わり。遅くまで残っていた星空や達也達は一休みするために翠屋にやってきて今日一日で何があったかの話に話題を咲かせた。

勿論その話の中心となるのは風紀委員の達也と星空の話。

そして星空が今日あったことを話すと顛末を聞いたエリカがおもしろい話を聞いたからかにかやついて星空にMMAに入ったことを指摘すると星空も満更ではないが苦い笑みを浮かべるしかなかった。

当初部員達に薦められて行ったスパーリング。2人とも新入生とは思えない高度な攻防戦に沢木を含めて、凄まじい勧誘(星空にはこ

れ以上、勧誘を受けないメリットを説明して)を受け、今更退くに退けなかった2人は満更でもない気持ちでマーシャル・マジック・アーツ部に入ることを決めた。

「星空さん。部活に入らないって言ってたのに……」

「入るんだったら一緒にバイアスロン部に入れば良かった」

昼休みに入るつもりはないと星空の言葉を信じていたのは何かは如何か裏切られた気分が苛まれ、雫もあまり表情に出さないが残念がつているのが分かる。

そんな2人を見て申し訳なさそうな気分になる星空をエリカとレオはニヤニヤといい物が見れていると笑みを浮かべ、美月は少し赤らめながらもおどおどと慌て、達也と深雪に至っては苦い笑みを浮かべる。

そんな状況に星空も気付きなんとかしなければとそう言えばと思いついた星空は話題を変えた。

「そうだ。達也、達也の方でも問題は起きたんだよね？ 剣道部と剣術部をいざこざに介入して魔法を使った剣術部を軒並み無力化したって」

「そうそう！ あれは凄かったわ。周りからは反魔法主義者の刺客か!? ってもう噂は持ちきりなのよ」

実際その場にいたエリカがその時のことを思い出して前のめりで達也の起こした騒動を興奮して話すと話の中にあつた剣術部の主将の高周波ブレードの魔法を打ち消したことに心当たりがある星空は達也に尋ねた。

「達也、もしかしてキャスト・ジャミング擬き。使ったの？」

「キャスト・ジャミング擬き？」

星空の言葉に復唱するようにエリカが首を傾げ。仕方がないなど頭を抑える達也は洩々、キャスト・ジャミング擬きのことを説明をする。

「これはオフレコで頼みたいんだが、今星空が言ったようにキャスト・ジャミングではなく、正確にはその理論を応用した特定魔法の妨害なんだ」

「そんな魔法ありましたっけ？」

「無いよ。美月……使えるとすれば間違いなく達也位だろうし」

「それってつまり。達也さんは魔法を作ったってことですよね!？」

達也の説明に美月は頭の中に記憶している知識の中で該当する魔法がないことから首を傾げると星空が達也自身が作って使ったと言うとほのかは魔法を一から作り上げた達也に驚きの声を上げる。

「つまり……そのキャスト……なんだっけ？」

「キャスト・ジャミングよ。そんなことも覚えられないわけ？」

「なっ!なんだと!？」

「レオ、落ち着いてエリカも挑発しない。」

レオはいまいち理解していないのか達也にどういった理論に基づいているのか尋ねようとするが名前すら臆気で覚えていないことにエリカがレオを煽り、その煽りを受けてエリカにむきになると星空は2人を戒める。

「でもキャスト・ジャミングって特殊な鉱石がないと使えないはず。」

「よく知っているな雫。キャスト・ジャミングにはアンティナイトという鉱石が必要だ。先に言っておくが俺は持っていない」

「アンティナイト自体、軍事物資だから達也が持っている方が不自然」
(まあ、達也の家系の場合持っても不思議ではないけど)

雫の疑問に達也が答えると付け加えるように星空がアンティナイトの貴重な軍事物資であることを補足するように言うが内心では四葉家である達也なら持つても不思議ではないと顔には出さないように心の中で呟く。

「なら、達也はどうやって魔法を無力化したんだ？」

「簡単にいうと俺は二つのCADを使って高周波ブレードを妨害する起動式と全く逆の現象を引き起こす起動式を使い。二つの起動式を複写増幅して想子信号波を無系統魔法放ち。高周波ブレードの魔法を妨害したんだ」

達也の説明に啞然とするエリカ達、達也のことを知っていた深雪は当然と言わんばかりに達也のことを褒め称え、星空もあっさりと達也ならと軽く返した。

「それにしてもCADを二つ同時に扱える高等テク普通は出来ないのに。達也って器用よね」

「そう言えば、星空さんもCADを二つ持ってたよね？」

「あ、私と雫を助けてくれたときだよね？あの時いきなり魔法が打ち消されて、体勢を崩したときに星空さんが重力操作で助けてくれたんですよね？」

「星空が勧誘から逃げるとき、加速、移動、加重の三系統を同時に扱ってた時、五十嵐先輩も凄いつて星空さんのこと誉めてた」

「あはは……それはどうも」

「星空の場合。魔法発動スピードと演算領域が高いから単純な魔法なら直ぐに発動できる。俺には出来ない芸当だ」

「達也の魔法式が分かることに比べたら天と地の差だと思っけど？」

それからも今日あった出来事を話し合いは翠屋が閉店間際まで続くのであった。

入学編17

部活動新入生勧誘期間が始まって数日が経った。

勧誘期間も中盤戦。有力な新入生は大体は何処かの部に入っているが部活動の掛け持ちを誘おうと結局のところ勢いは収まることはない。

そしてMMA部に入った星空も未だに勧誘は受けていたが上手くはぐらかすなどして勧誘を回避しつつ、風紀委員として違反者を取り締まる業務に追われていた。

「こちら、高町。準備棟入り口前で魔法使用の容疑で違反者を確保しました。」

《わかった。そっちに人員を回して連れて行かせる》

完全に動けないように組み伏せ、通信で風紀委員会本部に連絡する星空は直ぐにやってきた風紀委員に取り押さえた違反者の身柄を引き渡すと緊張を解く。

「凄え……今日でもう四件目か？」

「あの1年に見つかって逃げられた奴いないってよ」

「噂で聞いたんだけど。あの子、二年前に当時の3年一科生複数人に魔法を使わず勝ったって」

「知ってる。鬼神でしょ？信じられないって思ってたけど。2人の違反者を重力操作で取り押さえたところ見たら納得できちゃったわ」

「……………」

そんな周りの小声に星空もいちいち構ってはいられないが頭を抱えなくなる衝動にかられる。

（ん？）

星空がそんな思いをしていると不意に妙な視線を感じ視線をそちらに向けるがそこには誰もおらず。感じた視線も消えていた。

（またか）

この数日間、何度も妙な視線を向けられていた星空は目を細めその人物を考える。

実際にこの期間中一科生、二科生共々公平に取り締まったことが一

部のプライドが高い一科生に反感を買ってしまい何度か事故に見せかけた嫌がらせを受けてた。

といっても星空はその実行犯を尽く取り締まっているので諦めるのも時間の問題といったところ。

しかし視線の人物はプライドが高い一科生とは思えず。星空自身も見当がつかない。

「お疲れ。星空」

「鋼、そつちこそお疲れ。部活の練習？」

「うん、少し休憩してるけどね。そつちは忙しそうだね」

視線の正体を考えていると動きやすい体操着に着替えている鋼が星空に声をかけると星空も考えるのをやめて服装から部活途中かと尋ねると鋼は頷き。歩きながら語り合う。

「この期間が終われば部活にも顔出せると思うから、それまでの辛抱かな？」

「そうだね。その時にまたスパーリング付き合ってるね」

お互い同じ部活に入った同士、直ぐに意気投合した星空と鋼は同じ話題を語り合った後。別れて暫く校内を見回りをした後。真由美に呼ばれて生徒会室に訪れる。

中に入ると、生徒会メンバーは勿論、摩利お達也もいてそうそうたる顔ぶれが集まっていた。

「真由美先輩失礼します。」

「いらつしやい星空くん。ごめんね、忙しいのに」

「別に構いませんよ。それで……ここに集まったのはどういった要件ですか？」

「ああ、話す前にまずは椅子に座ってくれ」

そう摩利に促されて、星空は空いている席に座ると少し間を開けてから真由美が真剣な顔つきで口を開いた。

「まだ忙しい期間なのに呼んだのは他でもないわ。実はね、この学園には目安箱があるんだけど」

「目安箱？そんなものがあつたんですか？」

「ああ、設置はされていたが殆ど使われたことはなかったがな」

「つまり、その目安箱に何かしら気になる内容が書かれていたんですね」

集めた本題を語る真由美に星空は目安箱が存在する事実すら知らなかったことから真由美に聞き返すと摩利が補足としてあまり使われていないことを告げる。

それを聞いた達也が呼んだ理由をある程度察したのか目安箱に何が入っていたのか真由美を向きながら尋ねると。少し間を空けてから達也くんと呟いた。

「実は、書かれていた内容は達也くんが何者かに意図的に狙われているという。告発書だったのよ」

そういつて目安箱に入れられていたという紙を達也の元へ歩き手渡すと達也が確認し、横から深雪と星空が内容を覗き込む。

「えつと……この数日間。1年E組司波達也が意図的に魔法などを使い狙われている。」

「これは明らかな悪意のある行為。即座の対処を要求する……か」「達也、これ本当なの?」

前者は星空、後者は達也。2人でこの紙に書かれた内容を読み終えると星空は達也に真意を尋ねる。

「……ああ、確かに明らかな悪意は感じていた。しかしちよつとした嫌がらせだったのもあってそこまで気にしていたわけじゃないからな」

「それでも達也のことを案じてこんな告発書まで出してくるんだからよっぽどなんだろうな……真由美先輩。これ筆跡から女子みたいですがどここの告発者ってわかりますか?筆跡鑑定とか」

「流石にプライバシーなことだから分らないわ。それに筆跡鑑定なんて……今は大体電子モニターが主流なんだからもつと分からないわよ」

真由美のお手上げという動きに星空も確かにと頷き。

頭の中で考えていると春だというのに真冬のような肌寒さに見舞われる。

何事かと生徒会内で動揺が起きるが達也と星空は直ぐに真横にい

る深雪に視線を向けると想子が体から漏れて深雪を起点に周囲が凍り付き始めている。

「これは……どういうことですか？」

「深雪!? 落ち着け！」

「落ち着いてなど出来ません！ お兄様が狙われているなどとそのような狼藉を働く者を見つけなければ……」

「だから落ち着け！ 深雪が俺のことを思って憤ってくれるのは嬉しいがそうやって周りに被害を出すのは看過は出来ないぞ」

「っ！ 申し訳ございません。 お兄様」

達也に危害を加えようとする存在に憤る深雪、達也も拙いと直ぐに深雪を宥めて落ち着かせ、室温や凍り付いていたものが元通りに戻る。

それを見て真由美達は干渉力の高さに驚くとあまり驚かなかった星空が咳払った後、話し始める。

「取りあえず。 達也が狙われているのは確実に警戒を怠れないのも確かかなわけで……達也心当たりとか無いのか？」

もしかしたら達也なら色々と分かっているのではと星空は達也に尋ねてみると意外にも簡単に達也は話し始める。

「流石に誰かとは分からないが……どうやらこの学園に反魔法主義者の組織が紛れ込んでいるのは確かでしょう……例えばブランシユとか」

ブランシユ

その名前が出たとき、部屋の空気が一気に一変する。

真由美と摩利はその名前を知っているようで達也からその言葉が出たことに絶句し鈴音はあまり表情には出さなかったが眉をひそめる。唯一あずさだけが何のことなのか理解できておらず首を傾げていたが星空もブランシユのことをある程度知っていたから頭の中に記憶していることを思い出す。

(ブランシユ、魔法師が政治的に優遇されている行政システムに反対し、魔法能力による社会差別を根絶することを目的に活動する反魔法

国際政治団体)

そんな反魔法団体が何故と星空も疑問に思うが真由美達の戸惑いの疑念は達也からその組織の名前が出てきたことに向いている。

「達也くん。どうしてそのことを」

「幾ら情報規制されているとはいえ完全に漏洩されていないわけではないですよ。恐らくですがブランシユの下部組織が絡んでいるかもしれない。実際俺を襲ってきた人物はみな同じリストバンドをしていますから」

達也の予測に真由美も戸惑いつつも返事をして第一高に蔓延る反魔法団体の魔の手、それを聞き星空も真剣な表情でこれからどうするか考えるのであった。

入学編18

生徒会での集まりで第一高に蔓延る反魔法団体の影を知った星空達。

だが今のところ打てる手がないために後手に回ることを覚悟で今できることをしようと反魔法団体のことは十師族である真由美に任せ星空達は一度自身を請け負う業務に取り組む。

そして忙しかった部活動勧誘期間も過ぎ、風紀委員のローテーションも通常通りに戻ると星空はMMAの部室で鋼と練習を励んでいた。

「やっぱり。星空は凄いな。本当に一般家庭だよな?」

「何度も言っただろ? 本当に何所にでもある家庭だって」

そういつて、星空は答えるが鋼は何処か納得のいかない顔つきで星空を見る。

今年度のMMA新入部員は2人だけではなく。それなりに人数を確保することは出来た。

しかし鋼は数字付きナンバースという魔法の家系生まれで他の人より魔法を扱うことに完全に長けている。

新入部員の中では間違いなく最強と拳を交えなくても新入部員の中では口をそろえてそう答えるだろう。

しかしそんな新入部員の予想を裏切るように同等の力を持つ星空がいた。

数字付きである鋼と互角に渡り合う星空の強さに疑問が尽きない鋼は何度も同じ質問を星空に尋ねているが星空の返ってくる答えは変わらない。

「そうだ。鋼は部活終わったならそのまま家に帰るんだよね?それなら翠屋に寄っていかない?」

百聞は一見にしかずと星空は鋼を翠屋に誘い。鋼は少し考えた後、星空の誘いを受けて部活後翠屋へと向かった。

部活動も終わり時刻も6時前と夕日ももう直ぐに完全に沈みかけている中、翠屋の中は未だに一高の生徒などが多く見られる。

「お待たせ、翠屋オリジナルブレンドカフェオレとイチゴタルト」

そういつて厨房からケーキとカフェオレを鋼がいるカウンターまで持ってくる。鋼の前に置き、御盆を片付けると、星空も鋼の隣のカウンター席に座り持ってきたカフェオレを一口飲む。

「美味しい。このカフェオレ、星空が垂れたの？」

「うん、そうだよ。意外だった？」

「いやそんなことはないよ。」

飲んだ感想に、星空が垂れていたのを見て目を大きくして、星空に尋ねる鋼。

「星空もそんな鋼に意外だったかと尋ね返すと、鋼はそれを首を振って否定する。」

それから、他愛もない話をする2人。すると、翠屋の入り口が開いて、外から三人の第一高生徒が入ってくる。

「あつ！ 星空さん！」

「部活帰り？ お疲れ」

「ほのか？ 雫も……後は……」

「明智さんじゃないか。他クラスの人と一緒なんて珍しいね。同じ部活動の？」

翠屋に入ってきたのは、ほのかと雫。そして赤髪の少女で、星空の隣にいた鋼が彼女の名前を呼び、ほのか達と同じ部活動仲間か尋ねた。

「違うよ。偶然知り合っただけだよ！ 私、英美ⅡアメリカⅡゴールデイⅡ明智。エイミーで良いよ！」

そういつて、エイミーは星空に自己紹介をした後、まじまじと星空をみつめる。

「えつと……エイミー？」

「なるほどね〜」

流星に見つめられてなにかあるのかと、星空はエイミーに尋ねると、エイミー何かを察したのかに、やついた笑みで肘で少し赤らめているほのかの脇を突く。

流星に理由が分からない、星空と鋼は首を傾げたが、そんな中黙っていた雫が前に出て、星空に声をかける。

「星空さん。今日個室の予約入れてるんだけど……」

「個室の予約？ちよつと待ってね」

予約のことを聞くと星空は座っていた椅子から立ち上がりレジ近くに置いてある置き型端末で確認する。

「……うん、確かにあるね 予約してる個室は右手の方だから……」

「うん、わかった。ほのか、エイミイ早く行こう」

「えっ!?! ああ、うん!」

「……………」

星空が空いている個室の場所を伝えると雫は何処か馳せらせているようにほのかとエイミイを連れて個室へと向かい、その後ろ姿に星空は不信感を覚えた。

「……感づかれたかな?」

「え? 星空さんに?」

「うん、私達のこと不自然にだっと思って観察してた」

翠屋の個室に入った後、扉を閉めて完全に外に声が漏れないようにすると雫は先程の星空の表情から雫達を疑い深く観察していたことに気づき、ほのかは目を丸くして驚く。

雫も時間も無いため馳せさせたとはいえそこまで気づかせないように配慮した。

しかし、完全に不自然だと星空は怪しんでいる。もしかしたら何かしら自然体で聞いてくるかもしれない。

そう雫は頭の中で思いながら据え置き品の端末で注文をすると少し間を開けてから口を開ける。

「さてと……取りあえず、状況を確認しよう」

「そうだね。まずは目安箱に入れた紙。あれは生徒会にちゃんと届いたんだよね」

「多分。あれで上手く達也さんが狙われていることを伝えられてるし警戒もしてる。」

「それと私達、司波くんを襲ってる人を見たもんね。確か剣道部の主将の……」

「司甲先輩。まだ確証があるわけじゃないけど達也さんを狙ってる人

が居るのは確か」

今分かっていることを口に出して確認する三人。

達也を狙う剣道部の司甲（まだ予測段階）を目撃したのは偶然だったが達也を狙う襲撃犯を突き止めようとほのか達は双眼鏡などを駆使して観察していた。

「それでどうする？」

「うーん、まだ何かありそうだから調査は続行ってことで」

エイミイの言葉に頷くほのかと雫。このまま調査し続けるという結論に纏まった後、ほのかは不意に何かに気づく。

（あれ？）

するとほのかは机の下をのぞき、突発的な行動に雫とエイミイも首を傾げる。

「どうしたのよ。ほのか」

「え？今机の下に一瞬光ったような……」

「それ本当？ほのか？」

ほのかの言葉に眉をひそめる雫。

雫はほのかの光に対する敏感な体質を知っているからこそほのかの言ったことに現実味があるように思う。

しかしほのかが机の下を見ても何もなく魔法を使われた想子の痕跡すらない。

「ほのかの思い違いじゃないの？ほら観察してたから物凄く敏感になっただとか」

「……そうなのかな？」

観察していたことで周囲への警戒を強めていたからそれで見間違えたのではないかと口にするエイミイにほのかは間を開けてまだ納得も言っていない表情で呟き、雫も黙ってはいるが頭の中では先程のことを考えていた。

（……大体は繋がったかな？）

そういつてレジ前のカウンターで帰るお客の会計を行う星空は頭の中で手に入れた情報を纏める。

ほのか達に何かあると目星を付けた星空はほのか達や鋼……誰にも見えないように掌から音声だけ拾えるエリアサーチを作り出しそれを誰にも見えないようにほのか達の使っている個室の机の下に忍び込ませ、念話の要領でほのか達の会話は全て星空に筒抜けだった。

勿論情報を手に入れた後はエリアサーチ自体を消滅させたがその時一瞬だけ光ってしまいほのかに勘づかれかけたことは星空は知るよしもない。

「250円のお返しです。ありがとうございました」

お客の会計を済ませ、翠屋へと出て行くのを見送った後、また頭の中で情報を整理する。

（まず、達也を狙っているのは剣道部の主将、司甲……恐らく達也に目を付けたのは剣道部と剣術部のいざこざが始まりかな？）

付け加えるならあの告発書もほのか達が出したものと頭の中で付け加えながらお客が使ったカウンターを拭いて次のお客が使えるように整える。

（だけどそれだけじゃない）

ほのか達が探っているものは達也を狙っている物だけでは片付けられないと星空は知っていた情報と照らし合わせ考える。

（部活連から生徒会に回ってきた。剣術部と剣道部の騒動の調書。桐原先輩が言った剣道部の壬生先輩の剣筋が変わったという事実とと污染源が剣道部の誰かということ……これは污染源は司甲……これで間違いない。）

頭の中で一つ一つバラバラなピースをはめ込んでいくように星空は情報を整理していくと同時に使った皿などを洗い場で洗う。

（だけど、達也を狙う理由が分からない。単に二科生で風紀委員だからっていう理由なのだろうか……いや違う。多分僕が感じたあの視線もエガリテのメンバーのものだと推測すれば僕もその対象だろう）

新入部員勧誘期間で感じた視線。それがエガリテのものによるものなら達也と同じく星空も狙われていると考え達也が二科生だから狙われているという推測を否定し他の推測を立てる。

(1年だから……いや、魔法の無力化?)

これなら納得出来る。星空は自分の使った術式解体や達也のアンテナイトなしでのキャストジャミングもどき。前者は警戒から後者は欲する欲からと捉えれば色々辻褃もあった。

(だけどこれからどうする? 司甲が関わっているのは明確だけど。僕一人だと何が出来るか……)

幾ら星空でも一人ではこれ以上調べ上げることは難しく。いつそ達也を頼るかと考えるが直ぐにやめた。

(駄目だ。僕と達也と一緒に行動していたら更に警戒心を持たれる。となればほのか達? そつちも無理、危険なことに首をつっこんで欲しくないし、寧ろお願いしたら怪しまれる)

実際、ほのか達の密談を盗み聞きしていた星空は突拍子にお願いなど言えばほのか達に怪しまれるのも可笑しくはない。

(……今は僕一人で調べるしかないか……)

となればと星空はこれからのことを考え、先ずは何をするべきか模索し直ぐ出た結論に星空は苦い笑みを溢して呟いた。

「これは……母さんと父さんに話さない……」

仕方ないと思いつつもこの方法が絶対で安全と星空は割り切る。ことしか出来なかった。

入学編19

翌日

高町家で今日もいつも通りの朝を迎えた星空はなのは達と朝食を取り学校へ向かう準備を整えるといつもより早い時間に出ようと玄関前に向かうと一度家の方へ振り向くとそこにはユーノとなのはが並んで星空を見送っていた。

「それじゃあ行ってくるね。父さん。母さん」

「いつてらっしやい」

「絶対に無茶だけはしないでね」

行ってきたすとなのは達に向かって言う星空にユーノはいつも通り応対するがなのはは不安に満ちた表情で星空の心配の声を上げる。

「大丈夫。絶対に無茶はしないから」

そういつて星空は家から出て行くと見送り終えたユーノ達はその場に少し立ち尽くした後、お互い顔を向け合う。

「なのは。きつと大丈夫さ。」

「でもユーノくん。私は」

「分かっている。なのはの心配も分かるけど、あの星空を止められる?」

「それは……」

そう尋ねられるユーノになのは首を横に振って無理だと否定する。

「そういう。頑固なところはなのは譲りだよね」

「ユーノくん!?なのはは頑固じゃないよ!」

重い空気をどうにかしようとユーノが星空の考えを梃子でも変えないところはなのは譲りというとなのはは慌てて否定するがユーノはそうかなと満更嘘ではないと思っている。

「大丈夫だよ。なのは……星空が行ったとおり。これが最善な選択だと思う」

「ユーノくん……うん」

なのはは不安に駆られながらも星空が出て行った扉を見つめ暫くしてからユーノと一緒に翠屋へ向かう仕度を進めるのであった。

何故、ユーノやなのはが星空のことでここまで心配しているのか。それは昨日の夜まで遡る。

翠屋の業務が終わった後。なのは達一緒に帰宅した星空は私服に着替えた後、ユーノとなのはに真剣な表情で話があると述べると直ぐにただ事ではないと察した二人はテーブルの椅子に座って対面に座る星空の口を開くのを黙って伺う。

「……………父さん。母さん。無理だと承知の上で、口にするけど……学校にレイを持っていこうと思ってるんだ」

「えっ!？」

「星空……それを意味することは分かってるよね?」

重々しい口から出された言葉はなのはとユーノを動揺するのに充分な言葉だった。

それを聞いて動揺したなのはとは違い。ユーノはいつもの見せる父親としての態度ではなく。魔導士としての態度で星空に言葉の意味を確りと理解しているのと問うと星空は黙り込んで入るが確りと頷いた。

「わかってるよ。それがどれだけ無理な話だったことぐらい」

「星空。まずは訳を聞かせてくれないかな?」

落ち着きを取り戻したなのはがどうしてそういう話になったのかその経緯を説明してほしいと頼むと星空は潔く全てを話した。

第一高がいま反魔法主義団体ブランシユの下位組織が存在すること

その下位組織に関わりを持つとされる司甲にブランシユの下位組織のことを知らないほのか達が達也が狙われていたことから決定的な証拠を取るために観察していること

他にもブランシユに関わっていきそうな情報も隈無く全て話すとユーノとなのははことの深刻さを理解しその上で口を開いた。

「状況は理解できた。けどだからって星空がレイを持っていく必要は無いよね?」

「っ!それは」

「この重大さも理解は出来るけど、別に星空が魔導士として介入す

ることは無いはずだ。」

ユーノの言葉はあまりにも正論だった。

今の星空は一介の第一高の優等生でしかない。

本来なら反魔法主義団体など真由美や十師族などの上の者達に任せべきなのだ

星空が魔導士として出しゃばる必要は無い。

何より高町家を支える大黒柱としてユーノは星空の行おうとしていることを軽はずみに看過することができなかった。

「それにもし魔導士であることがバレたら星空一人がし被害に遭うわけじゃないよ」

「……………」

ユーノのいう事実には確りと理解している星空は顔をうつ伏せにして黙り込む。

もし星空が魔導士としてバレてしまったら星空だけではなく。家族にも被害が出て今までのようには過ごすことすら出来なくなる。

星空は分からないわけじゃないよね？と優しく問いかけてきたが星空はわかってるとそれでも納得のいかない星空は意を決してユーノ達に自身の思いを打ち明ける

「でも、このままじゃ…………目の前で異変が起きているのに目を背けて傍観するなんて出来ない！」

「……………」

「守りたいんだ！僕達がいる学園を友達を！」

「星空…………」

悲痛な叫びを上げる星空になのはもその内に秘めた思いを理解は出来るがユーノの言葉も一理あるとどちらかを擁護することは出来ない。

星空の言い分を聞いたユーノは暫く黙り込み考えた後。盛大なため息を吐いた。

「父……………さん？」

「いや、なにやっぱりなのは譲りだなと思ってね」

ため息を吐いたことで戸惑っていた星空だがユーノの口調はいつ

も通りの父親としての口調で顔つきも父親としての顔に戻っている。「きつと、星空は誰かのためなら何を言っても止まらないだろうからね。」

そう言った後、いいよと星空にレイを持つていくことを許可を出すのと一瞬啞然とした後、認めてもらえたことに笑みを浮かべる。

「ありがとう！父さん！」

「だけど！さっき言ったことは本当だから絶対にバレちゃいけない」

「うん！約束する！」

そう断言してユーノが言ったことを守ると約束した星空。早速とレイの調整に入ろうと自分の部屋に向かおうと椅子から立ち上がった直後、ユーノから呼び止められた。

「はい。ストップ……星空」

「え？えつと……父さん？」

「レイの調整はまあ急ぎたい気持ちもわからなくはないけど……なのは？」

「うん、ありがとうユーノくん。」

そうユーノにお礼を言うのは何故か笑みを浮かべていたが目が笑っておらず。怒ってますと言わんばかりの怒気が周囲から漏れ出していて星空の体を竦ませる。

「あつ、話はレイのことじゃないけど……説明するとき星空言つたよね？ほのかちゃん達の話を魔法で盗み聞きしたって」

「……あつ」

「にやはは……」

笑みと笑い声を上げるのはから突きつけられたのは先程星空が言ったかき集めた今回の情報。

その中にはあまり好ましくない方法を取って集めたことからなのはの琴に線に触れてしまったことを改めて理解した。

「まずは座って確りとお話していいこうか」

「……はい」

そういつて星空は立ち上がった椅子にまた腰を座らせ。なのはのありがたい説教は二時間ほど続いた。

入学編20

「You got angry last night」

「うん、今思い出すと身震いするからあんまりそこを触れないでくれないか？レイ」

いつもより早い時間に第一高へ向かうための坂道を上っている星空。

周囲には誰もいないことから第一高のポケットにしまっているレイが昨晚のなのはお説教のことを言うと星空はその時のことが恐ろしかったのか青ざめて身震いする。

星空の表情を読み取ってレイも付け加えてsorryと謝ってきて、その言葉に対してありがとうと星空はお礼を言うと第一高の校門前にたどり着いた。

「さてと……行くよ」

「I understand, Master」

意を決して敷地内に入りCADを預けると星空は屋上に足を運ぶ。案の定、屋上には星空以外誰も居らず。それを確認すると歩き始める。

「レイ。カメラの位置は……」

「All locations have been identified.
Turn left, then next corner, turn
— and go 5 meters ahead to reach
the blind spot. 《行きそこから5メートル先
に行けば死角です。》」

星空はレイに設置されているカメラの位置を聞くとレイはカメラの死角を割り出してくれて星空はその言葉に従いカメラの死角となっている場所に立ちポケットからマリンブルー色の宝珠……待機状態のレイを取り出す。

「ここでいいんだね。さてやるよ。レイ」

「Wide area search」

星空の足元にマリンプルー色の魔法陣が展開されると空に突き出した掌からマリンプルー色の光りが空高くに打ち出されるとその光は幾つもの球体に分離し第一高を中心に四方八方に飛び散っていった。

「これでよし……レイ。エリアサーチの操作は任せるよ」

「Please choose for me」

これで朝早く行く仕込みも終わったのか息を吐きその場を移動し始める星空。

星空が行ったことは第一高の周囲に自身の目となる探索魔法を配置して学校全体を監視するというもの。

これでエリアサーチが不振な動きをする者を見つければリアルタイムで星空に知らされることになる。

これで準備も完了と朝早く来たこともありこれからどうしようかと星空は来た道に戻り階段で降りていると三階の通路の先から見知った人物がやってくる。

「星空くん？」

「真由美先輩……もうこんな時間に来ていたんですか？」

「早めに来て纏めておきたかった書類があったから。そういう星空くんは？ 幾ら何でも早すぎる気がするんだけど」

どうしてかしら？ と首を傾げ星空がこの時間帯にきていることを不思議に思う真由美は尋ねると星空は少し考えた後直ぐに返事をした。

「いえ、この頃不穏な気配もありましたからもしかしたら朝早くにそう言った動きがあるかもしれないと思っただけです」

けど当てが外れましたと星空は乾いた笑みを浮かべて徒労に終わったとアピールし星空は真由美に悟られないように上手くごまかし、真由美も追求することはなかった。

「そうだ。時間があることだからカフェテリアに行かないかしら？」

早く来すぎた事で時間も有り余ることからカフェテリアで時間を潰さないかと提案する真由美に仕込みも終えて特にやることもなかった星空は迷うことなくその提案に頷き。敷地内にあるカフェテ

リアのテーブル席に座る。

〔真由美先輩の言動や表情から察するにエリアサーチを発動したことは気づいてないみたいだね。〕

〔Please be careful.〕

Because she has a high level of search

〔わかってるよ〕

そんなこと話が星空とレイの念話の間であつたことは真由美は知るすべはなく無料でコーヒーや紅茶の飲める自動配膳機から二人は飲み物を注ぎ。一口飲んだ後、口を開いたのは星空だつた。

「真由美先輩。無理してませんか？」

「え？」

「いえ、この頃色々と立て続けて起きてますから」

「そうね……確かに色々あるけどでも大丈夫よ。」

お姉さんに任せておいてと何処か作り顔で星空を心配させないとする真由美に星空はとても安心できることは出来なかつた。

「……真由美さん。」

「え？ 星空くん？」

少し間を空けてから星空が口を開いて出たのはこの学園に入学前に良く自分を呼んでくれていた名前。

いきなり前のように呼ばれ戸惑う真由美に星空は言葉を続ける。

「例え、真由美さんが十師族だからって一人で抱え込むのは辞めてくださいね。真由美さんだって他と変わらない人なんですから」

「か、星空くん!？」

誰もが特別ではない誰であろうと人であることは変わりはない。

十師族だからと色々と無理をしているのは直ぐに見抜いた星空は少しでもその重みも軽くしようと思つた言葉と中性的な顔から放たれる凛々しい顔つき。普段とのギャップに真由美は物凄く戸惑い頬赤く染め上げていく。

（マスターは相変わらずの天然ですね。）

とそんなことをレイが思っているとは知らずに星空は少し首を傾げた。

「あの？真由美先輩？（あれ？なんかマルチスコープ使ってる？）」「な、なんでもないわよ（周囲には誰もいないから誰にも聞かれてないわね）」

誰かに聞かれてもしたらそこから色々噂が流れかねないと真由美はマルチスコープで誰もいないことを確認しその後他愛もしない話で時間を過ごしていく。

そうして今日も授業が始まり。お昼休みには生徒会室で達也が剣道部の壬生紗耶香を言葉攻めにしたことで深雪の感の片鱗に触れるなどと言ったこともあり。それから放課後になって星空が部活動で鋼と打ち合っていると事態は動き出した。

「っ!!」

レイからの知らせが来たのは突然だった。

隙を突いて鋼に打撃を喰らわせようとした直後。レイからの報告を聞いた星空は直ぐに後方に下がり。それを不振に思った鋼が首を傾げる。

「どうしたの？星空。いきなり後ろに下がるなんて……」

「ああ、ごめん。ちよつと考え事してて……こんな風に打ち込んでたら……ごめん。鋼ちよつと風に当たってくる」

「ええ!?星空!?!」

ちよつと待ってと星空の背中から聞こえる鋼の呼びかけにも応じず練習から出た星空は心の中で鋼に謝りながらも校内を走る。

「ほのか達……!?!」

レイから来た報告。それはほのか達が司甲を追っているということ。

放課後、星空は第一高に配置したエリアサーチの内二つをほのか達と司甲の追跡に割り振っていた。

これによりリアルタイムでほのか達と司甲の行動を終えるのだがその二つの居場所があまりにも近くほのかたちが司甲を探っているのは明白だった。

しかも司甲もその追っていることに気づいている節がありもしかしたらほのか達の身に危険が降りかかるかもしれない。

「レイ！ほのか達と司甲の場所は!?!」
「Roger that. They are …」

念話でほのか達の現在地をレイから聞いた星空はほのか達に刻々と迫る危機を取り除くために急ぐ。

入学編 2 1

(どうして、こうなってしまったんだろう)

第一高から離れた路地裏で達也襲撃の容疑者と思われる司甲を追っていたほのか達三人はナイフなどで武装した男性達によって囲まれ窮地に立たされていた。

翠屋で作戦会議した翌日、司甲を観察していると明らかに不審な動きで誰かと連絡している素振りに気づかれないように追いかけていると学校の敷地を出て薄暗い路地裏に入っていく。

そこでこのまま追いかけるか諦めるかと立ち止まった三人だったが魔法も使え、その上相手は一人と過信しそのまま追いかけていると司甲は気づいたように足取りを速くして走り出しほのか達も気付かれたことに気付いて追いかけるが見失い。一旦戻ろうとした矢先、武装した男性達に囲まれたのだ。

始めはほのか達は魔法を駆使して善戦して逃げ切ることができると思っていたがここで彼らが付けていたアンテナイトによるキャスト・ジャミングによってほのか達は魔法を打ち消されその場に蹲ってしまう。

私達の詰めの甘さが招いた結果だと三人はナイフを構え迫り来る男性達に抵抗する力も出せずただ見ていることしか出来ない中。それは何処からともなく飛んできた。

「死ね！化け物でも…があ？」

大声を上げほのかにナイフを突き刺そうと振り落とした切っ先は突如として速球で飛来した何かに折られ言葉を失ったのも束の間。他の男性達の獲物も折られたと同時に彼らの後頭部が速球で飛来した何かが衝突し彼らの意識を刈り取る。

「な、何が起きたの？」

「助かった？」

いきな襲ってきた男達の武装を無力化したと同時に意識まで刈り取られたことで戸惑いの声を上げるエイミィ。それに雫も助かった

と諦めかけていたからかそんな安堵の声を上げる。

「水色の……球体？」

そう呟くほのかは雫やエイミーとは違いあの時起きたことを微かにだけ見えていた。

あの時ほのか達を襲った男性を倒したのは紛れもなく水色をした光の球体。

男性を倒した瞬間その球体は消滅してしまっただがほのかの目には確りとそれが焼き付いている。

(一体誰が……)

きつと誰かが助けしてくれたと考えたほのかだがこの場には襲ってきた男以外はほのか達しか姿が見えない。

「ふう……ギリギリなんとかなった」

「It was a dangerous place. What would have happened to them

「だから間に合って本当に良かった」

ほのか達から少し離れた路地裏でエリアサーチでモニターに映し出されたほのか達の無事を見てほっとする星空は心の底から安堵する。

あれから直ぐにほのか達の現場に赴き、武装した男性達を無力化したのは星空だ。

その場から魔法で思考操作型高速弾を複数生成しそれを思考操作でほのか達を襲う男達の武装と後頭部に直撃させた。

長居は無用だなとエリアサーチ越しに映るほのか達を映した空中電子モニターを閉じその場から去ろうとする星空の目の前に黒髪の知っている少女がやってくる。

「星空くん？」

「深雪？どうしてここに？生徒会じゃあ……」

「実は少し発注ミスがありましたので買い出しにそういう星空くんは？部活動の休憩中にしてはここからじゃ遠いし……そうだ。さつきほのか達がこの先に向かっていったみたいなのだけだ」

「そっか……この先にほのか達ならいるよ。ちよつと襲われて危険な状況だったけど」

それを聞いて深雪は啞然として驚く中。星空は無力化したから大丈夫と付け加える

「それじゃあほのか達のことには深雪に任せるよ。僕が行くと色々辻褃が合わなくなつて怪しまれるから……訳は後で確りと教えるから」
「星空くん!?少し待って……」

ほのか達のことを深雪に任せその場から去ろうとする星空に呼び止めようとする深雪だが星空は魔法陣を展開すると星空の姿はその場から消え去り魔法陣も星空がいなくなつてから直ぐに消滅した。

目の前で星空がいなくなつたことに深雪は驚くこともなく。ただ今起きた出来事を知っている知識で直ぐにどういうものなのか理解する。

(転移魔法……知り合いの魔法のようなものではなく……完全な長距離間の瞬間移動を可能とした私達の定義とは違う魔法の一種)

星空の魔法は以前にも深雪や達也も何度か見たことはあるが星空の力は周りから見ても異質の力だ。

先程の使つた転移魔法を始め、魔法師界が未だ実現できていない魔法を確立し地球を上回る技術力は何度も深雪達は戦慄した。

それがもしも地球に牙を剥いたのなら自分達は持ち堪えられるだろうか……

そんなもしかしたらあり得るかもしれない可能性を考えながらも深雪はほのか達の元へ向かう。

その日の夜。

第一高を含め八王子の通信などを受信する大型無線局に人目を掻い潜つてやってきた星空はデバイスのレイを持って展開するモニターを操作する

「やてと……どう?調べられそう?」

「Yes, there is only one corresponding」

the が commu重nicaなtion 履 start 歴 and 該 end 当 time は

「ビンゴだね。何所に発信されてるかわかる？」

「Please 少 wait 待っ a て little く. Specific さ com特pl定

— Apparently it is sent as it is, 《どうやらこのまま送信されているようですから、》— so maybe there is a base in Hachioji 《もしかしたら八王子に拠点があるのかもしれない》」

「他の場所にある無線局には行かずにそのまま……灯台下暗しってこのことを言うのかな？」

（これで色々と絞り込めることは出来た。後は怪しいところを風潰しに探っていくだけか……）

ここまで情報が集まれば今日は充分と星空はモニターを閉じて転移でその場から消えた。

司甲が畏まった口調で連絡していた先、星空は推測で繋がりのあるブランチであると結論付けた。もうすぐ居所を知られるかもしれないとは未だブランチはこのことを知らない。

入学編22

4月20日

その日の夜、第一高からそう遠くない場所にある廃工場の外周に星空は隠れながらエリアサーチで中の状況を調べていた。

「The^生re^はis^推a^定bi^体olo^反gica^応l^あrea^りction.
The^数number^はis^推estimated^でto^もbe^七more^十than^人before^以more^上than^はbefore^いmore^るthan^もbefore^も」

ブランシュの拠点を第一高からそう遠くないことを推測してから数日が経ち。割り出した地区に拠点と思われる施設を夜間に調査しそして今日、第一高からもそう遠くない廃工場に普通ではあり得ない生体反応を確認しブランシュの拠点だと星空は断定する。

「70人もいる時点で普通じゃないし……何より……」

そういつてエリアサーチを廃工場内に忍び込ませたことで内部の様子が星空の目の前に開いたモニターに表示されて内部状況が映し出される。

「銃火器で武装している時点でチンピラなわけないよね」

「What^そwould^でyou^どdo^うwith^まthat^か?
You^先can^手also^必hit^勝on^でthe^殴play^りfirst^込,」

銃火器を所持している事を確認しレイがそのまま殴り込むかと星空に尋ねられると星空は首を振り。レイに向かって告げる。

「いや、止めとこう。拠点を捜し出したことだけでも充分。攻め込むのは時期を見てから……それじゃあ今日は帰ろうか」

「Yes. master」

そういつて星空は空中に浮きそのまま夜空をゆつくりと飛んでいく。

次の日……授業が終わり放課後になって星空は今日は風紀委員としての見回りに出る日だったので淡々と帰る準備をして風紀委員会本部へ向かおうと思った矢先深雪が達也の元へ向かおうとしているのを見て星空は深雪を呼び止める。

「あつ、深雪待ってくれ」

「? 星空くん? どうしたんですか?」

呼び止めた深雪に星空は歩きながら話そうと告げると深雪も特に問題がないのか二つ返事で頷き。教室に出て達也の元へ向かう深雪に星空は平行して歩く。

「この前のほのかの……強いて言えばブランシユの一件だけど」

「はい。その件については……」

「うん。そっちも調べてるんだよね? だからお互い持つてる情報共有しておこうと思つて、今晚達也と一緒に翠屋に来れる?」

「はい。問題ありません。お兄様も星空くんとの情報共有のことは今朝、おっしゃってましたから」

「そつか……それじゃあ今晚に……『全校生徒の皆さん!!』っ!?!」

お互い同じ事を考えていたのか星空は達也の事を聞いてくすりと微笑み。途中で星空達は別れようとした瞬間、学園内全域に響く放送が流れる。

音量を完全に間違えたのかノイズが酷く。星空が見渡した限りでも何人かの生徒が耳を塞いでいるのが見てわかった。

そして直ぐに音量を調節して一言先程のことで謝罪の言葉を述べると続けて本題に入る。

『僕たちは、学内の差別撤廃を目指す有志同盟です』

「これは……動いたのか?」

「星空くん!」

続けて流れた放送に星空はエガリテが動き出したと予感し隣にいる深雪は星空の名前を呼ばれ。放送室に向かおうという意味が込められていることを察した星空は深雪と共に放送室へと向かう。

放送室前にたどり着くと既に渡辺摩利を始め風紀委員の生徒に實際体格がでかく威圧感のある男性率いる部活連の生徒達が集まっていた。

「来たか高町」

「お疲れ様です。渡辺先輩それと……」

「久しいな。高町二年前の謝罪以来か」

「はい。ご無沙汰してます。十文字会頭」

畏まった口調で話す星空の先にいる巨漢。真由美達と同じ3年の十文字克人は星空に視線を向けられていることに気づくと顔を向ける。

「十文字先輩とはお知り合いなんですか？」

「まあ、二年前にね」

顔見知りということに深雪は意外だと思いながら星空にその理由を尋ねるとあまり言いたくないのか苦笑いをしながら上手く茶を濁す。星空。

そんな中達也も漸く放送室前にたどり着く。

「遅いぞ司波！」

「すいません」

「状況を窺ってもよろしいですか」

「いいだろう。他の者も聞いてくれ」

達也が駆けつけたことで摩利は現状の説明を語り出す。

「連中は中から鍵を掛けて立て籠っている。電源をカットしたからこれ以上の放送はないが、問題は連中がマスターキーを盗んだ上で事に臨んでいる点だ」

「用意周到……計画的に行われたのは間違いないみたいですね」

厄介だなど正攻法では開けられない扉を前にどうしたものかと考える星空はふとポケットに入れてあるレイに念話で語りかけた。

「(レイ、話は聞いていたと思うけど。この電子ロック。レイなら解除できる?)」

「(It's a stupid question. No problem, but doing so will affect the master)」
「(例えだよ。例え)」

いざというときの最終手段は有効と確認することが出来た星空は摩利達の話に耳を傾けると話は進んでいて達也が通信端末で誰かに

連絡を取っていた。

「壬生先輩ですか？司波です。……それで、今どちらに？ はあ……放送室に居るんですか。それは……お気の毒です」

達也の連絡している相手が壬生だということに周囲は驚愕する中。そんな周囲のことなどなんとも思っただけのように達也は壬生との連絡を続ける。

「十文字会頭は、交渉に応じると仰っています。生徒会の意向については未確認ですが……いえ、生徒会も同様です。ということで、交渉の詳細について打ち合わせをしたいと思います……」

そうして淡々と達也と壬生の話し合いは続き、壬生は自ら出て来ることとなり交渉は一段落したのだが星空は苦笑いを浮かべていた。

「さてと、星空。」

「わかってるよ。壬生先輩以外の立てこもり犯は拘束すればいいんだよね？」

全く人が悪いと星空はCADを確りと手に持ちいつでも魔法が使えるように準備していると何事もなく丸く収まると思っただけで、達也は星空の行動に首を傾げた。

「ちよつとまで、司波、高町。ついさつき司波が安全は保証すると約束したんだぞ？それを反するわけには……」

「俺が自由を保障したのは壬生先輩一人だけです。それに俺は、風紀委員を代表して交渉しているなどは一言も述べていませんよ」

「どの達也の言葉なので……」

明らかに一言二言足りてないぞと少し愚痴を溢すように星空は達也に向けて言うと思かたなどあまり反省はしていない様子で星空の愚痴を聞く。

その光景に摩利達は呆気にとられていたがなんとか持ち直して確保の準備に取りかかり。達也の罠に引っかかった壬生が放送室の扉の鍵を開けた瞬間。中に突入して壬生以外の立てこもっていた生徒は直ぐに確保された。

「司波くん!!どういふことなのこれ!私たちを騙したのね!」

「司波はお前を騙してなどいない。お前たちの言い分は聞こう。交渉にも応じる。だが、要求を聞き入れることとお前たちのとった手段を認めることは別の問題だ」

騙されたと憤る壬生は達也を睨みつけるが十文字は交渉には応じると言った後立てこもりなどの犯した手段については確りと罰を与える。と仁王立ちで壬生に言い放ち。その威圧で壬生は後退るとそこに真由美がやってくる。

「それはその通りなんだけど、彼らを離してあげてもらえないかしら」

「七草会長!」

「だが真由美!」

「ごめんね摩利、言いたいことは理解しているつもりよ。でも、学校側は今回の件を生徒会に委ねるそうです」

真由美の登場に驚く風紀委員や部活連の生徒達。摩利も真由美の手を離すようにという指示に容認できず声を上げるが今回の件を生徒会の一存に委ねられることを聞き星空は眉間を寄せ真由美に向かって口を開ける。

「教員達はあくまで静観するということですか?」

「そう捉えて構わないわ」

「幾ら何でも放任しすぎです。教員方は教職員としての自覚があるんですか?」

こんな状況になりながらも一向に動かない教員陣に流石に苛立ちを覚える星空。真由美もその目に映る星空の苛立ちに気圧されかけますが真由美は上手く星空を宥めさせようと話し出す。

「星空さんの憤る気持ちもわかるわ。本来なら教員達が動くべき事態。だけれど私は十師族に連なるものとして信頼されているから任されたのよ」

「……………わかりました。今はそういうことにおきます」

まだ完全に納得しきっていない星空だがここで駄々を捏ねるだけでは駄目だとひとまずは納得した形を取り。それを聞いた真由美はありがとうと謝礼をいい。壬生に視線を戻す。

「壬生さん、私たち生徒会はあなたたち有志同盟の主張をこれから聞こうと思うんだけどついてくる気はある？」

「私たちは逃げる気はありません！」

「じゃあ決まりね。それじゃあみんなお先に失礼するわね」

そういつて壬生と一緒にこの場から立ち去っていった真由美。それから今回の件を風紀委員の先輩や部活連に任せた後。当初の予定である見回りを始めた。

入学編 23

真由美と壬生の話し合いの末明後日、23日の放課後に討論会が開かれることとなり。その場でお互いの決着を付けようという結論になった。

それを風紀委員の見回りを終えた後聞かされ。事態が動くと裏の事情を知る誰もがそう思ったその日の夜。

お店は時間営業外で誰も居なくなつた翠屋で星空は廃棄処分ではないらなくなつた食材を使い厨房で料理していると鍵が開けていた入り口の扉が開くと達也と深雪が店内に入ってくる。

「いらつしゃい二人ともちよつと待って直ぐに出来るから」

先に個室で待つててと言うと達也達は頷き。個室へと向かい。星空も作つた料理を持ちながら達也達が居る個室に入る。

「お待たせ。はいこれ。夕食まだなんでしょ？」

「そうだが……いいのか？」

「うん。母さん達には言つてるし使つた食材は全部賞味期限ギリギリのものばかりだから捨てるよりいいでしょ？」

そういつて星空は作つた料理を2人に勧め。達也達も星空の好意を無駄にするつもりもなかったためにありがたく受け取ると星空の作つた料理を堪能し食べ終わった後。料理で使つた皿を片隅に置いて星空が口を開ける。

「取りあえず。今日来てくれて本当にありがとう。深雪から聞いてると思うけど今回の件……他ならないエガリテとブランシユの一件についてお互い情報交換しようとして来てもらった」

「ああ、ほのかの件も深雪から聞いている。星空が助けたから良かったがもし星空が居なければ想像もしたくないな」

ほのかが司甲を追いかけて罨にはまったことは深雪経由で聞かされており。達也はほのか達のことを心配し星空が居なければどうなっていたかとぞつととして仕方が無い表情を見せる。

「その件だけ……訳あつてほのか達が司甲を追いかけているのを知つてね。危険だと思つてほのか達と司甲を魔法で監視してたんだ

よ。それでほのか達を助けることは出来ただけど……」

「最後は深雪に任せただったな。自分が出ると辻褄が合わなくなるということだ」

「はい。その通りですお兄様。部活動の真っ最中に抜け出してその後、転移で戻られたみたいですけど」

「明らかに地球で既存する魔法を駆使しても無理だからね。知られたら問い詰められるのが見えてるし」

あつ、話がそれてるねとほのかが襲われた件について長く語ってしまつて本題に入れていないことに気づきうつかりしてたと呟く星空に深雪は星空の名前を呼んだ後続けて話し続ける。

「その件なんだけど。ほのか達が追いかけていた剣道部の部長……司甲という男について私達なりにも独自で調査していたの。それでわかつたことなのだけど司甲の義理の兄司一という男。この男がブランシュ日本支部のリーダーであるということがわかつたわ」

「なるほど……それなら司甲と繋がっていても不思議じゃないね。とつかかそれ何処からの情報？四葉は……前みたいに情報収集能力は無くなっているはずだけど」

「ああ、その点では俺の体術の師匠を頼らせてもらった」

「忍術使いの九重八雲さんですか」

司甲の裏に居るのは義理の兄である司一であることは明白だと思ふ星空だが、かつてなのはが半壊させた四葉には情報収集能力以前のようにはないことから何処から仕入れた情報なのか疑問で首を傾げると達也が九重八雲を頼って手に入れたと説明すると星空も納得して頷いた。

「俺達からは以上だ。星空の方は？深雪からほのか達が襲われて時のことを察するにレイディアントハートを持ち歩いているのはわかつてる」

「まあ、わかるよね……」

そういつて星空はポケットからレイ……正式名称レイディアントハートを取り出し、呼びかけると星空達の話し合いを聞いていたのに必要な情報を投影型の電子モニターを展開する。

「これは……！まさかブランシユの拠点を特定したのか!？」

「うん。ほのか達が襲われたとき司甲は連絡してたみたいだし……その後色々やってね。ブランシユの拠点を割り出したよ。」

流石に無線局に近付き受信した履歴から拠点の地域を絞り込んだことは濁して語る。

「一高からそれほど遠くないな」

「うん。その点については達也と同じ気持ちだよ。灯台下暗しってこう言うことを言うんだろうね」

レイによって映し出されているマップからそれほど遠くないことを眉をひそめて考える達也。そんな中ブランシユの拠点を知ってテーブルを叩き立ち上がったのは深雪だった。

「どうした。深雪?」

「どうしたではありません！既に居場所がわかっているのですからあちらが動く前にこちらから仕掛ければ良いではないですか！私達3人ならば容易に制圧することなど造作もありません！」

居場所もリーダーもわかっただけで手を拱いてはいられないと今から乗り込もうと大声を出す深雪だが達也も星空もそれに賛同しない。

それを見てどうしてと深雪は反論するが深雪に対して星空は冷静に喋りだす。

「深雪の言うとおり。僕達三人でならブランシユを壊滅させることは簡単だよ……だけど相手はブランシユだけじゃないよね?」

「っ!!」

「そういうことだ。深雪、エガリテ……司甲や壬生先輩などの賛同者達は残ったままになる」

「更に言うところブランシユの下位組織であるエガリテがブランシユ壊滅でどういった行動を起こすかわからないだよね」

下手をすれば玉砕覚悟なんてこともあり得ると星空はブランシユ壊滅からのエガリテへと影響を話すと今すぐにもブランシユを壊滅させようと意気込む深雪の顔はみるみると青くなっていく。

「申し訳ありません。そこまでお兄様も星空くんもお考えだったなんて……」

「いや、深雪を悪く言ったわけではない。深雪もほのか達が襲われたことで気が立っていたことも知っている。俺もエガリテの件がなければ直ぐにでも潰しに行きたい気分だ」

ほのか達の件もあって気が立っていることを知っていた達也は深雪を宥めるとそれを見て星空が口を開いて喋り始める。

「取りあえず。討論会当日にエガリテやブランシユが動くのは確かかな。拠点を監視してるサーチャーにブランシユの構成員が慌ただしく動いているのを確認した。多分一高を襲撃する準備を整えてるんじゃないかな?」

「本当か!?……しかし止められないのか?」

「うーん、止めようにもどのルートで来るのかもわからないしその時僕らは授業中だから怪しまれない様に動くことは出来ないと思う」

「となれば第一高校の襲撃は回避できそうにないか」

確実に事が起きる明後日にブランシユが第一高校を襲撃してくると述べる星空にどうにかして来る前に止められないかと苦い顔をして打つ手がなしか尋ねる達也に星空も目立たないようにすることを前提では不可能と述べて達也もやむを得ないと俯きながら呟く。

「それで……達也達には言っておこうと思っただけだ」

少し歯切れを悪くして星空は達也達を見ながら話すと今更何をと不思議そうにする達也達に息を整えた後そのことを口に出した。

「ブランシユの拠点。討論会当日に僕一人で潰しに行くけど……それで問題ないかな?」

口に出された星空のその言葉に達也達は目を大きくして少しばかり絶句した。

入学編24

4月22日

放送室立てこもり事件から翌日。星空は合流したほのかや鋼と共にいつも通り他の生徒達と同じぐらいの時間帯で通学路である第一高校へ向かう坂道を歩いていた。

「星空。昨日の騒動なんだけど……」

「昨日の立てこもり事件のこと？まあ知ってるよね……」

鋼は昨日事の発端であった放送を聞いていたからか風紀委員である星空に事の顛末を聞こうと尋ねるとあれだけの騒ぎになっていたから気になって当然かと少しため息を溢しながら言える程度の事を話し始める。

「色々詳細は省くけど。要するに二科生の不当な扱いに対して異議を申し立ててるの……ただまあ……仮に二科生の意見が通ったとしても一科生との間の亀裂が更に酷くなるだけなんだと思うけど」

「やっぱり」

「え？どうしてなんですか？」

要点だけで昨日のことを説明した後。星空は一科生と二科生の間の溝が更に深まるだろうと口にするると雫はそれがわかっていたことで呟き。それを聞いた、ほのかはわからないからか雫と星空に尋ねた。

「教師の有無なんかもあるけどカリキュラムに関しては一科生、二科生問わず全く同じ内容だつてことは知ってるよね？」

「はい、そうですね。でも……その差は大きいですよ？」

「確かに教えてくれる教師がいるっていうだけでアドバンテージに感じるかもしれないけど……それは教師の少ない現状で全体を賄えないからという理由があるわけだし……生徒がとやかく言ったところでどうしようもない現状だしね。仮に差別撤廃が通ったとしても今度は一科生が反発することになる。」

「それは今まで通り授業を受けられなくなるから反発もするだろうね。そうか……そういうことか」

二科生有志が掲げる差別撤廃が通った場合の仮定の話をしていると鋼は腑に落ちた表情で星空が言いたいことを理解するとそれを見ただけの鋼はわかったみたいだね。ごく少数の一科生が二科生を差別しているというのには確かだけど、それは見下しているという感じだ。ただここで差別撤廃が通ったらどうなる？」

「えっと、二科生にも教師がついて一科生にも教師が付かない日が出るから……」

「一科生からも二科生のことを恨む人達が現れる？」

「その通りだよ。少なくとも両者の間の険悪化はより一層深くなるのは明白だろうね」

一科生と二科生との更なる関係悪化そのことを理解した二人も状況がかなり悪いということ顔で青くして星空はそんな二人を見ながら話も続ける。

「ただその件は真由美先輩に任せるしかないかな。真由美先輩ならきつと両者納得いく形で上手く納めると思うから」

だから大丈夫だよと顔を青くする2人を落ち着かせ、校門にたどり着くと既に明日に行われる差別撤廃を掲げる有志同盟の二科生が賛同者を募っている光景が目に入り討論会がどういう風に終わろうと今のあり方が変わることは間違いないと星空は確信しながら昨晚のことを思い浮かべる。

昨晚

「一人で乗り込むだど!?何を考えているんだ!」

星空の発言に直ぐ達也が声を荒げる。

「それが一番安全だから言ったんだよ」

「なら一人で行くこともないだろう。エガリテの一件が終われば……その後行けば……」

「その時確実に十文字先輩か真由美先輩はいますよ。怪しまれないことを第一にするんだったらそれは避けるべき。仮に2人がいなくてもブランシユのメンバーはどうやって連行するつもり?公共の機関

の手は借りるのも全く同じことだよ」

「それは……叔母様達の力を借りて……」

「それじゃあ、七草辺りに勘づかれる。かといって制圧した後密告してブランシユの場所を教えなくても捕まった構成員が達也や深雪と口を割ってしまう可能性が高い。」

2人の反論に星空は一つ一つ論破して黙らせるとそれを見て後一押しだと話を続ける。

「それと僕一人で行く場合ならアリバイと正体の隠蔽。両方こなせる自身がある」

「……確かに星空なら可能だな」

「お兄様!？」

「だが、こつちも黙っているつもりはない。エガリテの事が終わればブランシユ殲滅を周りに促す。先に乗り込んでいる星空の安全とブランシユを一人も逃がさないためにな」

それに場所についても他に調べていそうな人に当てがあると行って仕方なく星空の独断を渋々認めると星空もそれを聞いて頷いた。

「うん。わかったそちらの方が確実だろうしね」

(さて……どちらにしても明日が正念場だ)

有志同盟を見て密かにそう決心する星空。

そして時間は過ぎていき翌日の放課後、討論会が間近に迫り行動にはそれを聞きに来た一科生と二科生が集まっている。

「かなり集まってきたな」

舞台の端の幕から講堂にいる生徒達の数を見て思いの他集まっていることを呟く摩利。

「それだけ、この討論会に興味を持つ生徒達が居たってことなんでしょうが……やっぱり」

「どうした？高町？」

摩利の隣で同じく講堂に集まっていた生徒達を眺める星空はあることに気づき、そのことを思わせる言葉を呟くと同じく控えていた服部が星空の呟いた言葉に反応して尋ねると星空は振り返る。

「昨日の事件で壬生先輩を始め立て籠もっていた生徒達の姿がありません」

「そういえば……つまり彼女達は他に何かしていると言うことかな？」

「はい。ですが講堂にも仲間はいるでしょうから大人数で動けば気取られる可能性があります。取りあえずは僕一人で探してはみませんが」

「……確かにそうだな。仕方が無い」
だが無理はするなよと完全に納得はしていない様子だが星空の提案にも一理あるという表情で摩利は星空の提案に頷くと星空は講堂から離れ中庭を周りから怪しまれない速度で歩く。

(やてこと……)
〔Master.〕

Wide area search in the school is
There are already students in several

places who are behaving suspiciously.

「壬生先輩の位置は？」

〔She is near the library.〕

However, there are other people of this school hiding nearby.〕

「目的は図書館二階にある特別閲覧室。魔法研究の文献資料かな？」

「このことを達也の端末に送信。達也だから言いふらすことはないだろうし」

(OK)〔〕

既に配置していたエリアサーチにより既にブランシユ側は動いていることをレイを通して知った星空はこのことを達也にも伝えるために達也の端末にメッセージを送ると星空は見回りしているように装い歩く。

「時間的にはそろそろかな？」

今頃行われている討論会のことを思っって星空は一度講堂に振り返

り。直ぐに視線を戻し校門前へと向かっていく。

(全く。星空の奴は)

「どうされましたか？お兄様」

「……壬生先輩がブランチユのメンバーと行動を共にしているようだ」

「っ…そうですか」

達也の端末に星空から送られてきたメッセージを見て既に敵側の動きがあることを知った達也はその情報を手に入れた星空に対して相変わらず手の早いことを苦い笑みを浮かべ、兄の反応に気づいた深雪は周りに聞こえない声で達也に尋ねると達也も深雪に星空が送ってきたメッセージの内容を簡易に伝えて深雪は気づかれないようにそのことを理解して呟いた。

既に講堂内では有志が集まった二科生と生徒会長である真由美のお互いの主張を言い争う討論会が行われていた。

「二科生が自らをブルームと称し、二科生をウィードと呼んで見下した態度を取る。それだけが問題なのではありません。二科生の間にも自らをウィードと蔑み、諦めと共に受容する。そんな悲しむべき風潮が確かに存在します。この意識の壁こそが問題なのです！現在の制度では、会長以外の生徒会役員は一科生からしか選出することができません。私はこれを、退任時の生徒総会で撤廃することを、生徒会長としての最後の仕事にするつもりです。人の心を力づくで変えることはできないし、してはならない以上、それ以外のことで、できる限りの改善策に取り組んでいくつもりです」

(これは七草会長の独壇場だな……)

この学園の抱える問題を解決することが生徒会長としての最後の責務だと断言した真由美の発言は一科生だけではなく二科生からも拍手喝采が起きて、差別撤廃を主張していた二科生有志もそのことを聞いて最早何も言えない表情で俯く。

真由美の完全勝利。更に学園の問題の兆しすら開け何もかも問題なく終わろうとしたその時、外から何かの爆発音が鳴り響き講堂は拍

手喝采から戸惑いと悲鳴に変わった。

入学編 25

外から響いた爆発音と共に講堂内に響く悲鳴。

その混乱に乗じて一部の二科生が隠し持っていたCADを取り出そうとするが取り出す前に警備していた風紀委員達により組み伏せられて無力化される。

「何かしら起きるとは思っていたがまさか襲撃してくるとは」

詰めが甘かったと予想外な出来事に苦い顔をする摩利。CADを所持していたエガリテに属する二科生を拘束した後。

マルチスコープで周辺の索敵をしている真由美が戸惑いながらも集めた情報を整理して隣にいる摩利達に向けて話し始める。

「たつた今、確認したのだけど現在この学園に武装したテロリストが侵入……既に入り込んでいたためか各地で騒動が起きているわ。それと先ほどの爆発なんだけど施設に損害が何所にも見当たらない。もしかしたら誰が未然に防いだのかも」

「なに？ 一体誰が……」

(まさか……)

先ほどの爆発の詳細を聞いた摩利が誰が未然に防いだのかと考える中達也はその人物に心当たりがあるために脳裏でその人物を思い浮かべる。

時間は少し遡り実技棟にブランシユ構成員の炸裂弾が曲線を描いて迫る中、その途中で下から向かってきた透明な何かにより炸裂弾は空中で爆発し周辺にいた人達は戸惑いを隠せずにはいた。

「ど、どうなっている!?!」

「まさか我々に気づいていたのか!?!」

炸裂弾の空中爆発に既に生徒達がパニックになって逃げ惑う中。ブランシユ構成員達も実技棟に当たる前に爆発したことで戸惑う中。構成員にゆっくりと近づく人物が一人。

「残念でした。悪いですけどお取り込み中なのでお引き取り願えませんか?」

「っ!!」

そうお願いする彼……星空の言葉に反して構成員は近付く星空に気づくと即座に持っていた銃火器で発砲。その弾丸は星空の目の前に発生した障壁に止まって落ちていく。

「無駄ですよ」

「くっ！アンティナイトだ！アンティナイトをつかえ!!」

銃弾が障壁で防がれるのを見て直ぐに次の手段だと他の構成員達にアンティナイトによるキャスト・ジャミングで星空の魔法を阻害使用とアンティナイトから発せられる波が星空を覆い尽くす中。星空は平然と立ち続け銃弾を防ぎ続けている障壁も解除されていない。

「ば、馬鹿な!?何故キャスト・ジャミング内で魔法が使える!？」

「うーん。どうしてかな?」

キャスト・ジャミング内で障壁が切れないことに戸惑う構成員に星空は素っ気ない返事をした後違う魔法を発動し星空が目視出来るだけの構成員の銃火器を銃身から切断し使えないようにする。

「なっ!?!銃が!？」

「もしかしたらキャスト・ジャミングに影響されない体質なのかも」

(まあ、嘘だけど)

持っている銃火器が使い物にならなくなったことに響めく構成員達を他所に余裕な表情でキャスト・ジャミングが聞かないことを自分なりに答える中。ある対策をしてキャスト・ジャミングの影響を受けていないだけだと内心で言い切る。

(実際はあちら側^{ミッド}の魔法の身に纏うフィールド系防御魔法でキャスト・ジャミングのサイオン波を遮断してるだけなんだけど)

「さっさと撤収した方が痛い目を受けずに済みますよ?」

といってもブランシユ構成員からしたらミッドの魔法を感知することは不可能なために星空が言うように体質という嘘が信憑性を増して怖じ気づく中。星空は退いてくれることを願い再度警告するがあちらにも退けない理由があるために近接用の武器を手にして星空へ向かって襲いかかる。

「やっぱり退いてはくれませんか……」

向かってくる敵を目にして両手に圧縮した風を纏い眼前の敵へと踏み込んだ。

更に襲撃前に時間は戻り第一高の隣にある演習林現在そこではSボード・バイアスロン部が部活動の練習で使っていた。

勿論、バイアスロン部の部員であるのかと雫もジャージ姿の体操着でその練習に参加していた。

「演習林を使える日はめったにないから思う存分に練習していくよ」

そうバイアスロン部長五十嵐が部員に声かけるとそれに応えるように返事をして各々練習に取り組む中ほのかはふと校舎が方角の空を見つめる。

(討論会はどうなったんだろう)

練習に励む中ほのかの脳裏にはそのことで頭がいっぱいだった。

星空が言うような最悪の結果になればこの学園は更に雰囲気が悪くなるのは必然であり。その影響は自分の周りに及ぶことも簡単に想像が出来た。

「ほのか、どうしたの?」

「し、雫!? 何でもないよ」

そんな今後に黄昏れていると様子を見かねた雫が声をかけそれに過剰に否定するが雫にとってほのかの反応を見れば明らかに誤魔化していることが直ぐにわかった。

「星空さんのことが気になるの?」

「ええええ!? ち、違うよ!? それは確かに星空さんのことも気になるけど……」

ぶつぶつと顔を赤らめてあからさまに星空を気にしているほのか。

そんなほのかをやっぱりとわかりきった目で見つめる雫はほのかに頑張れと言ってその意味をわかったほのかは顔を更に赤くしてこくりと頷く。

そろそろ練習に戻ろうと討論会や星空のことで頭がいっぱいなほのかを雫が練習に戻そうと手を引いた直後第一高の校舎方面から爆発音が鳴り響く。

「な、なに!?!」

「今の音……爆発?」

爆発音に取り乱すほのかに雫はあまり慌てず先ほどの音が爆発音だと分析し第一高で何が起きたのかと思考を巡らせる。

他のみんなもほのかのように戸惑いを隠せず不安を顔に出す中。部長である五十嵐が状況を確認しようとする端末を操作して確認すると青ざめた表情で周りにいるほのか達に説明する。

「おおおお、落ち着いて聞いてね。現在学園に武装したテロリストが攻め寄せてきているらしいの」

「テロリスト……」

「護身のために一時的に部活用CADの使用が許可されています。でもあくまで身を守るためだからね。光井さん危ない!」

あからさまに取り乱した口調で学園がテロリストに襲われていることを伝えると周囲は更に不安の顔を濃くし部活用を持っているCADでの自衛の使用を伝えた後。五十嵐部長が演習林の中からこちらに向かってきているテロリストを見てナイフの刃先にいるほのかに向けて声を上げる。

「え?」

「ほのか!!」

突然迫り来るテロリストにほのかは短く声を漏らし予期せぬ出来事と恐怖で体が竦んで上手く身動きが取れず。テロリストの凶刃にその身を突き刺されそうになるが咄嗟に部活用CADで魔法を発動した雫がテロリストを吹き飛ばす。

「大丈夫?」

「雫!」

「うちの部員に何するのよ!」

ほのかの安否を確認する雫に助けられたほのかは返事をする中。部員が傷つけられそうになったことに憤る五十嵐部長が特大の圧縮空気弾をテロリストに叩きつけ、テロリスト周囲にクレーターが出来るほどの穴があきテロリストも横向けになって倒れ込んだ。

(助かった……けど)

「ほのか……大丈夫、私も怖かった。ほのかが狙われてなかったら

きつと動けなかった。だから……」

少しやり過ぎではないかと周りが思う中テロリストが現れほのか自身が狙われて恐怖から自衛すら出来なかった自分に表情を暗くする。

そんなほのかの表情を見て自身の思っていたことを口にしてほのかだけが恐怖で動けなかったわけではないというところほのかも慰められていることに雫にお礼を言う。

「みんな！とりあえずここから中庭に移動するわよ！十文字会頭が指揮を取ってるらしいから合流したら指示に従って!!」

ほのかと雫が互いに話し合っている内に端末で状況を見ていた五十嵐部長が中庭にて十文字克人が指揮していることを確認しそれと合流することを部員達に促すと二つ返事で声を上げほのか達バイアスロン部は第一高校舎方面へ駆け足で向かっていく。

入学編26

「これは……」

講堂から校門前までやってきた達也と深雪は校門前での光景を目の当たりにして思わずそんな言葉をもらした。

「ば、馬鹿な……!」

「ばけ……もの……め」

「ふう、これで片付いたかな」

達也達の目の前に広がるは20人以上はいる戦闘不能となり倒れているテロリストとそれを相手してやってのけたであろう星空は手を叩いて平然とした顔で一息ついていた。

「流星に全員片付けるとは思ってたがよ……全然余裕の表情じゃねえか」

「レオ、居たのか……状況……まあ聞かなくても察してはいるが」

「俺もあの爆発でこっちに來たんだが……星空があいつらに囲まれてたから助けようとしたんだが……加勢する必要もねえぐらいに」

「星空が圧倒的だったわけだ」

達也達の直ぐ近くに騒動に駆けつけたレオが居て達也は声をかけると囲まれていた星空の加勢に出ようとしたがそれすら要らないレベルで星空がテロリストを蹴散らしてしまったために不完全燃焼のように響め面をしていた。

（星空のことだから心配は要らなかったが……やはりレイディアントハートを使っているのか）

（レイディアントハートを用いた端末型CADの遠隔操作。テロリストから見ればCADなしで魔法を使っているようにしか見えないだろう。自立思考ができるAIなど何所の国でも存在しないからな）

そう内心で星空の戦いを聞きどういった戦い方をしていたか達也には想像が出来、内心で苦笑いを浮かべる中。テロリストを拘束した星空が達也達に近付く。

「達也」

「星空、どうやらお前一人で問題なかったみたいだな」

「多分ここ以外はまだ乱戦模様だと思うけどね。」

「そのようだな」

「取りあえず片っ端から鎮圧していくしかないみたいだし、もう渡辺先輩には連絡してこっちに監視のための人を回してくれるみたいだからそれまで僕はここで待機かな？だから達也達は他の場所に行つて……それと壬生先輩なんだけどこの騒動が起きる前に図書館方面に向かつていったのを見たよ」

星空は達也達にここは任せて他の場所に行つてと告げるとその言葉には星空が知らせてくれた壬生達が居る図書館に行けという意味合いが含まれていることに直ぐに気づき達也達が怪しまれないように壬生がいる場所を伝えると達也は領き、深雪とレオ、そしてCADを取りに行つていたエリカも加わり図書館へと向かつていく。

その途上で達也達の担当であるカウンセラーの先生から星空と同じ情報をもらい。達也がそれを利用して星空から聞いたことを誤魔化そうと考えたのは余談である。

一方、摩利の指示で派遣された風紀委員に鎮圧したテロリストの監視を任せ、動き出した星空は中庭をテロリストを確実に鎮圧しながら速度を緩めずに駆けていた。

「これで20人目、一体何人居るんだ？」

〔Master. — The enemy is in the direction of 2 o'clock and 9 o'clock. 《二時の方向と九時の方向に敵です。》 aiming for the master.〕

「わかつ……たっ！」

速度を維持しながら入り込んだテロリストの数を愚痴る星空だがそこにレイから中庭の建物の陰や茂みの中から大暴れしている星空を襲いかかろうと潜伏しているテロリストのことを念話で伝えられると星空は右手の掌を二時の方向に勢いよく突き出すと収束系の魔法で風の密度を圧縮していた

空気砲を飛ばしテロリストはなすすべもなく風圧に吹き飛ばされた後、星空は間を与えずに軽く跳躍し蹴り回すと蹴りから放たれた風の衝撃波がもう一人のテロリストを吹き飛ばし意識を刈り取る。

そして星空は直ぐに倒したテロリストの手足を結束バンドで縛った後再び動き出すとある一角に部活動中で襲撃で学校に戻ってきたほのか達と肩を負傷している鋼とそれを心配するエイミイの姿。

それを見て走る速度を上げ四人の元へ駆けつける。

「ほのか！ 雫！」

「星空さん！」

「星空さんも無事だったんだ」

星空に呼びかけられほのかと雫は星空の無事な姿を見て安堵する。ほのか達の横で立ち止まった星空は直ぐに視線を負傷している鋼に向ける。

「鋼大丈夫？」

「なんとかね……いつ……！」

「十三束くん！ 動かないで！」

星空が声を掛けると体を動かした鋼が痛みに顔を歪め、直ぐにエイミイが過敏に反応して戒める。

その光景に少し星空は目を丸くしていると制服の裾を引っ張る雫。それで鋼達から少し離れると二人に聞こえない容量で口を開ける。

「私達もさつき来たばかりだけど。十三束くんが襲われたエイミイを庇って怪我をしたって」

雫の説明に星空はあの二人の様子に合点がいき納得していると星空の元へ巨漢が近付き、重みのある声で呼びかける。

「高町」

「十文字会頭」

話があると周りに聞かれるのが拙いのか少し離れた場所に移動すると星空に顔を向け、口を開けた。

「七草からの情報で図書館に向かった壬生とブランジュの構成員は司波達によって拘束されたようだ」

「そうですか……」

「暫くして落ち着いたら壬生に事情聴取に向かう。付いてくるか？」
「……いえ、止めておきます。テロリストが残っているかもしれないから」

あちらは無事に終えたかと星空は心の中で達也達が上手くやってくれたことに安堵し十文字に壬生の事情聴取に立ち会うかと尋ねられるとやんわりと断り。少し間を空けてそうかと口にするとその場から離れていく。

それから学園各地の状況も鎮静化して学生有志によるテロリスト捜索に参加した星空は学園横にある演習林にテロリストが潜んでいないか一人で散策する。

「さてと……司甲は先輩達が捕まえて、壬生先輩の誤解も解消された。でもって一番の懸念だったブランジユの本拠地の件も達也達のカウンセラーが何故か知っていたから僕が怪しまれることは無い。」

一人でそうぶつぶつと状況を呟く星空を周りは誰もいないから聞く人間は居らず。暫くして星空は立ち止まると既に誰も星空を見ていないのは知っているから魔法陣を堂々と展開する。

「十文字会頭が車を出すみたいだし、20分もしない内にブランジユ本拠地に到着するだろうから……ここからは時間との勝負かな？」

さてとやりますかとにやりと笑みを浮かべた星空は転移魔法で演習林から姿を消しその転移先であるブランジユ本拠地へと向かった。

入学編27

八王子の第一高からそこまで離れていない住宅街などから離れた
廃工場。

そこは誰も使われていないというのが表の事情だが実際はブラン
ジユ日本支部として使われていた。

そんな日本支部は今、先の第一高襲撃が失敗に終わったことから報
復を恐れてこちらの守りを厳重にしている真つ最中であり支部の入
り口には完全武装したテロリストが二人警備していた。

「流石に十師族の跡取りが二人もいる一高だな……あれだけの数を返
り討ちにするとは」

「こわいこわい。ここも割り出されるのも時間の問題なんだろう？」

「それまでに支部を移転するって話だ。もう候補には目を付けてるら
しい」

「だったら問題ないな」

なんとも緊張感もない会話をやり取りしているテロリストだが不
自然に茂みが揺れたことで警戒心が上がる。

「な、なんだ!？」

「ま、まさかもうここまで……」

動いた茂みに持っているライフルの銃口を向けると茂みを揺らし
たそれはテロリストの前に露わになる。

「つて、なんだよただの……」

茂みから出てきたそれを見て驚異だと勘違いしていたテロリス
トの警戒は緩み向けていた銃口を下げた瞬間。

その挙動と共に複数の水色の弾丸が生成から斉射されテロリス
トは後ろの門ごと吹き飛ばされ意識を失った。

まだ予定の範囲だった。

第一高の襲撃は失敗に終わったがそれはエガリテが主なメンバ
ーでその援護に出した構成員もどちらかと言えば捨て駒だった。

だからこそ司一の中ではまだ許容範囲内だった。少し前までは

…

少し前に響いた爆音。何事だと困惑する中、無線から侵入者と抗戦しているという通信が入ってきてブランチ支部が一気に緊張感を漂わせる。

だがその無線から来る報告はあまりにも奇怪な内容だった。

曰く、それはすばしっこく銃弾が当たらず。まるで砲弾に様に構成員に体当たりをして構成員を何回転もさせながら吹き飛ばした。

曰く、こちらの位置を全て把握しているかのように立ち回り奇襲な
どができない。

曰く、角で待ち構えていた構成員が突如として曲がった水色の弾丸の餌食となった。

などなどやられ具合を報告されていたが何より奇怪なのが…：人間ではないということ

それを聞いた司一は何を言っているんだ？頭がいかれたか？と本気で思ったが同じような報告が上がりその言葉の信憑性が出て来ると迫り来る未知な存在に恐怖心がこみ上げる。

ならば逆方向から逃げるべきかと今にも逃げ出したい気持ちに駆られるがそんな甘い状況でもなかった。

未知の敵に対して怖じ気づき一目散に逃げようとした構成員はいた。しかし施設の外に出た瞬間水色の弾丸の集中砲火に見舞われ逃げ出した構成員は断末魔をあげながら意識を刈り取られたと報告が上がったことで逃げることにすら出来なくなった。

万全の防備だと思っていた支部は今や袋の鼠とも言える状態になり。ブランチ構成員は迫り来る敵を身震いしながら待つことしか出来ない。

そして扉の向こうで断末魔が響き銃声が止んだことです。扉一枚向こうにそれが迫ってきていた。

息を飲む音すら聞こえるほど静粛な間が出来る中、遂にそれは司一達の居る部屋までやってきた。

閉じられていた扉が衝撃で吹き飛び部屋に土煙が舞う中。土煙の中からそれは出て来る。

一見すれば全く人間には害にもならない小柄な体型で寧ろ愛嬌がある。しかし今拠点を襲っているそれをみて困惑する中。銃口を構える構成員の一人が言葉を溢した。

「ほ、本当に子犬だ」

ありえないという感情に支配されながらそう呟くのも無理はなかった。

実際に土煙から出てきたそれは何処からどう見ても小型犬……しかも犬種はチワワだ。

首にアクセサリーを付けているがまごう事なきチワワ。

どうすれば待ち構えていた構成員を全て倒しきれるのかと頭の中で思考していると黙っていた司一は不敵に笑みを溢す。

「そうか……そういうことか……」

笑みを溢しながらそれを見て察した司一は周りに大声で応える。

「惑わされるな！これは精神干渉による攻撃だ！私達は精神干渉魔法により認識を誤認しているんだ！」

これなら納得がいくと、精神干渉魔法により自分達はチワワだと思いついて入っているが実は違う何かだと断定しチワワに内心怖じ気づく構成員を奮い立たせると直ぐに持っていたアンテナイトでキャストジャミングを展開しチワワにジャミング波が当たる。

「キャストジャミングだ！これで魔法は使えないし精神干渉を使い続けているのだから苦しいだろう？だったら」

完全に優位に立ったと息巻く司一にその言葉を嘲笑うかのようにチワワが可愛らしい鳴き声とともに動き出した。